宮古市埋蔵文化財調査報告書17
Archaeological Researches in Miyako

トロノ木Ⅰ遺跡
TORONOKI-Ⅰ Site

―第1次～第7次発掘調査報告書―
The Report on the 1st～7th Excauations

CONTENTS

Preface
Explanatory notes
Contents

Ⅰ. Introduction of the research 1

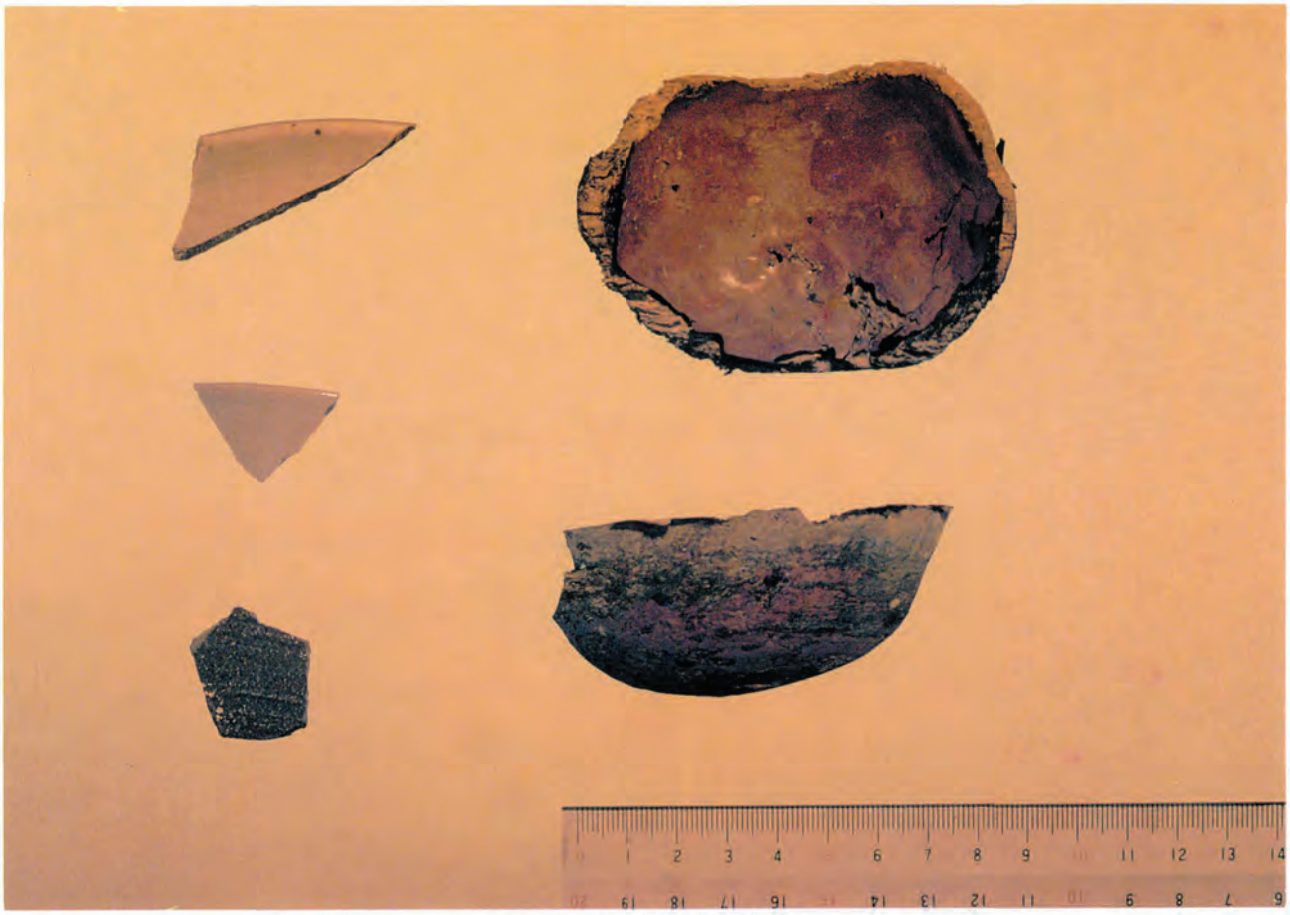
Ⅱ. Local environmental condition of Toronoki-Ⅰ Site 9

Ⅲ. Contents of the research 13

Ⅳ. Conclu sions reached in the research 57

Summary 67

1989. 3
岩手県宮古市教育委員会
The Board of Education Miyako, Iwate Pre.



トロノ木Ⅰ遺跡出土遺物

序　　文

トロノ木Ⅰ遺跡の存在する崎山遺跡群は、宮古湾の開口部に位置しますが、急崖を成す海岸線の向こうには果し無い太平洋を望むことができます。

付近の海域には、岩礁性魚類・貝類のほか、ウニ類、海藻類などの水産資源が豊富ですし、かつてはマグロ・カツオ・ブリなどの回遊魚の漁も盛んだったようです。また、丘陵上の森林では、山菜類・木の実・茸類が採れ、哺乳類やキジ・ヤマドリなども生息しています。

これらの食料資源に支えられた縄文時代の人々の食生活は、意外に充実したものであったことが指摘されており、食生活の安定は多様な文化的活動をもたらす母胎となったことでしょう。

崎山遺跡群内にはこうした縄文時代の人々が生活を営んだ遺跡が数多く存在し、比較的良好に保存されて来ています。しかし、近年は様々な開発行為に伴い遺跡が破壊される例が急増しています。宮古市では、これらの開発行為に先だち緊急調査を実施しております。

本書はトロノ木Ⅰ遺跡にて昭和55年度から昭和60年度の間に実施された第1次発掘調査から第7次発掘調査までの調査成果をとりまとめたものでありますが、調査の結果、縄文時代中期に伴う集落跡の一部と遺物包含層および近世に伴う掘立柱建物跡や井戸跡などを検出しています。

この中で特に縄文時代中期に伴う竪穴住居跡の炉は複式炉の最も古いタイプの一例として貴重な資料を提供することができました。また、近世の遺構についても当地方では比較的調査例の少ない時期を補う資料として注目されます。

本書が学術研究用としてのみではなく、広く一般の方々にも活用され、埋蔵文化財保護の一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査、資料整理および本書の作成にあたり指導や協力をいただきました関係各位に心より感謝申し上げ、序文といたします。

宮古市教育委員会教育長職務代理者

教育次長　鈴　木　哲　夫

例　　言

1．本書は昭和55年度から昭和60年度にかけて実施したトロノ木Ⅰ遺跡第1次発掘調査～第7次発掘調査の発掘調査報告書である。

2．発掘調査の主体は宮古市教育委員会（教育長　野口健造、小野寺聰）で、第1次発掘調査～第3次発掘調査を武田が、第4次発掘調査～第7次発掘調査を高橋がそれぞれ担当した。

3．本書の執筆は第1次発掘調査～第3次発掘調査分を武田が、他を高橋が担当し、編集は高橋が担当し、鎌田がこれを補佐した。

4．調査座標は任意とし、高さは標高値をそのまま使用した。

5．遺物の表現については下記のとおりとした。

繊維を含む土器、胎土

焼　土

石（断面図）

敲打磨石類の機能面

貝層及び自然遺物包含層

6．発掘調査および遺物の整理、報告書の作成に際しては次の方々から御教示、御指導をいただいた。記して謝意を申し上げる。（敬称略、所属は当時のもの）

瀬川　司男（宮古市立崎山中学校）
相原　康二（岩手県教育委員会文化課）
佐々木　勝（　　〃　　）
高橋　信雄（岩手県立博物館）
小田野哲憲（　　〃　　）
熊谷　常正（　　〃　　）
中村　良幸（大迫町教育委員会）
佐藤　正彦（陸前高田市立博物館）
斉藤　邦雄（野田町立野田小学校）
中嶋　　隆（宮古市在住）

7．本文の引用文献の略称は次のとおりとした。（いずれも宮古市教育委員会刊行）

1979　『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』小田野哲憲・熊谷常正→『大付報文79』

1983～86　『宮古市遺跡分布調査報告書 1～4』　武田将男→『分布調査 1～4』

1986　『宮古市遺跡分布図　昭和60年度版』　武田将男→『分布図86』

1987　『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』　上野猛→『崎山報文87』

1987　『崎山遺跡群Ⅰ　昭和61年度発掘調査概報』　高橋憲太郎→『崎山遺跡群Ⅰ』

1988　『崎山遺跡群Ⅱ　昭和62年度発掘調査概報』　高橋憲太郎→『崎山遺跡群Ⅱ』

1989　『崎山遺跡群Ⅲ　昭和63年度発掘調査概報』　高橋憲太郎→『崎山遺跡群Ⅲ』

目　　次

序　　文
例　　言
目　　次
Ⅰ．調査経過……1
1．崎山遺跡群内の発掘調査……1
2．調査の概要……2
3．調査体制……6
Ⅱ．遺跡群の位置と環境……9
1．位置と環境……9
2．崎山遺跡群とトロノ木Ⅰ遺跡……10
Ⅲ．調査内容……13
1．調査の方法……13
2．第1次調査～第4次調査……13
(1) 基本層序……13
(2) 遺構の検出状況……16
(3) 検出された遺構・遺物……16
3．第5次調査～第7次調査……47
(1) 遺構の検出状況……47
(2) 検出された遺構・遺物……47
Ⅳ．調査のまとめ……57
1．縄文時代の遺構と遺物……57
(1) 遺　構……64
(2) 遺　物……65
2．歴史時代の遺構と遺物……65
SUMMARY……67

図 版 目 次

第１図版　第１次調査区・堆積状況
第２図版　第２次調査区
第３図版　第３次調査区・堆積状況
第４図版　第４次調査区航空写真
第５図版　第１号竪穴住居跡
第７図版　第１号竪穴住居跡検出状況・堆積状況
第８図版　第１号竪穴住居跡炉・炉堆積状況
第９図版　第１号竪穴住居跡構築面の状況
第10図版　第１号竪穴住居跡出入口状況施設・土器埋設ピット
第11図版　第１号竪穴住居跡Ｐ$_{2}$堆積状況・Ｐ$_{8}$堆積状況
第12図版　第２号竪穴住居跡
第13図版　第２号竪穴住居跡検出状況・堆積状況
第14図版　第２号竪穴住居跡炉・炉堆積状況
第15図版　第３号竪穴住居跡炉構築面の状況・炉Ⅲ部
第16図版　第３号竪穴住居跡炉堆積状況・炉Ⅰ部検出状況
第17図版　第１号炭窯跡
第18図版　第１号炭窯跡堆積状況
第19図版　遺物包含層堆積状況（ 16 Line Section）・（ 18 Line Section）
第20図版　第６次調査区・堆積状況
第21図版　第５次調査　第１号掘立柱建物跡
第22図版　第１号掘立柱建物跡Ｐ$_{1}$　堆積状況・Ｐ$_{1}$漆器出土状況
第23図版　第１号掘立柱建物跡Ｐ$_{4}$　検出状況・Ｐ$_{4}$堆積状況
第24図版　第１号掘立柱建物跡Ｐ$_{10}$　堆積状況・Ｐ$_{12}$堆積状況
第25図版　第１号掘立柱建物跡Ｐ$_{14}$　堆積状況・Ｐ$_{15}$堆積状況
第26図版　第７次調査　第１号井戸跡検出状況・Ａ層堆積状況
第27図版　第１号井戸跡Ｂ層堆積状況・Ｂ層木材出土状況
第28図版　第１号井戸跡石組の状況・Ｃ層木材出土状況
第29図版　第１号井戸跡構築状況・第２号土坑跡検出状況
第30図版　第２号土坑跡堆積状況・現地説明会（第４次調査）

挿 図 目 次

第１図　位置図……5
第２図　崎山遺跡群と周辺の遺跡……7
第３図　地形分類図……8
第４図　表層地質図……9
第５図　調査区設定図……11・12
第６図　第４次調査区……14
第７図　第４次調査土層断面……15
第８図　第４次調査遺構配置図……17
第９図　第１号竪穴住居跡……19
第10図　第１号竪穴住居跡・炉……20
第11図　第１号竪穴住居跡出土土器(1)……22
第12図　第１号竪穴住居跡出土土器(2)……23
第13図　第１号竪穴住居跡出土石器(1)……24
第14図　第１号竪穴住居跡出土石器(2)……25
第15図　第２号竪穴住居跡……26
第16図　第２号竪穴住居跡出土土器・出土石器……27
第17図　第３号竪穴住居跡……29
第18図　第３号竪穴住居跡・炉……30
第19図　第３号竪穴住居跡出土土器・出土石器(1)……31
第20図　第３号竪穴住居跡出土石器(2)……32
第21図　第１号炭窯跡・第１号土坑跡……34
第22図　遺構外出土土器(1)……36
第23図　遺構外出土土器(2)……37
第24図　遺構外出土土器(3)……38
第25図　遺構外出土石器(1)……40
第26図　遺構外出土石器(2)……41
第27図　遺構外出土石器(3)……42
第28図　遺構外出土石器(4)……43
第29図　遺構外出土石器(5)……44
第30図　第５次、第６次、第７次調査区……45・46
第31図　第５次調査土層断面図……48
第32図　第６次調査土層断面図……49
第33図　第１号掘立柱建物跡平面図……51
第34図　第１号掘立柱建物跡土層断面図……52
第35図　第１号井戸跡平面図(1)……54

第36図　第１号井戸跡平面図(2)……55
第37図　第１号井戸跡土層断面図……56
第38図　竪穴住居跡集成図　１（本文関連資料）……61
第39図　竪穴住居跡集成図　２（本文関連資料）……63

挿　表　目　次

第１表　崎山遺跡群内発掘調査一覧表……1
第２表　崎山遺跡群の存続期間と立地……9
第３表　複式炉の形態分類……58

Ⅰ　調査経過

1．崎山遺跡群内の発掘調査

宮古市の北方に位置する崎山遺跡群には、崎山貝塚、大付遺跡（貝塚）、白石遺跡などの遺跡が多く存在することで知られ、市内でも最も調査件数の多い地域である。

古くは明治末年～大正時代にかけて、柴田常恵・小田島禄郎や地元の研究者中嶋吉兵衛等により大付遺跡・崎山貝塚の発掘調査が実施されている。この時期は、どちらかと言えば学術調査的性格が濃いが、人骨や骨角器・自然遺物が出土する貝塚に調査が集中している。これは市内の他の地区にも言えることであるが、時代の風調を反映したものと言える。

また、大付遺跡については岸上鎌吉により『Prehistoric Fishing in Japan』の中で自然遺物に関する記述がみられるほか、中嶋吉兵衛の『先史遺物帖』に骨角器や自然遺物の記述が見られるが、残念ながら未刊のままである。

続く昭和時代前半は中嶋の死や第２次世界大戦及び敗戦等がありほとんど調査らしいものは実施されていない。こうした状況は地元に研究者が育たなかったこともありほぼ昭和30年代頃まで続く。

昭和40年代頃から宮古市文化財保護審議会委員であった中嶋隆、田村忠博等により散発的ではあるが発掘調査が実施されるようになる。これらの大半が何らかの開発行為に伴う緊急調査であったが、調査の成果は全く公表されていない。また、行政側の文化財保護に対する立ち遅

No.	遺　跡　名	調査時期	調査者(担当者)	調査原因	調　査　成　果	報　告　書　等
1	大付遺跡	明43年頃	中嶋吉兵衛	学術調査	貝層，骨角器等	『先史遺物帖』
2	〃	大13年	柴田常恵・小田島禄郎	指定候補地の確認調査	貝層等	『岩手県東海岸の史蹟調査』(岩手日報連載)
3	〃　1次	昭53年	小田野哲憲・熊谷常正	個人住宅	屈葬人骨、竪穴住居跡等(晩期)	『宮古市大付遺跡』
4	〃　2次	昭54年	〃	範囲確認調査	遺物包含層(後～晩期)等	〃
5	〃	昭60年	武田将男・髙橋憲太郎	個人住宅	フラスコピット等(中期)	(未)
6	〃　3次	昭63年	高橋憲太郎	〃	土坑跡等(晩期)	『崎山遺跡群Ⅲ』
7	崎山貝塚	大13年	柴田常恵・小田島禄郎	学術調査	貝層、獣骨等	『岩手県東海岸の史蹟調査』(岩手日報連載)
8	〃	昭60年	上野　猛	宅地造成	土坑跡３基、遺物包含層	『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』
9	〃　1次	昭61年	高橋憲太郎他	範囲確認調査	自然遺物包含層(前期)等	『崎山遺跡群Ⅰ』
10	〃　2次	昭62年	〃	〃	貝層(前～中期)等	『崎山遺跡群Ⅱ』
11	〃　3次	昭63年	〃	〃	土坑群、住居跡群、立石等	『崎山遺跡群Ⅲ』
12	白石遺跡	昭51年	田村忠博	個人住宅(？)	土坑跡に伴う貝層等(中期)	(未)
13	〃　1次	昭61年	高橋憲太郎他	個人住宅	小土坑跡、遺物包含層等(前期)	『崎山遺跡群Ⅰ』
14	〃　(試)	〃	〃	〃	フラスコピット等(中期)	『崎山遺跡群Ⅱ』
15	〃　2次	昭62年	〃	〃	竪穴住居跡、５棟等(中期)	『崎山遺跡群Ⅱ』
16	〃　(試)	昭63年	盛合義信他	市道拡幅	遺構無し	(未)
17	トロノ木Ⅰ　1次	昭56年	武田将男	個人住宅	〃	(本書)
18	〃　2次	昭56年	〃	〃	〃	(〃)
19	〃　3次	昭57年	〃	〃	〃	(〃)
20	〃　4次	昭58,59年	高橋憲太郎	宅地造成	竪穴住居跡３棟等(中期)	(〃)
21	〃　5次	昭59年	〃	〃	掘立柱建物跡１棟(近世)等	(〃)
22	〃　6次	〃	〃	市道拡幅	遺構無し	(〃)
23	〃　7次	昭60年	〃	宅地造成	井戸跡１基(近世)等	(〃)
24	〃　8次	昭63年	〃	個人住宅	遺構無し	『崎山遺跡群Ⅲ』
25	トロノ木Ⅳ遺跡　1次	昭60年	盛合義信他	宅地造成	竪穴住居跡４棟等(中期)	『崎山貝塚・トロノ木Ⅳ遺跡調査報告書』
26	〃　2次	昭63年	上野　猛	〃	遺構無し	
27	〃　3次	昭63年	盛合義信他	〃	竪穴住居跡１棟等(中期)	(平２年度報告予定)
28	下在家Ⅱ遺跡　1次	昭63年	鎌田祐二	〃	土坑跡に伴う貝層等(時期不詳)	『下在家Ⅱ遺跡発掘調査報告書』

第１表　崎山遺跡群内発掘調査一覧表

れから調査さえ行われずに破壊されてしまった遺跡が多々ある。

昭和50年代以降は種々の開発行為の増加に伴い、調査体制の充実が望まれた時期である。昭和53年度の国庫補助による大付遺跡の発掘調査を経て昭和54年度から担当職員を配している。

しかし、近年の開発行為の激増と大規模化は特に著しいものがある。これらの開発行為は市街地の後背地である丘陵地などを対象とした再開発が主体となるため、ほとんどのものがそこに存在する遺跡の破壊につながってしまう。この結果、発掘調査も件数を増し大規模化してきている。特に崎山遺跡群の場合は、崎山貝塚・わたのは遺跡・古里工遺跡などの遺物の出土量が多い遺跡周辺は偶然にも交通網の整備が遅れていることなどから比較的良好な状態で保存されているが、逆に市道などの完備された白石遺跡・トロノ木Ⅰ遺跡・トロノ木Ⅳ遺跡などに開発行為が集中する傾向がある。一方、大付遺跡周辺は漁村として古くから集落が営まれた地区であり早くに宅地化してしまっており、現在ではどこに貝層があるのかも判然としない。近年、個人住宅建築に伴う小規模な発掘調査が実施されているが、今後も住宅の老朽化による建て替えなどにより調査件数が増加する可能性がある。

このような情勢の中で遺跡の保護を前提とした能動的な文化財保護を進めるために方法論を模策するとともに調査体制の再編成が急務となる。

2　調査経過（第5図）

トロノ木Ⅰ遺跡は宮古市の遺跡コードLG14－2048（Sa－24）として登録された周知の遺跡である。

本遺跡の発掘調査は昭和60年度までで7次を数えるが、いずれも何らかの現状変更に先だつ緊急調査で、計画的にあるいは継続的に実施したものではない。以下各々の調査に至る経過と査の概要を記す。

○第1次調査

調 査 地 点　宮古市大字崎山第3地割字トロノ木7

調 査 原 因　個人住宅建築

調 査 期 間　昭和56年2月13日～2月23日、3月17日～3月18日

調査対象面積　1,357㎡

調 査 面 積　124㎡

検 出 遺 構　無　し

出 土 遺 物　縄文土器片

調査の概要　調査区は幅4mのトレンチを南北方向に24m、東西方向に16mの2本とした。調査の結果、東西トレンチの東端部で表土と地山の間に堆積する暗褐色土（木炭粒を少量含む）の中から縄文土器片が若干量出土したのみで、遺構は検出されなかった。

○第2次調査

調 査 地 点　宮古市大字崎山第3地割字トロノ木16－4

調 査 原 因　個人住宅建築

調 査 期 間　昭和56年５月21日～５月27日

調査対象面積　907㎡

調 査 面 積　180㎡

検 出 遺 構　無　し

出 土 遺 物　縄文土器片、石鏃

調査の概要　調査地点は、第１次調査区の南約50ｍに位置し、尾根上の道路から南東方向に下る緩斜面で、畑地として利用されていたために２段の平担面が造成されていた。調査区は各平担面上とこれに直交する斜面方向にトレンチを設定した。

調査の結果、切土、盛土による旧地形の改変が認められた。遺物は暗褐色土中から縄文土器片少量と石鏃が１点出土したのみで、遺構は検出されなかった。

○第３次調査

調 査 地 点　宮古市大字崎山第３地割トロノ木15

調 査 原 因　個人住宅建築

調 査 期 間　昭和57年３月20日、３月30日～３月31日

調査対象面積　383㎡

調 査 面 積　56㎡

検 出 遺 構　無　し

検 出 遺 物　無　し

調査の概要　調査地点は第２次調査区の南西に隣接する平担な荒地である。調査区は幅３ｍのトレンチを斜交して設定した。

調査の結果、切土、盛土による旧地形の破壊が著しく、遺物、遺構は見られなかった。

○第４次調査

調 査 地 点　宮古市大字崎山第３地割字トロノ木

調 査 原 因　宅地造成(吉田龍司)

調 査 期 間　昭和58年９月28日～12月23日

調査対象面積　2,743㎡

調 査 面 積　1,636㎡

検 出 遺 構　縄文時代中期に伴う竪穴住居跡３棟・土坑跡１基・遺物包含層・時期不明の炭窯跡１基

出 土 遺 物　縄文土器(前期～後期)、石器など

調査の概要　(後述)　昭和58年12月19日に現地説明会を実施している。

○第５次調査

調 査 地 点　宮古市大字崎山第3地割字トロノ木
調 査 原 因　宅地造成(吉田龍司)
調 査 期 間　昭和58年10月1日～10月8日、昭和59年3月26日～4月24日
調査対象面積　1,305㎡
調 査 面 積　476㎡
検 出 遺 構　近世に伴う掘立柱建物跡1棟
出 土 遺 物　陶磁器片、漆片、鉄片など
調査の概要　(後述)

○第6次調査
調 査 原 因　市道拡幅(宮古市建設課)
調 査 期 間　昭和59年3月5日～3月19日
調査対象面積　250㎡
調 査 面 積　232㎡
検 出 遺 構　無　し
出 土 遺 物　縄文土器片など
調査の概要　(後述)

○第7次調査
調 査 原 因　宅地造成(菅原和也、山口産業－山口登)
調 査 期 間　昭和60年6月17日～7月6日
調査対象面積　2,929㎡
調 査 面 積　1,195㎡
検 出 遺 構　近世に伴う井戸跡1基・時期不明の土坑跡1基
出 土 遺 物　陶磁器片、漆器、鉄片など
調査の概要　(後述)

3．調査体制

発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体	野口　健造	宮古市教育委員会教育長	(昭和59年12月まで)
〃	小野寺　聰	〃	(昭和63年12月まで)
調査総括	谷口　忠一	宮古市教育委員会社会教育課長	(昭和58年3月まで)
〃	藤田　利美	〃	(昭和60年3月まで)
事務担当	大沢　祐幸	宮古市教育委員会社会教育係長	(昭和56年3月まで)
〃	若狭健一郎	〃	(昭和59年3月まで)
〃	佐々木孝夫	〃	(昭和63年3月まで)
調 査 員	武田　将男	宮古教育委員会社会教育課主事	(第1次～第3次調査)

青森市
八戸市
雨滝遺跡
馬場野遺跡
中曽根遺跡
蒔前台遺跡
馬場平遺跡
久慈市
二子貝塚
根井貝塚
N 40°
長者屋敷遺跡
水切場遺跡
茂師貝塚
森の越遺跡
日戸遺跡
大舘町遺跡
柿ノ木平遺跡
つなぎ遺跡
盛岡市
崎山遺跡群
(トロノ木1遺跡)
宮古市
鍬ヶ崎舘山貝塚
磯鶏貝塚群
閉伊川
津軽石川
西田遺跡
大地渡遺跡
観音堂遺跡
田ノ浜貝塚
崎山弁天貝塚
鳩岡崎遺跡
九年橋遺跡
滝ノ沢遺跡
長谷堂貝塚
大洞貝塚
宮野貝塚
N 39°
蛸の浦貝塚
陸前高田市
門前貝塚
中沢浜貝塚
中島遺跡
東裏遺跡
草ヶ沢遺跡
田柄貝塚
北上川
貝鳥貝塚
糖塚貝塚
前浜貝塚
青島貝塚
長根貝塚
素山貝塚
天雄寺貝塚
上深沢遺跡
南境貝塚
大松沢貝塚
沼津貝塚
勝負沢遺跡
西ノ浜貝塚
里浜貝塚
大木囲貝塚
仙台市
湯坪遺跡
上川名貝塚
槻木貝塚
N 38°
E 142°
1：1,400,000
70km

第1図 位 置 図

調 査 員　高橋憲太郎　宮古市教育委員会社会教育課主事（第４次--第７次調査）

調査の実施にあたり次の方々から多大な御協力をいただいた。

〈地権者等〉　畠山清、工藤勇吉、沢田貞雄、吉田龍司、山口産業（山口登）、菅原和也
宮古市建設課

〈発掘調査〉　杉田功、船越久五郎、徳永ナミ子、蘇武ミドリ、畠山タキ、大坂忠夫
大越貞蔵、小林門太、豊島保之助、村上一男、大井芳夫、及川文夫
渡辺満、阿部豊、松原勇平、佐伯祐則、伊藤嘉邦、大久保賢市
成ヶ沢英一郎、関川興治、佐々木茂、吉田昭、吉浜勝郎、木村秀男外の皆さん

〈整理作業〉　鈴木美奈子、佐々木朋子、山野目崇子、菊池昌子

II　遺跡の位置と環境

１、宮古湾沿の遺跡群（第３図）

宮古湾東岸

太平洋に向かい北東に開口する宮古湾は、東岸が津軽石断層崖で限られ直線的な海岸線となっており、湾に注ぐ小河川も少ないことから平担地は少なく、山地が海岸線まで迫っている。このため、遺跡の分布は少なく重茂半島閉伊崎周辺の鮭ヶ崎丘陵上にわずかに縄文時代を中心とする遺跡が分布する。また、東岸中央部から湾奥部にかけては白浜・堀内・小堀内区の小起伏山地やこれに続く緩斜面上に縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代などの遺跡が分布している。

宮古湾西岸

これに対し西岸は、洪積世の海岸段丘が隆起した標高100ｍ前後の丘陵地帯が形成されており、北から小本丘陵、千徳丘陵、八木沢丘陵、豊間根丘陵などに分けられている。これらの丘陵は小河川などによる開析が進んでいるため平面形態は樹枝状を呈し複雑に入り組んでいる。

また、西岸の中央部付近には閉伊川とその支流により形成された平担地が存在し、河岸段丘、谷底平野、氾濫平野などにより構成されるものの、河岸段丘の発達は他の河川に比べて極めて悪く、いずれも小規模で面的な連続性はない。しかし、河口部付近の氾濫平野（閉伊川底地）は比較的発達しており、現在の市街地をのせている。

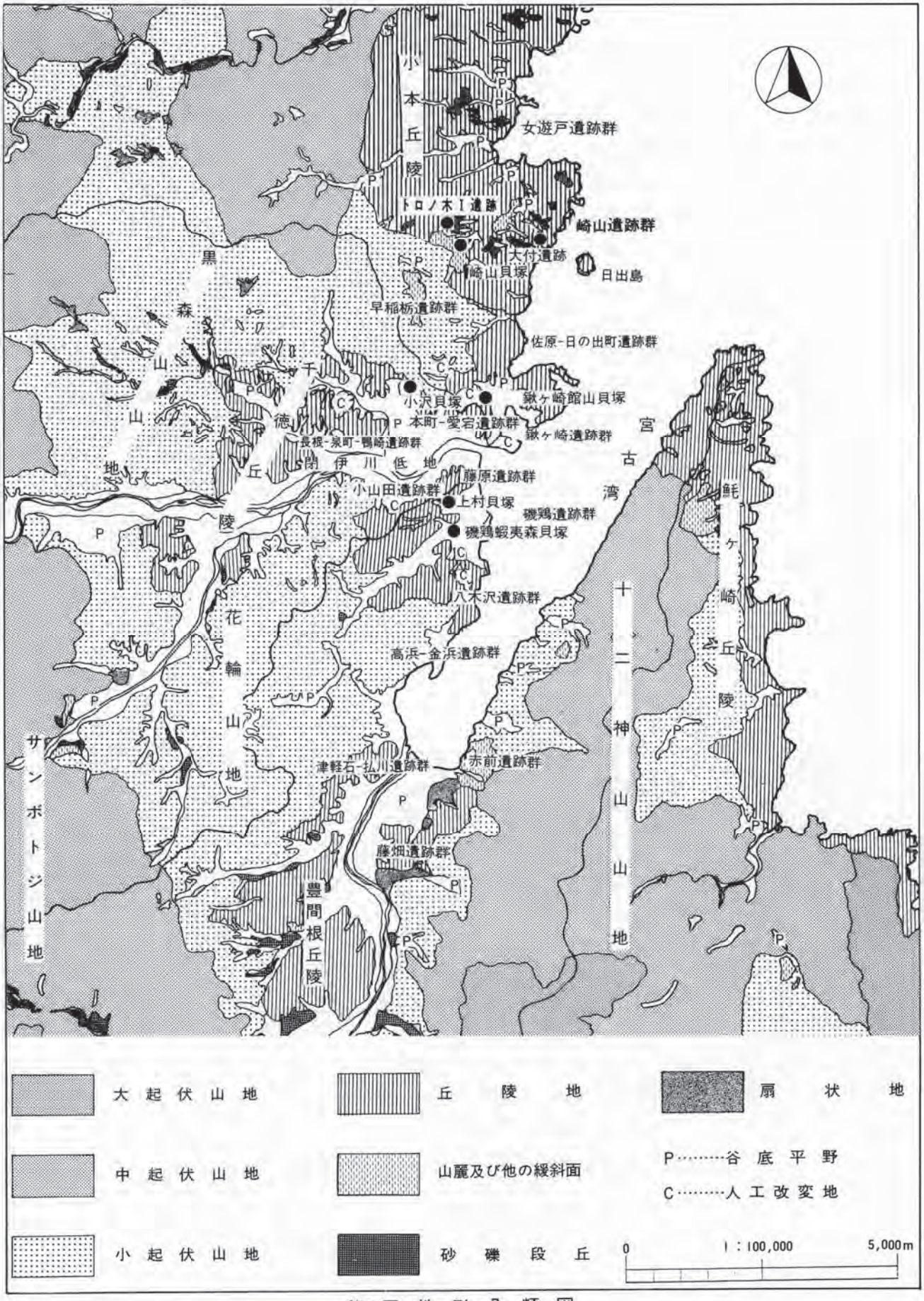
西岸の遺跡群

西岸に存在する遺跡群は比較的多く、小本丘陵上やこれに連続する小起伏山地などに立置する「女遊戸遺跡群」、「崎山遺跡群」、「早稲栃遺跡群」、「佐原－日の出町遺跡群」、「鍬ヶ崎遺跡群」、「本町－愛宕遺跡群」などがあり、これらの南には八木沢丘陵上やこれに連続する小起伏山地（花輪山地）上などに立置する「小山田遺跡群」、「藤原遺跡群」、「磯鶏遺跡群」、「八木沢遺跡群」、「高浜－金浜遺跡群」などが分布している。

更に津軽石川が注ぐ湾頭部付近は豊間根丘陵上などに遺跡が分布しているが、東岸の「赤前遺跡群」や「藤畑遺跡群」と西岸の「津軽石－払川遺跡群」に分けられる。

縄文貝塚

これらの遺跡群は縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・中世・近世などの遺跡から成るが、まづ注目されるのが縄文時代の貝塚群であろう。すなわち、崎山貝塚・大付遺跡（以上崎山遺跡群）・鍬ヶ崎館山貝塚（鍬ヶ崎遺跡群）・小沢貝塚（小沢遺跡群）・上村貝塚・小沢田貝塚・蝦夷森貝塚（以上磯鶏遺跡群）などが知られる外、遺構に伴った小規模な貝層を有する遺


小本丘陵
女遊戸遺跡群
トロノ木Ⅰ遺跡
崎山遺跡群
大付遺跡
崎山貝塚
日出島
黒森山地
早稲栃遺跡群
佐原-日の出町遺跡群
千徳丘陵
小沢貝塚
鍬ヶ崎館山貝塚
本町-愛宕遺跡群
鍬ヶ崎遺跡群
長根-泉町-鶴崎遺跡群
閉伊川低地
藤原遺跡群
小山田遺跡群
上村貝塚
磯鶏遺跡群
磯鶏蝦夷森貝塚
八木沢遺跡群
高浜-金浜遺跡群
花輪山地
十二神山山地
鮭ヶ崎丘陵
サンポトジ山地
津軽石-払川遺跡群
赤前遺跡群
藤畑遺跡群
豊間根丘陵
宮古湾
大起伏山地
中起伏山地
小起伏山地
丘陵地
山麓及び他の緩斜面
砂礫段丘
扇状地
P……谷底平野
C……人工改変地
0
1：100,000
5,000m

第2図 地形分類図

跡が存在する。これらの貝塚群は気仙地方の貝塚群や北上川下流域の主淡産貝塚などと並び、本県における主要な貝塚集中地帯となっている。

古代の遺跡

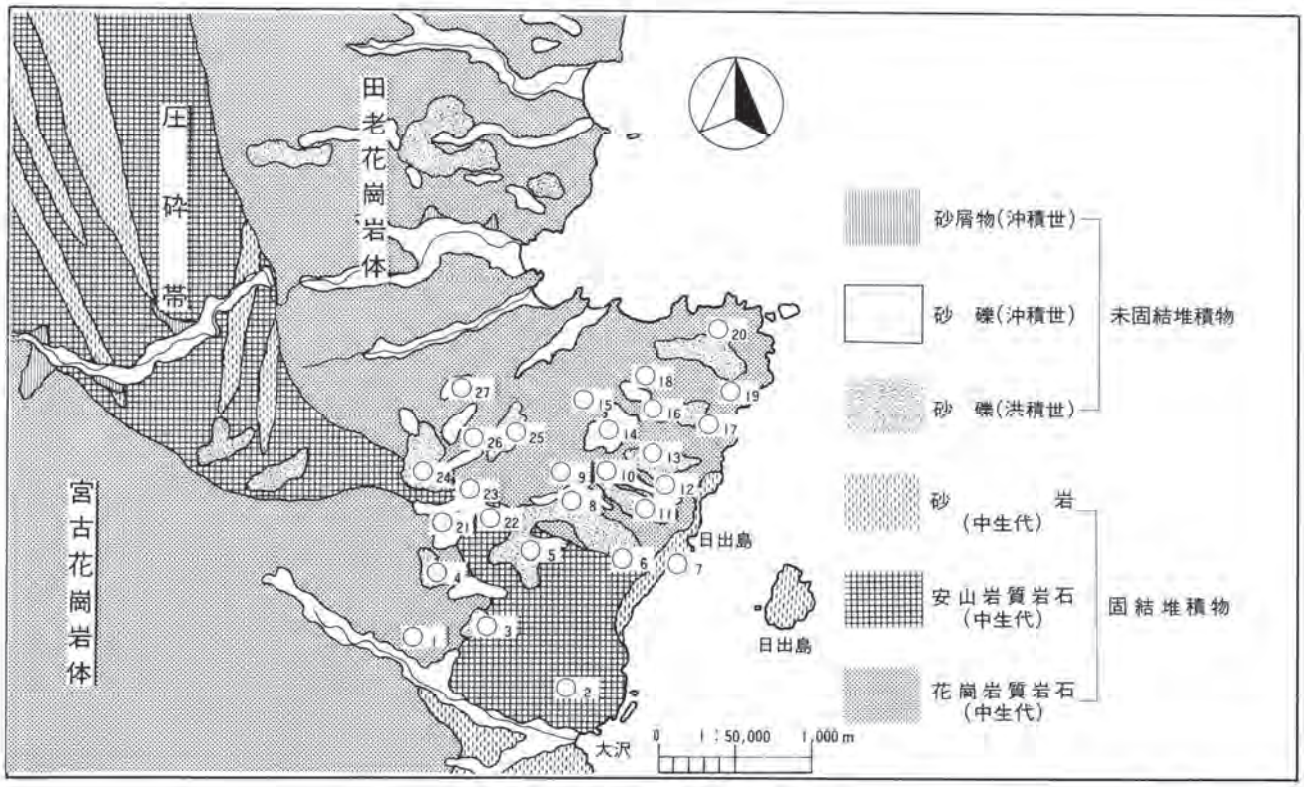
次に注目されるのが、閉伊川流域～八木沢川流域～津軽石川流域の丘陵地帯などに分布する奈良時代・平安時代の遺跡群であろう。弥生時代～古墳時代の遺跡が極端に少ないのに対し、該期の遺跡数は激増している。集落の立置については丘陵や小起伏山地の開析された狭い尾板上やこれに続く急斜面上に存在するものと、丘陵に続く緩斜面上や洞状地などに存在するものの２者に分類される。

昭和63年度に調査が実施された長根Ⅰ遺跡からは奈良時代以降かと思われる群集墳が検出され、太刀・わらび手刀・立鼓刀・和同開寳・ガラス玉などの副葬品が伴出しており特筆される。

中世・近世に関しては市内に約30ヶ所存在する城館跡が上げられるが、これ以外の遺跡（例えば屋敷跡や集落跡）などに関しては調査件数が少なく今後の調査の蓄積が望まれる。

製鉄関連遺跡

最後に当地方を特徴づける遺跡のひとつとして製鉄に関係するものが上げられよう。古くは、古代の〝たたら跡〟から近世の〝鉄山跡〟までとこれらに伴う〝鍛冶遺構〟などがあり、時期あるいは遺跡毎に性格や内容が異なるようである。発掘調査により炉（製錬炉・鍛冶炉）などの遺構が検出されている遺跡もあり、今後とも十分な調査が望まれる。



第3図 表 層 地 質 図

2．崎山遺跡群（第２図～第４図）

崎山遺跡群は宮古湾の湾口部西岸に位置し、北は中の浜から南は大沢までの範囲である。

現在、崎山遺跡群には28ヶ所の遺跡が確認されているが、縄文時代早期～晩期のものが主体となり弥生時代以降のものは極めて少ない。

小本丘陵

崎山遺跡群の立置する丘陵は小本丘陵と呼ばれる。小本丘陵は、西側の山地とは明瞭な高度不連続線をもって限られ、崎山遺跡群付近での標高は海岸線沿いで約90ｍ、西例の山地寄りで約150ｍとほぼ平担で、海に向かってゆるやかに傾斜している。

この小本丘陵は、洪積世の海岸段丘が（相対的に）隆起して生じたものであり、基盤は中生代に迸入した深成岩類（田老花崗岩体、宮古花崗岩体）およびこれにより圧砕され変質した安山岩質岩石（陸中層群－原地山層）や白亜紀前期の化石を産出する砂岩など(宮古層群)、洪積世の段丘堆積物や沖積世の現河床堆積物、崖錐堆積物などからなる。

安山岩質岩石や花崗岩類は一般に風化の度合が著しく、表層において前者は粘土化、後者はマサ土化が進行している。

小本丘陵の頂部には一部段丘面を残すところもあるが、段丘の原面は開析が進み、丘陵の尾根の部分として取残されていたり、段丘堆積物がすでに失われていたり、あるいは基盤岩が露出していたりと保存状態は極めて悪い。

遺跡の多くは、わずかに残った段丘面や緩斜面上あるいは開析の進んだ狭い尾根上やこれに隣接する洞状地に立置している。前者は比較的規模の大きなものが多いが後二者は小規模なものが多い。

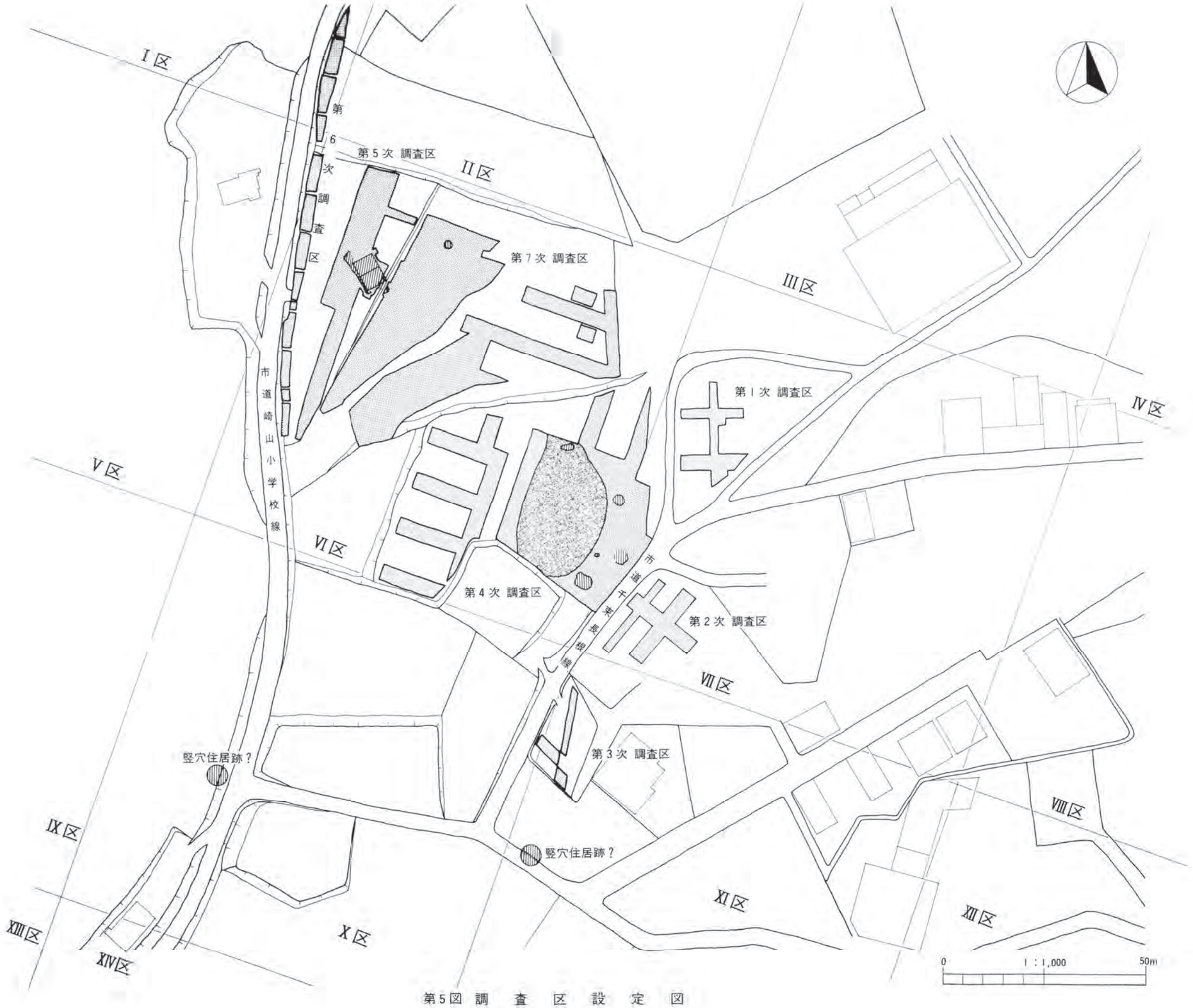
トロノ木Ⅰ遺跡は崎山貝塚の北に隣接し、段丘面（砂礫段丘Ⅰ）上に立置する。分布調査では縄文時代中期中葉を中心とする土器片や男根状の石製品などが報告されている（『分布調査１』）。また、遺跡内の市道や側溝などの断面に竪穴住居跡と思われる落込みが確認されており、該期の集落の存在が予想されていた。

No	遺跡コード	遺　跡　名	縄文早期	前　期	中　期	後　期	晩　期	弥生時代以降	立　置　等
1	LG 24－0057	大石遺跡							緩斜面
2	0177	長磯遺跡							尾根上
3	0142	塚場遺跡							小規模な緩斜面～谷底平野
4	0018	下在家Ⅰ遺跡							緩斜面
⑤	LG 14－2195	白石遺跡							砂礫段丘Ⅰ
⑥	2291	大付遺跡(貝塚)							砂礫段丘Ⅰ～緩斜面
7	2294	日出島遺跡							小規模な緩斜面～谷底平野
8	2157	萩沢Ⅱ遺跡							谷底平野(洞)～緩斜面
9	2137	萩沢Ⅰ遺跡							緩斜面
10	2230	潮吹Ⅲ遺跡							尾根上
11	2262	わたのは遺跡							砂礫段丘Ⅰ
12	2253	潮吹Ⅰ遺跡							〃
13	2232	潮吹Ⅱ遺跡							〃
14	2119	古里Ⅰ遺跡							緩斜面
15	1198	古里Ⅱ遺跡							小規模な緩斜面(洞)
16	2203	古里Ⅲ遺跡							砂礫段丘Ⅰ
17	2206	古里Ⅳ遺跡							〃
18	1282	古里Ⅴ遺跡							尾根上
19	1288	大崎山遺跡							砂礫段丘Ⅰ
20	1247	姉ヶ崎遺跡							小規模な緩斜面
㉑	20 9	崎山貝塚						弥生、平安	砂礫段丘Ⅰ～谷底平野
22	2127	千束長根遺跡							谷底平野(洞)
23	2050	トロノ木Ⅱ遺跡							〃
㉔	2048	**トロノ木Ⅰ遺跡**						近世	砂礫段丘Ⅰ
25	2123	トロノ木Ⅲ遺跡							尾根上
㉖	2121	トロノ木Ⅳ遺跡							〃
27	2099	トロノ木Ⅴ遺跡							尾根上～谷底平野(洞)
28	LG 24－0130	下在家Ⅱ遺跡						古代以降	尾根上

第２表　崎山遺跡群の存続期間と立地（○印のものは第１表参照）

女遊戸遺跡群
トロノ木Ⅰ遺跡
崎山貝塚
14古里Ⅰ遺跡
5白石遺跡
6大付遺跡
崎山遺跡群
日出島
大沢
佐塚
日の出町
1
2
3
4
7
8
9
10
11
12
13
15
16
17
18
20
21
22
23
24
25
26
27
28

第4図 崎 山 遺 跡 群


I区
II区
III区
IV区
V区
VI区
VII区
VIII区
IX区
X区
XI区
XII区
XIII区
XIV区
第6次調査区
第5次 調査区
第7次 調査区
第1次 調査区
第2次 調査区
第3次 調査区
第4次 調査区
市道崎山小学校線
市道堀ノ内線
竪穴住居跡？
竪穴住居跡？
0
1：1,000
50m

第5図 調 査 区 設 定 図

Ⅲ　調査の内容

1．調査の方法とグリッド配線（第５図）

発掘調査は、宅地造成などにより破壊される部分のすべてを対象としたが、遺構や遺物の希薄な地点はトレンチのみにとどめた。

調査時点では、周辺に公共座標を落した基準点が無かったので、地形にあわせて任意に座標軸を設定した。座標軸は真北より21°47′東へ偏している。また、高さについては標高値をそのまま使用している。

調査にあたり、本遺跡全体を100ｍメッシュに切り、これを大グリッドとした。大グリッドは東西４グリッド×南北４グリッドの計16グリッドであり、Ⅰ区～Ⅻ区と呼称することにした。第１次～第７次調査区はⅠ区・Ⅵ区・Ⅶ区・Ⅺ区内に位置する。さらにこの大グリッドを４ｍメッシュに区切り小グリッドとした。小グリッドは発掘調査の際に単位となるグリッドであるが必要に応じて２ｍメッシュに細分することとした。

小グリッドの呼称については大グリッドを西から東へＡ～Ｙ、北から南へ１～25とし、北西隅の点をもって小グリッドの名称とした。

2．第１次～第４次調査（第５図～第６図）

Ⅵ区・Ⅶ区・Ⅵ区に位置する。尾根上に設けられた市道（千束長根線）に沿って第１次～第４次調査を実施したが、前述したように第１次～第３次調査では検出遺構が無く、遺物の出土量も極めて少なかったので第４次調査を中心に述べる。

(1)　基本層序（第７図）

第４次調査区の基本層序は６層に大別される。

Ⅰ層は表土（耕作土）であり、やや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし塊状の褐色埴壌土や暗褐色埴壌土を含む。やや柔らかくしまりのない層だが土器片や炭化物粒などを含む。

Ⅱ層は暗褐色土層でありⅠ層に類似するもやや明るい。混入土の状況などにより次の３層に細分される。

Ⅱａ層　やや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし塊状の褐色埴壌土を含む。やや柔らかくしまりのない層だが土器片や炭化物粒などを含む。

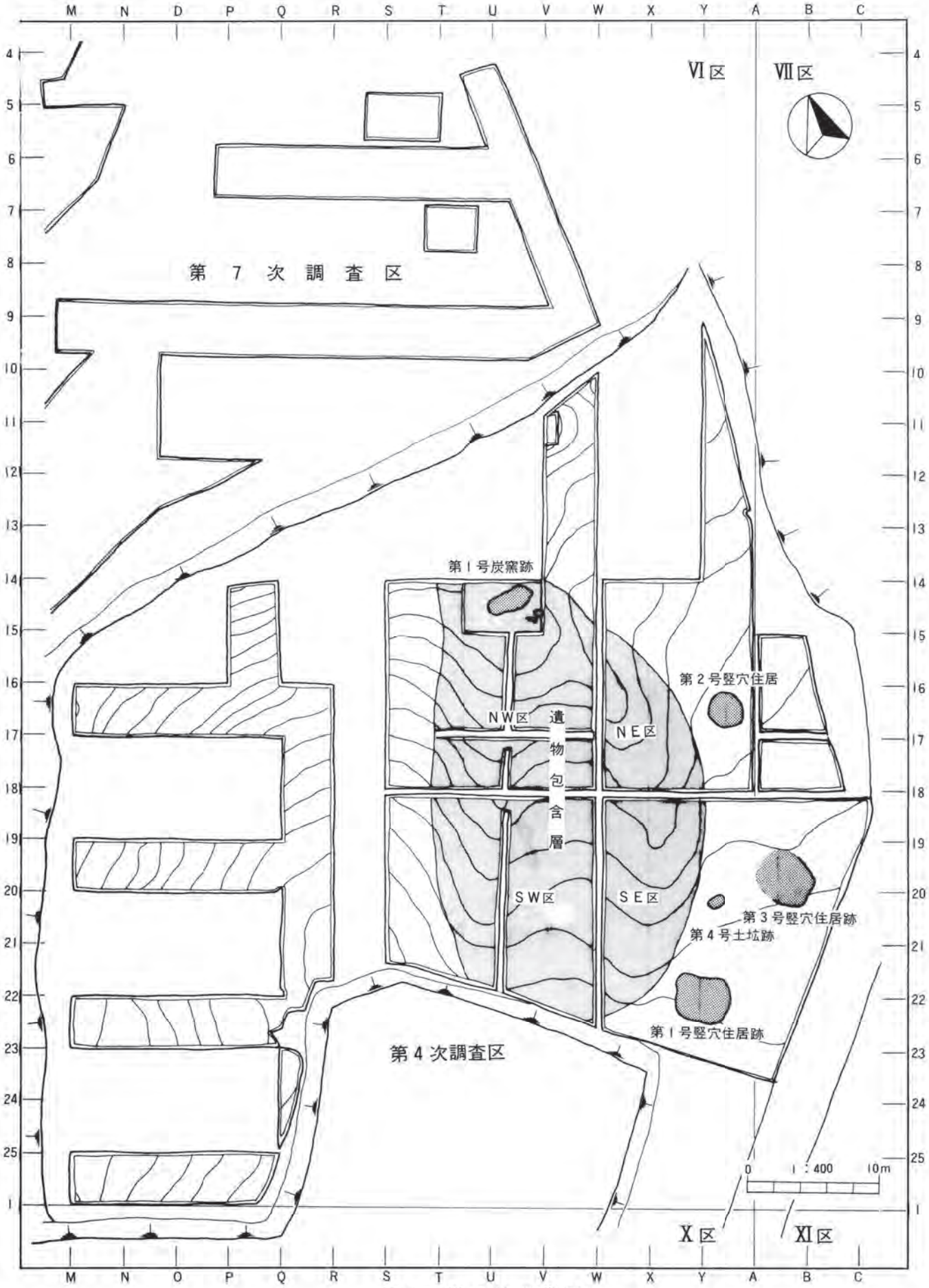
Ⅱｂ層　黒褐色の埴壌土～シルト質埴壌を基本土とし混入土はほとんど含まれていない。多量の炭化物粒を含む。

Ⅱｃ層　やや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし塊状の褐色埴壌土や暗褐色埴壌土を多く含む。柔らかくしまりのない層で、土器片や炭化物粒などを含む。

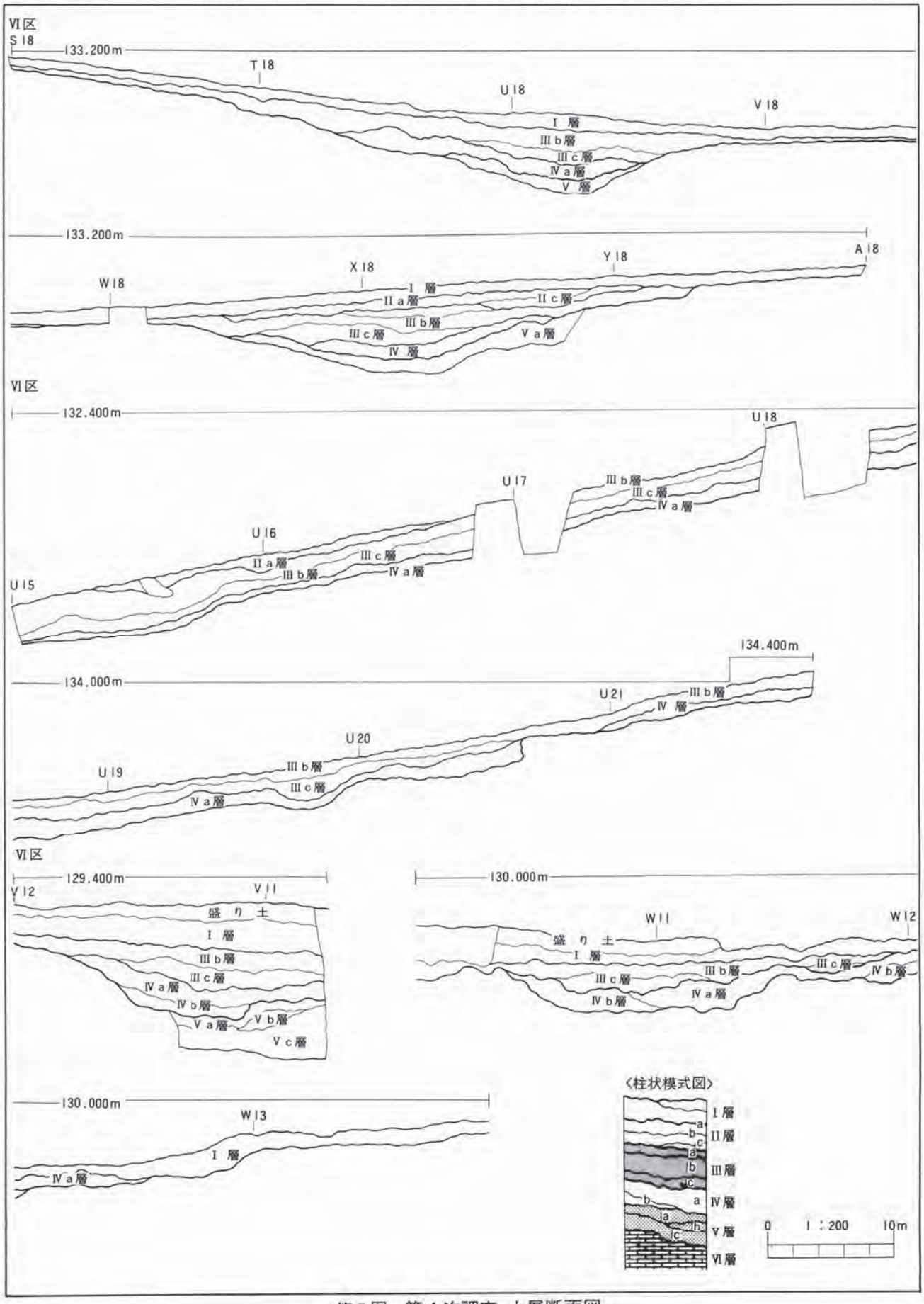
Ⅲ層はやや赤味の強い褐色土層で混入土の状況などにより次の３層に細分される。

Ⅲａ層　やや赤味の強い褐色埴壌土を基本土とし、やや明るい暗褐色埴壌土を含む。

Ⅲｂ層　やや赤味の強い褐色埴壌土を基本とし塊状のやや明るい褐色埴壌土や暗褐色埴壌土を多く含む。やや柔らかくしまりのない層で炭化物粒を含む。全層を通して遺物の包含量の最も多い層である。


M N D P Q R S T U V W X Y A B C
VI区
VII区
第 7 次 調 査 区
第1号炭窯跡
第2号竪穴住居
NW区
遺物包含層
NE区
SW区
SE区
第3号竪穴住居跡
第4号土坑跡
第1号竪穴住居跡
第4次調査区
0 1:400 10m
X区
XI区
M N O P Q R S T U V W X Y A B C

第6図 第 4 次 調 査 区



第7図　第4次調査 土層断面図

Ⅲｃ層　赤味のある褐色埴壌土を基本土とし、やや明るい褐色埴壌土やにぶい黄褐色埴壌土を多く含む。やや柔らかくしまりのない層で土器片や炭化物粒をわずかに含む。下面はⅣ層へ漸移的に推移している。

Ⅳ層はやや黄味の強い褐色土を基本土とする漸移層であるが混入土の状況などにより次の２層に細分される。

Ⅳａ層　黄味のあるやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色土塊などを多く含む。また、斜面の下位では径20㎜程度の小角礫や地山の風化した砂～粒状の褐色土（真砂土（サマサド））をやや多く含んでいる。やや柔らかくしまりのない層でわずかに土器片を含む。

Ⅳｂ層　黄味のあるやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の黄褐色埴壌土などを含む。固いがしまり具合は中程度である。部分的に堆積する層で、斜面の下位にのみ分布する。遺物は全く含まれない。

Ⅴ層は地山層であるが、基盤岩の風化の進行により粘土化したもので遺物は全く含まれていない。次の３層に細分される。

Ⅴａ層　粘性の強い黄褐色埴壌土層で固いがあまりしまりがない。

Ⅴｂ層　やや明るい褐色粘土層で砂～粒状の褐色土（真砂土）や角礫を含む。やや柔らかくあまりしまりがない。

Ⅴｃ層　やや明るい褐色粘土層で砂～粒状の褐色土（真砂土）を上層より多く含むほか角礫を多く含む。固さは中程度であり、あまりしまりがない。

Ⅵ層も地山層であるが風化の進んだ基盤岩の表層である。砂～粒状の褐色土（真砂土）層である。

(2)　遺構の検出状況（第６図、第８図）

第４次調査区内から検出された遺構は、縄文時代に伴う竪穴住居跡３棟、土坑跡１基および谷に形成された遺物包含層と時期不明の炭窯跡１基である。

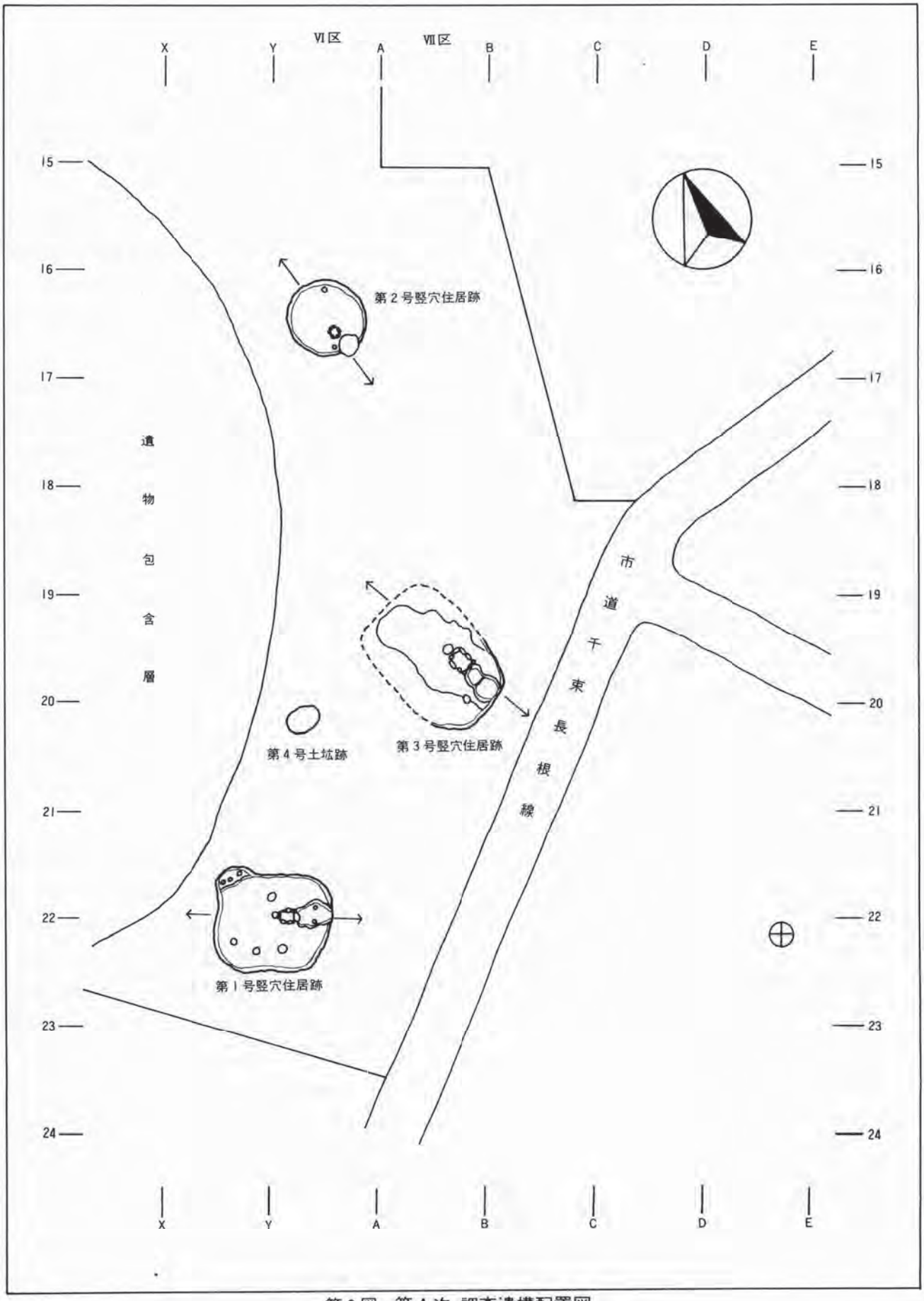
縄文時代の遺跡

縄文時代の遺構は、市道千束長根線をのせる尾根上にあり一つのまとまったブロックを形成している。尾根上は堆積層の発達が悪く、表土直下がⅤ層となっているためⅤ層上面で遺構を検出した。これらの掘り込みは概して浅く第３号竪穴住居跡は周壁の大部分が削平され失われていた。この尾根の西側に小規模な谷が２本入っており前述したようなⅡ層～Ⅵ層の堆積層が確認されている。このうち遺物包含層はⅡ層～Ⅲ層であり、Ⅳ層から出土した土器は型式的にまとまっているようである。しかし、遺物包含層は傾斜がきつく、土器も完形品が全く無くいずれも破片であることは２次的堆積である可能性も考慮する必要があるかもしれない。

遺物包含層

遺物包含層下位のＴ14、Ｕ14グリッドのⅡ層上面から炭窯跡を検出している。

また、遺物包含層の形成された谷の西側も再び尾根となっているが、ここからは遺構、遺物が全く検出されなかった。



第8図　第4次 調査遺構配置図

(3) 検出された遺構と遺物

第１号竪穴住居跡（第９図～第14図）

Ⅵ区のＸ21、Ｙ22、Ｙ22グリッドにかけて検出した。

平面形

平面形は、西壁の一部をカクランにより欠くが不整方形で北隅に張り出しを持つ。主軸方向はW20°Nである。規模は長軸4.5ｍ×短軸3.5ｍを計る。壁高は0.2ｍであるが南壁でやや浅く0.1ｍとなり、全体にゆるやかに立ちあがる。

埋　土

埋土はＡ層とＢ層の２層に大別される。Ａ層はＢ層に比して暗い色調を呈し、炭化物粒などを含む。Ａ１層は粘性のあるやや暗い褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土や炭化物粒などを含む。また、土器片をやや多く含む。やや柔らかくあまりしまりのない層である。Ａ２層は粘性のあるやや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土や褐色埴壌土をやや多く含むほか土器片、炭化物粒、焼土塊などもやや多く含む。

Ｂ層はやや明るい褐色埴壌土などを基本土とし、次の４層に細分される。Ｂ１層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などを少量含むほか土器片をやや多く含むが炭化物粒はほとんど含まない。固いがしまり具合は中程度である。Ｂ２層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などや土器片を含むが炭化物粒はほとんど含まない。固いがしまり具合は中程度である。Ｂ３層は炉のⅡ部とⅢ部を覆う層で褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色土を含むほか炭化物粒を少量含む。やや固くしまり具合は中程度である。Ｂ４層は炉Ⅱ部の炉床を覆う層で褐色埴壌土を基本土とし、塊状のやや明るい褐色埴壌土や焼土塊をやや多く含むほか炭化物粒を少量含む。

床面は平担で全体に固くしまっているが貼床は認められない。

複式炉

炉は石組複式炉で南東壁の中央よりやや北寄りに位置する。炉の各部をⅠ部～Ⅲ部とし説明する。

Ⅰ部は径0.20ｍ～0.25ｍ、深さ0.05ｍの浅い皿状のピットで、径0.25ｍほどの不整５角形を呈する自然岩で蓋をされたように覆われていた。Ⅰ部の皿状ピット内部には灰や焼土粒をわずかに含む炭化物層（Ｄ層）が堆積していたが、底面や壁は全く焼成を受けていない。

Ⅱ部は長軸0.8ｍ、短軸0.55ｍを計る長方形の石囲炉で、0.15ｍ～0.45ｍの角礫～亜角礫を用いて炉を囲み、Ⅰ部とⅢ部の境にそれぞれ長い礫を用い区画している。Ⅱ部の埋土はＣ層であるがこれは本来は炉の構築土である。Ｃ層上面が炉床となるが、焼け具合により３層に細分した。Ｃ１層は暗赤褐色埴壌土を基本土とし、塊状のにぶい赤褐色埴壌土などをわずかに含む。焼床を成す層であり焼成を受け固くしまっている。Ｃ２層は焼土の浸透層で、やや明るい褐色埴壌土を基本土とし、特に上面がにぶい赤褐色となっている。固いがしまり具合は中程度である。Ｃ３層は褐色埴壌土を基本土とし焼土粒をわずかに含む。固いがしまりのない層である。

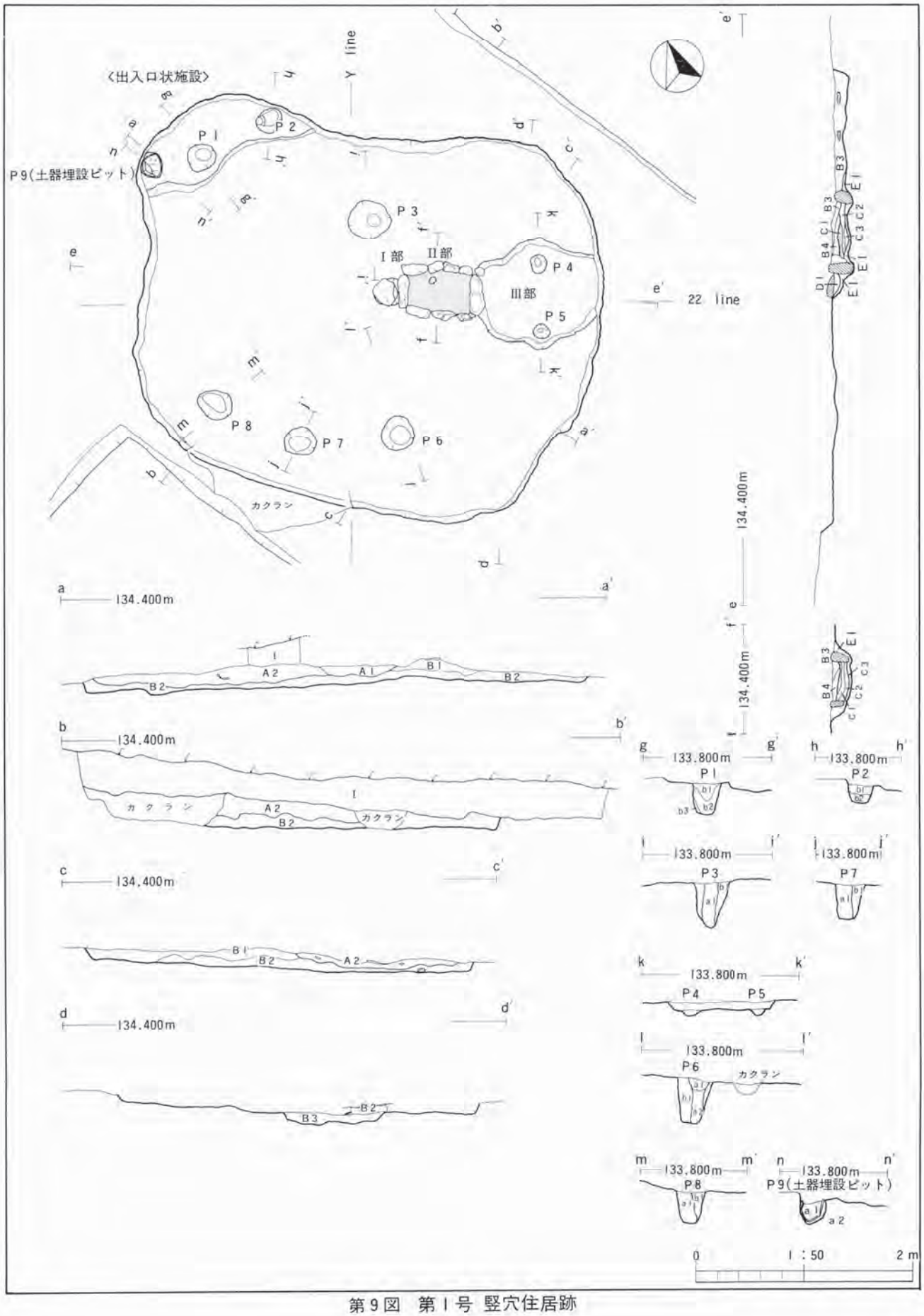
Ⅲ部は長軸1.1ｍ、短軸1.0ｍ、深さ0.1ｍを計る不整だ円形の浅い掘り込みで、径0.15ｍ、深さ0.05ｍ程の小ピットP_4、P_5が伴う。またⅢ部の端部は竪穴住居跡の周壁と接し、これを共有している。

炉の製作工程

炉の構築土を断ち割ったところ次のような工程が観察された。

①Ⅰ部～Ⅲ部の全体を掘り込み、炉石のすえ方も掘り込む。

②炉石をすえ構築土（Ｅ層）をつめる。



第9図　第1号 竪穴住居跡

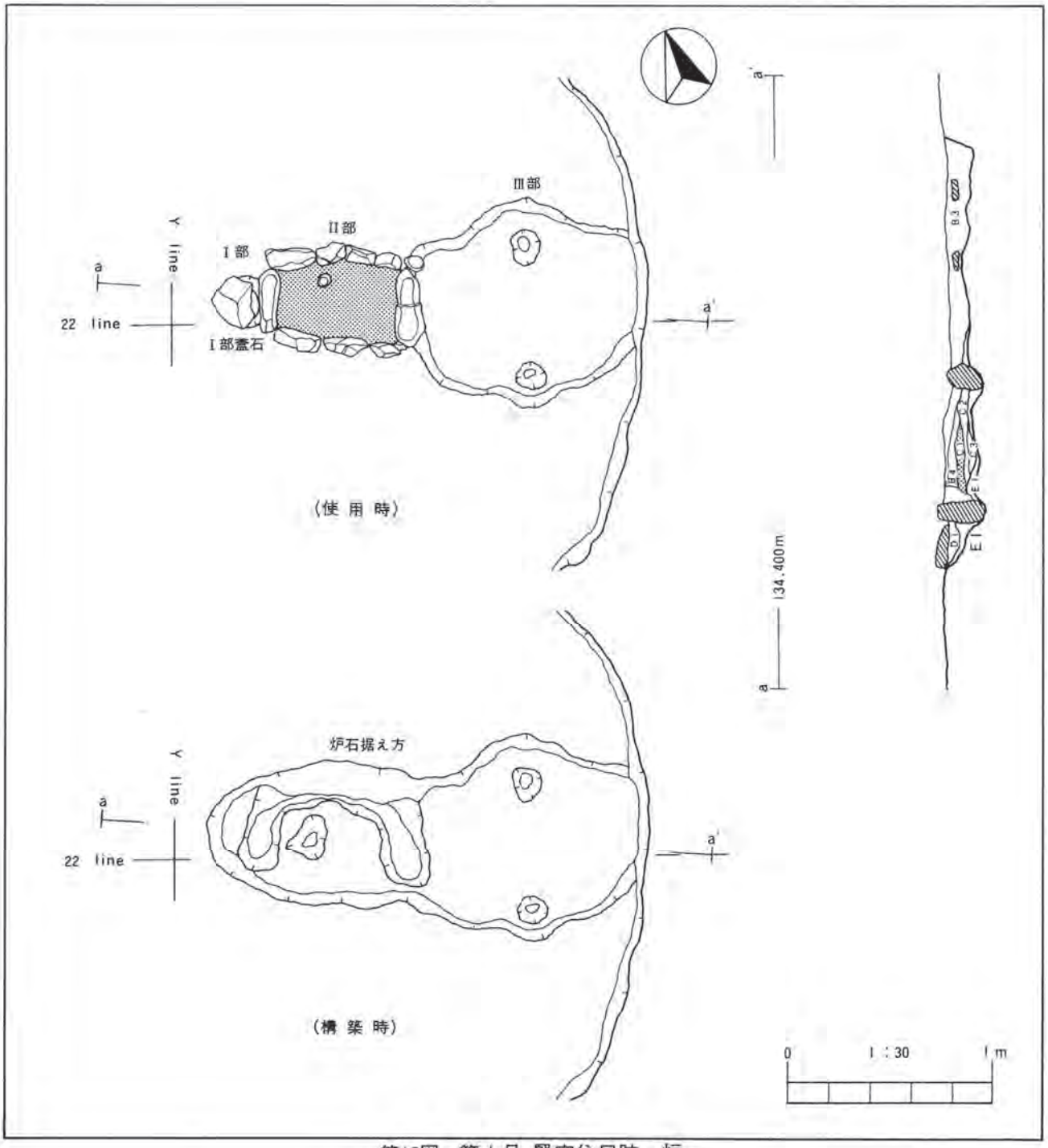
③II部の炉床（C層）を構築する。

④使用する→I部部に炭化物や灰など（D層）が堆積し、II部に焼土層ができる。

以上である。

出入口状施設　炉と反対側の北隅は弧状に張り出し、床面より0.05mほど高くステップ状となっている。この張り出しには柱穴2口（P_1、P_2）と土器を埋設したピット（P_9）を伴っている。また、土層断面の観察や柱穴配置などにより張り出し部は第1号竪穴住居跡に伴う出入口状の施設であると想定された。（後述）

土器埋設ピット　出入口状施の西端部には土器を埋設したピット（P_9）が伴う。この土器は第11図1に示し



第10図　第1号 竪穴住居跡・炉

たが底部を欠き、口縁部を床面からわずかに出し正立に埋設されていた。欠損したものの再利用と思われ、体部も欠落した部分が多い。

柱　穴

柱穴はP$_1$～P$_3$、P$_6$～P$_8$の6本が主柱に相当する。P$_1$とP$_2$は径0.25m、深さはP$_1$で0.3m、P2で0.2mとやや小規模だが、他のものは径0.3m～0.4m、深さ0.3m～0.4mを計る。いずれも柱当りがあり、掘り方よりもやや暗い褐色埴壌土や暗褐色埴壌土を基本土とするしまりのない層が堆積している。掘り方はやや明るい褐色埴壌土などをつめ、固いがあまりしまりがない。

遺物出土状況

遺物は出土量があまり多くないが、竪穴住居跡に伴うものとしては第11図1のP$_9$埋設土器と、第13図9および第14図13の炉石に転用された石器がある。埋土からはほぼ全層にわたり遺物が含まれるがA2層とB2層から出土したものがやや多い。また、検出面としたものは検出時に出土したもので、A1層～B2層のものが混じっている。

〈土器〉　1は口縁部の内湾する深鉢で、口唇部～口縁部に隆沈線により施文される退化した文様帯を持つ。体部にも隆沈線により懸垂文などを施すが、体部文様帯の上端や中位に有蘞過巻文などを配し、これらの連結により縦位の区画文を作出し、全体的に閉鎖性の強い施文となっている体部の地文はR－1単節斜縄文を縦方向に回転させている。1と同様なものは16～18などがある。

22～24、36なども口縁部の内湾する深鉢であるが、隆沈線により大渦巻文などを施文する。大渦巻文は小渦巻文や懸垂文など他の文様単位との連絡により曲線的な区画文を作出しているが、やはり全体的には閉鎖性を増す施文である。

3は体部上半から口縁部が外反し、体部下半が球形に膨らむ器形を呈する深鉢である。隆沈線により施文された口縁部文様帯は退化し、また、これの上位の無文帯も幅が狭く退化している。体部文様帯も隆沈線により小渦巻文や懸垂文を施文するが、他の文様要素との連絡により縦位の区画文を作出している。

2は底部付近のみが残るものであるが、L－R単節斜縄文のみを施すものである。

18、47は沈線により施文されるものであるが、他のものはほとんどが隆沈線により渦巻文や懸垂文などが施文される。これらのうちで37、42は体部文様帯上端または口縁部文様帯に連続刺突文を施す。また、4・5・8・9・11・12・22～25・36・38・40・41・43～46、は口縁部を折り返しなどにより肥厚させ、複合口縁としたものである。

〈石器〉　出土量は少ない。1は有柄の石鏃で先端部と基部を欠く。尖頭部はやや幅が広く、基部の作り出しが明瞭である。

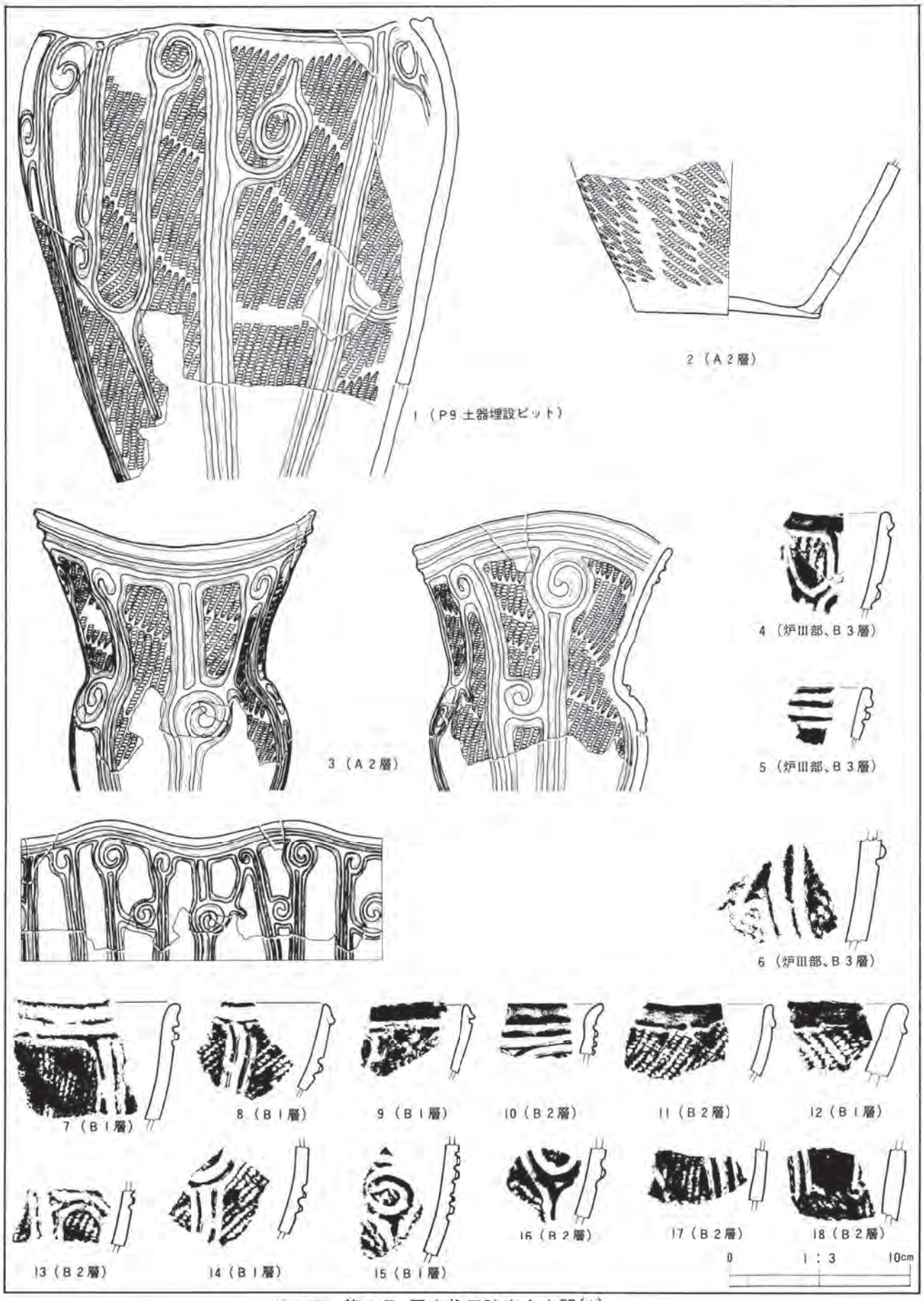
2～4は使用痕を有する剥片である。2は断面三角形を呈する片面の一側縁に、3は剥片の下端部に、4は一側縁にそれぞれ使用痕がみられる。

5は径5cmほどの小円礫の上下両端から加撃するもので片面に大きく自然面を残す。側縁には全く手がつけられていない。石核と楔形石器の両者の可能性が考えられる。

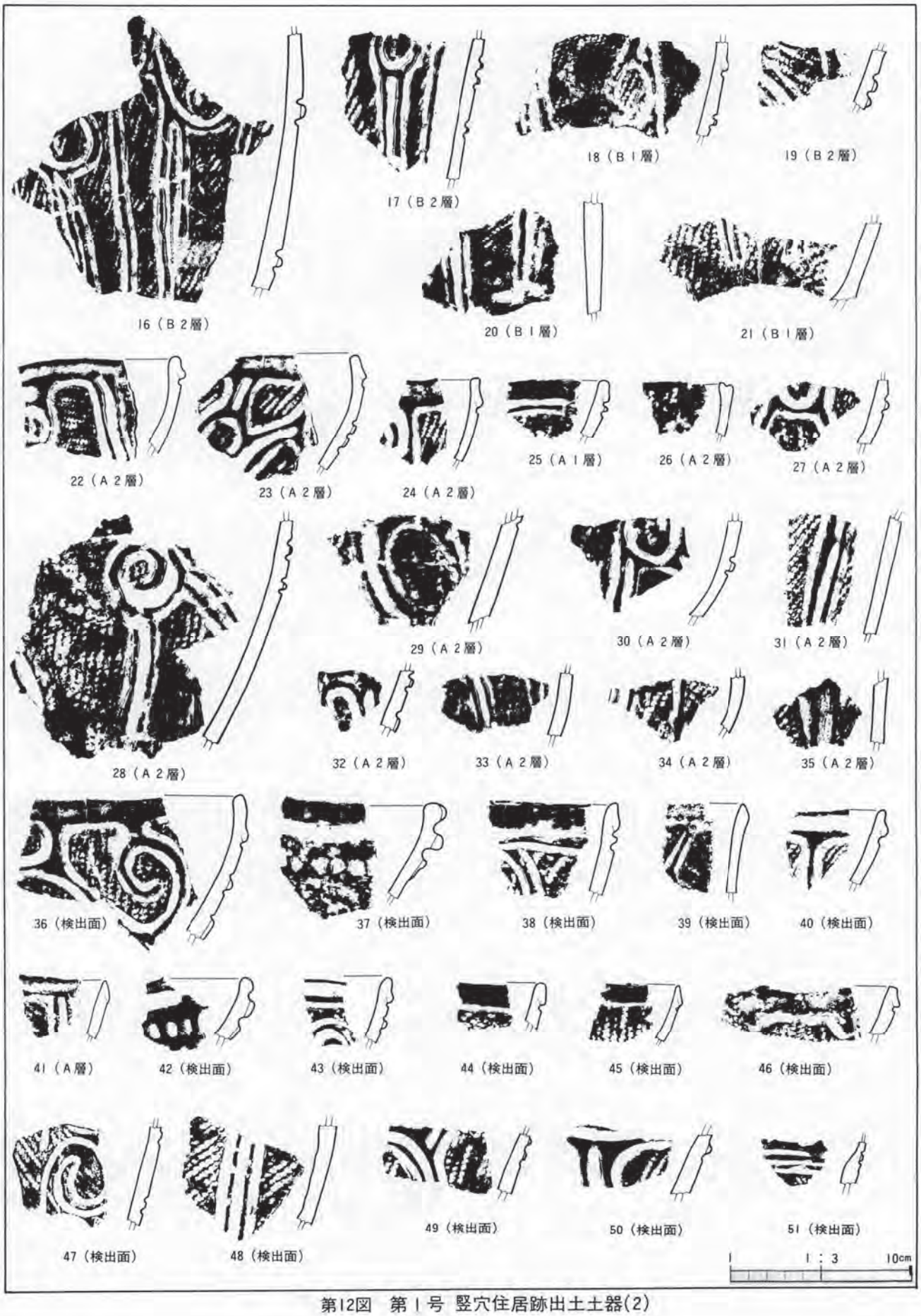
7は礫器で、だ円形の自然礫の一方に粗い調整を施し、片刃の刃部を作り出している。

8・14は敲打磨石に類似するものであり、だ円形の扁平礫の側縁に敲打磨石様の機能磨面を有するほか、8は端部に敲石様のダメージを有し、14は平担面上に凹石様のダメージを有する。

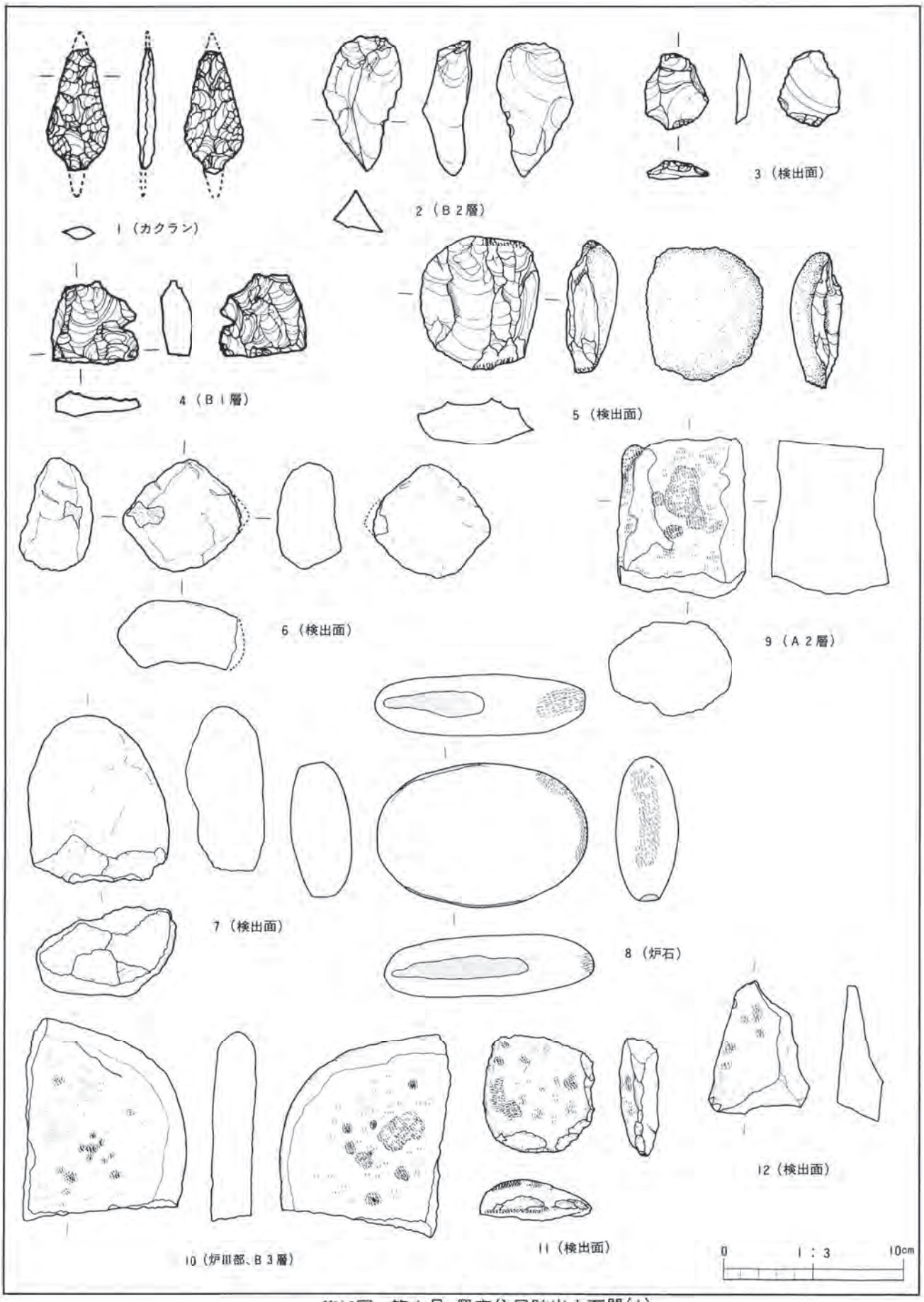
10・13は石皿である。10は砂岩質の素材を用いる小形のもので両面に使用面があり凹石様の



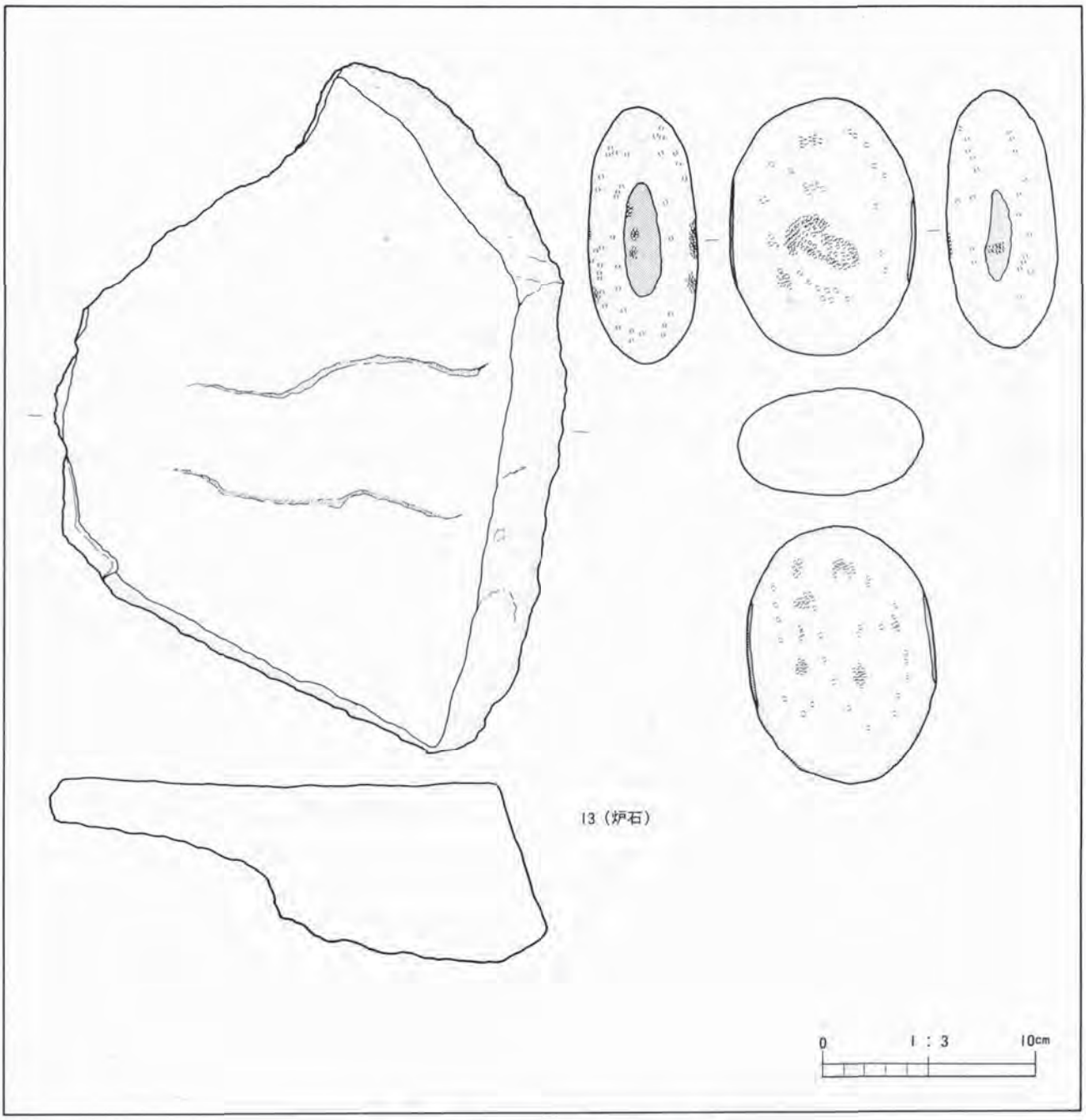
第11図　第1号 竪穴住居跡出土土器(1)



第12図　第1号 竪穴住居跡出土土器(2)



第13図　第1号 竪穴住居跡出土石器(1)



第14図　第1号 竪穴住居跡出土石器(2)

ダメージを有する。13は安山岩質の素材を用いる大形のものである。

11・12は砂岩質の素材を用いるもので砥石かと思われるが、12は石皿片の可能性もある。

〈土製品〉

6は不整四角形を呈するもので、表面が丁寧に整形されている。性格や用途は不明であるが粘土塊が偶然に焼成をうけたものではなく目的的に製作されたものと思われる。

〈石製品〉

9は石棒の破片であり、上下端部を欠く。表面には整形時敲打痕がみられる。また、凹石様のダメージもみられ、欠損後に再利用されたものと思われる。

第２号竪穴住居跡（第15図）

Ⅵ区Ｙ16グリッドに検出した。

平面形　平面形は不整円形で、東西2.7ｍ、南北3.0ｍを計る。壁高は南側付近で0.15ｍであるが、他は0.10ｍ～0.05ｍとかなり浅くややゆるやかに立ち上がる。炉の方向により主軸方向はN10°15′Wである。

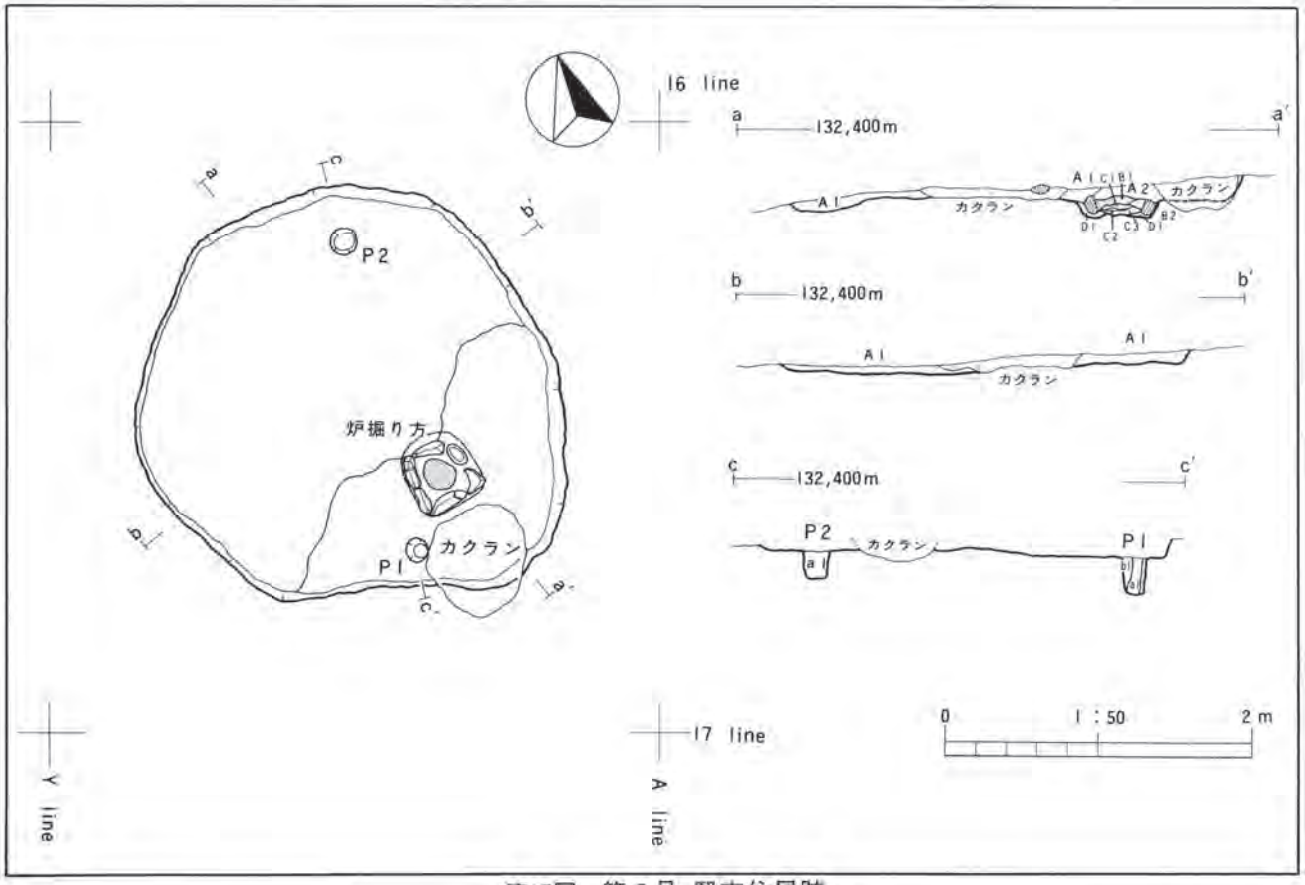
埋　土　埋土は褐色埴壌土を基本土とするＡ層であるが次の２層に細分される。

Ａ１層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状のやや明るい褐色埴壌土を多く含むほか、土器片や炭化物粒を含む。やや固くあまりしまりのない層である。Ａ２層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の塊色埴壌土を含むほか炭化物粒を含む。

床面はほぼ平担であるが、一部でカクランにより凹凸がある。また、炉より南側の床面は特に固い。

石組炉　炉は石組炉で0.45ｍほどの方形を呈すが、平面位置は極端に南側に寄っている。炉の構築土はＢ層、Ｃ層、Ｄ層である。Ｂ層は焼土層であり上面が炉床となるが非常に良く焼けている。Ｃ層は浸透層であり、Ｄ層は全く焼土を含まない層である。

柱　穴　柱穴は２口のみであり、北側のものをＰ$_2$、南側のものをＰ$_1$とした。いずれも径0.18ｍ、深さ0.20ｍ～0.25ｍを計る。Ｐ$_1$は柱当り（ａ１層）と掘り方（ｂ１層）を確認しているがＰ$_2$は柱当りを確認できなかった。



第15図　第２号 竪穴住居跡

遺物は出土量が少なく大半がＡ１層から出土している。

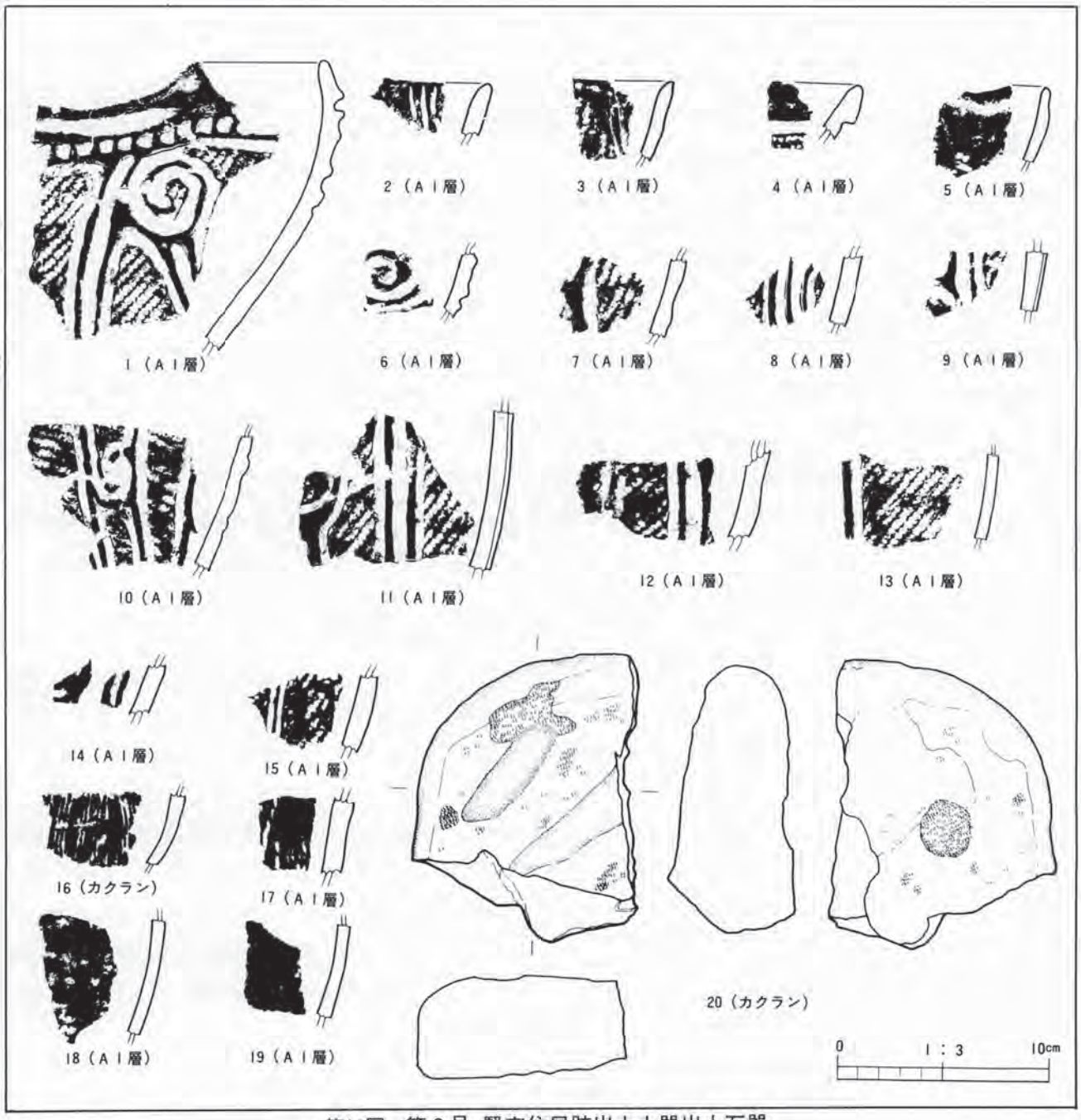
遺物出土状況

〈土器〉　１、４、６～14は隆沈線により施文されるが，小渦巻文を伴う懸垂文を施すものが多い様である。

２、３、15は沈線により施文される。２は第３号竪穴住居跡から出土した第19図１に類似するものであろう。

16は櫛目文、17は撚糸文、18、19は地文のみを施すものである。

〈石器〉　20は石皿で、砂岩質の素材を用いる。一面に溝状の磨面とダメージを、もう一面に凹石状のダメージを有する。



第16図　第２号 竪穴住居跡出土土器出土石器

第３号竪穴住居跡（第17図～第20図）

第Ⅵ区Ａ20、Ｂ19、Ｂ20グリッドにかけて検出した。

平面形

北半部が削平されており全体の形状は不明であるが、平面形は不整方形であるいは多角形を呈するものと思われる。規模は南北で5.0ｍ以上、東西で3.7ｍ以上を計る。壁高は南壁付近で0.25ｍを計りほぼ直に立ち上がる。

主軸方向はＮ33°15′Ｗである。

埋　土

埋土はＡ層とＢ層の２層に大別される。Ａ層はＢ層より明るく、土器片をやや多く含むが炭化物粒はほとんど含まれず、２層に細分される。Ａ１層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などをやや多く含み、柔らかくしまりのない層である。土器片をやや多く含む。Ａ２層はＡ１層よりやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などを含み、固さは中程度でしまりのない層である。土器片を含むがＡ１層よりは少ない。

Ｂ層は褐色埴壌土を基本土とし、２層に細分される。Ｂ１層はやや明るい暗褐色埴壌土をを基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などをやや多く含み、やや柔らかくしまりのない層である。炭化物粒を少量含む。Ｂ２層は暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土、やや暗い暗褐色埴壌土などを含み、固さは中程度でしまりのない層である。炭化物を少量含む。

複式炉

炉は南壁の中央よりやや東寄りに位置する。石組複式炉であるが、炉の各部をⅠ部～Ⅲ部とし説明する。

Ⅰ部は径0.3ｍ、深さ0.15ｍのピットで、壁の一部に土器片を貼り付ける。底面も、壁面も周囲の床面も全く焼成を受けていない。Ⅰ部に堆積する層はＤ１層であるが、やや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土や暗褐色埴壌土などを多く含む。固さは中程度であるがしまりのない層で、炭化物粒をわずかに含むものの焼土粒は全く含まない。

Ⅱ部は長さ0.85ｍの不整方形を呈する。炉石はすべて抜き取られており、抜き取り穴には褐色埴壌土を基本土とするしまりのないＣ層が堆積する。炉床の上には暗褐色埴壌土を基本土とし、焼土塊をやや多く含むＥ１層が堆積している。焼土層はＥ２層でにぶい赤褐色埴壌土を基本土とし赤褐色埴壌土などを含む。Ｅ２層上面が炉床であるが、比較的良く焼け、固くしまっている。

Ⅲ部は長軸1.5ｍ、短軸0.65ｍを計る掘り込みで、南壁には接するが、Ⅱ部からはわずかに分離している。Ⅲ部は平面形および掘り込みの深さからⅢａ部とⅢｂ部に細分される。Ⅲａ部は、ほぼ炉床と同じレベルであるがⅢｂ部はこれよりやや高くなっている。また、Ⅲｂ部付近に長軸0.6ｍ、短軸0.5ｍの不整五角形を呈する自然石があり、Ⅲｂ部の底面や壁面に接していた。

Ⅰ部とⅡ部は同一の掘り方を持ちＦ層をもって構築されていた。Ｆ１層は褐色埴壌土を基本土とし、やや明るい褐色埴壌土などを少量含む。やや固いがしまりのない層である。Ｆ２層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、褐色埴壌土をやや多く含む。やや固いがしまりのない層で、上面がＥ２層（焼土層）に接し一部赤変（浸透）していた。Ｆ３層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、ほとんど混入土を含まない。やや固いがしまりのない層である。全層ともわずかに炭化物粒を含む。

床面は平担でやや固い。特に固い床は中軸線上に東西2.7ｍ、南北5.0ｍの不整形に広がって

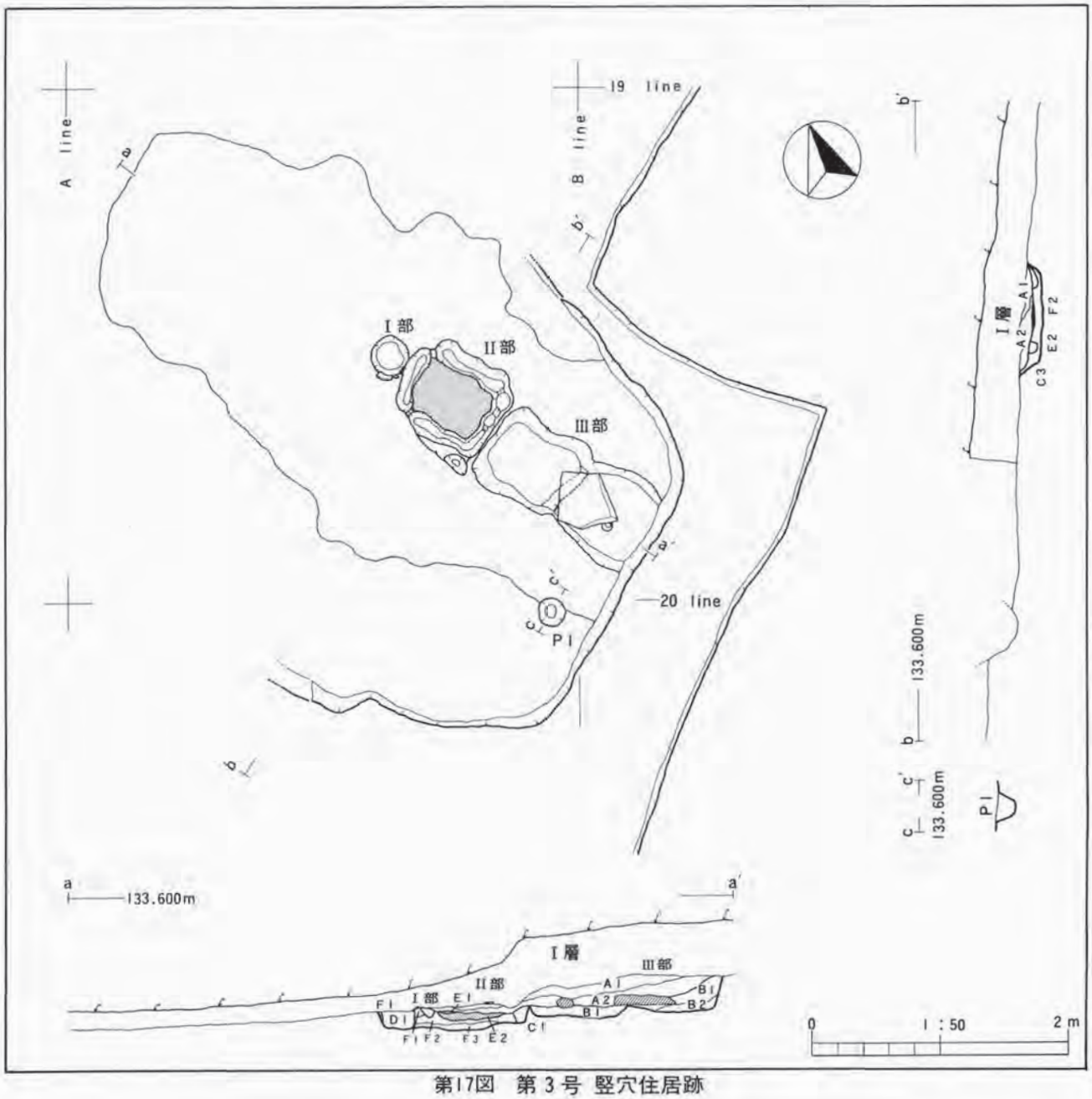
いたが、貼床は認められなかった。

炉Ⅲｂ部の南西には小ピットＰ１がある。径は0.25ｍ、深さは0.15ｍを計り、暗褐色埴壌土を基本土とするしまりのない層が堆積するが、柱当りが見られず、掘り込みの浅いことなどから柱穴ではないと思われる。

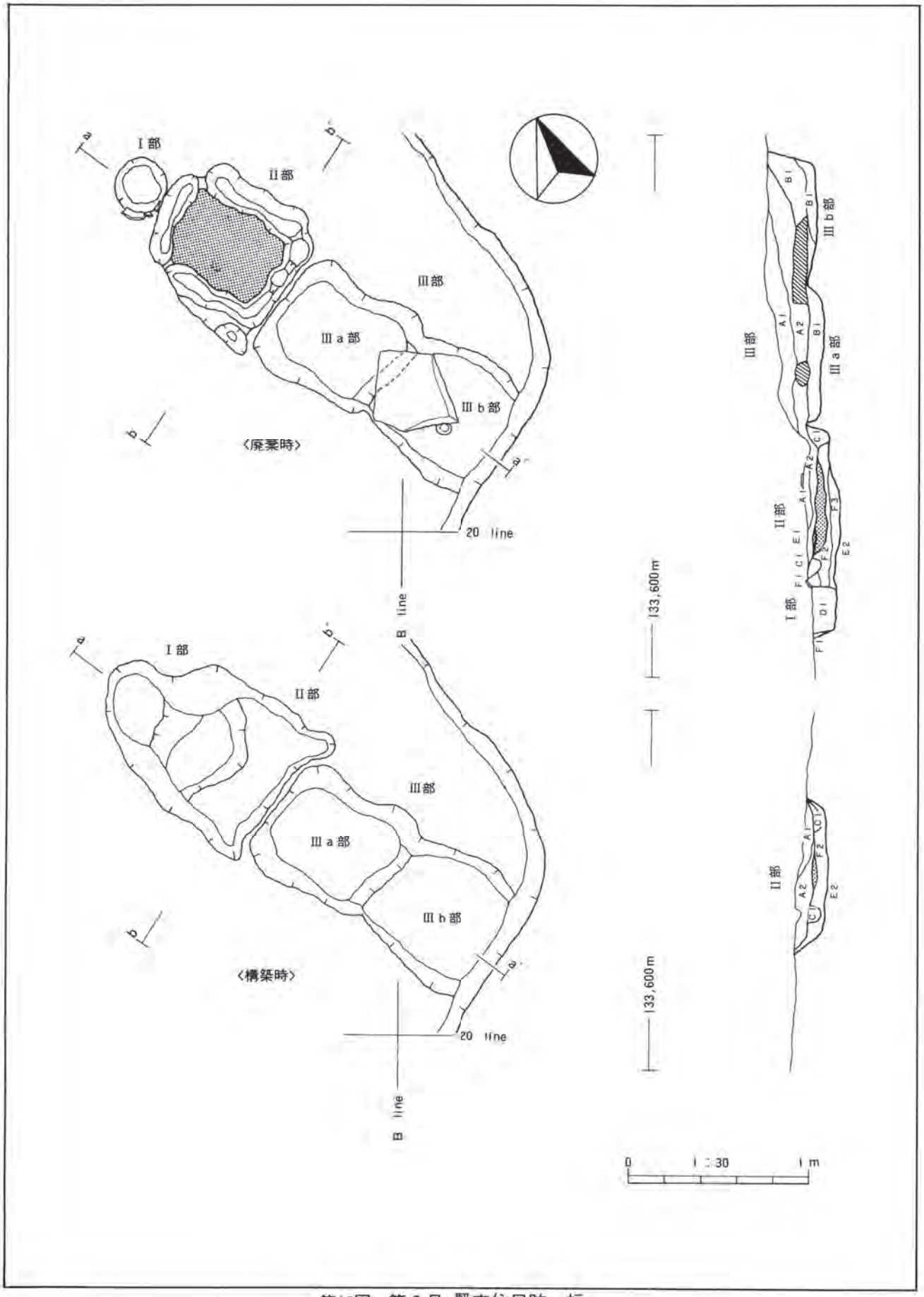
遺物出土状況

遺物は炉の上に堆積したＡ１層から出土しているがあまり多くはない。また、床面からは１・２が出土している。

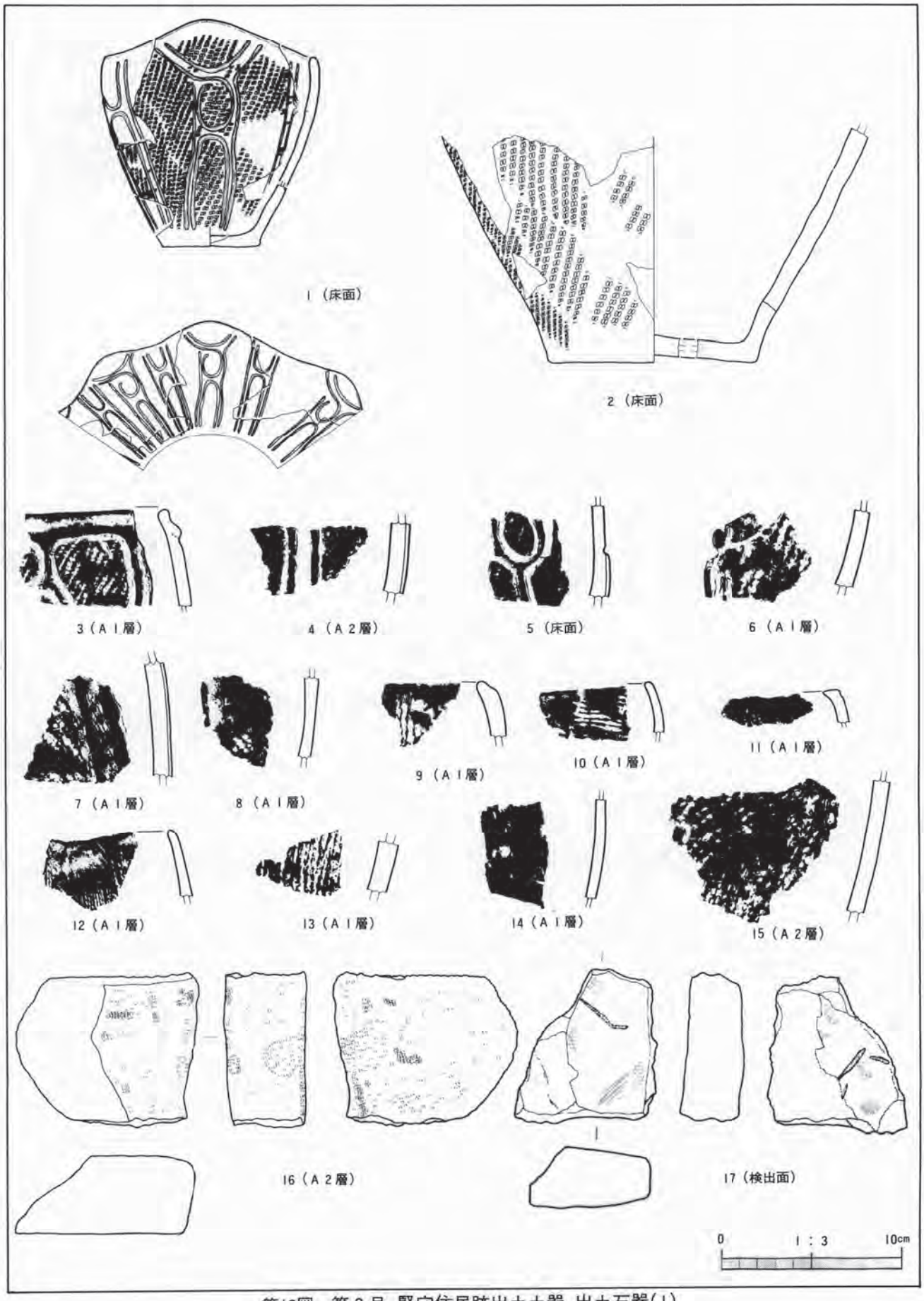
〈土器〉　１は口縁部の内湾する深鉢で、口縁部は３個をの波頂を有する大波状口縁となる。波頂下には平行沈線により有棘渦巻文の退化したモティーフが施文される。また、波頂間には前述したものがさらに簡略化されたＨ字形のモティーフが施文されている。３～８、15は隆沈線により施文されるものである。２、10～14は地文のみを施すものであるが、２はＲ－Ｌ－Ｒ複節斜縄文を、10はＬ－Ｒ単節斜縄文を、11～14は撚糸文を施すものである。



第17図　第３号 竪穴住居跡



第18図　第3号 竪穴住居跡・炉



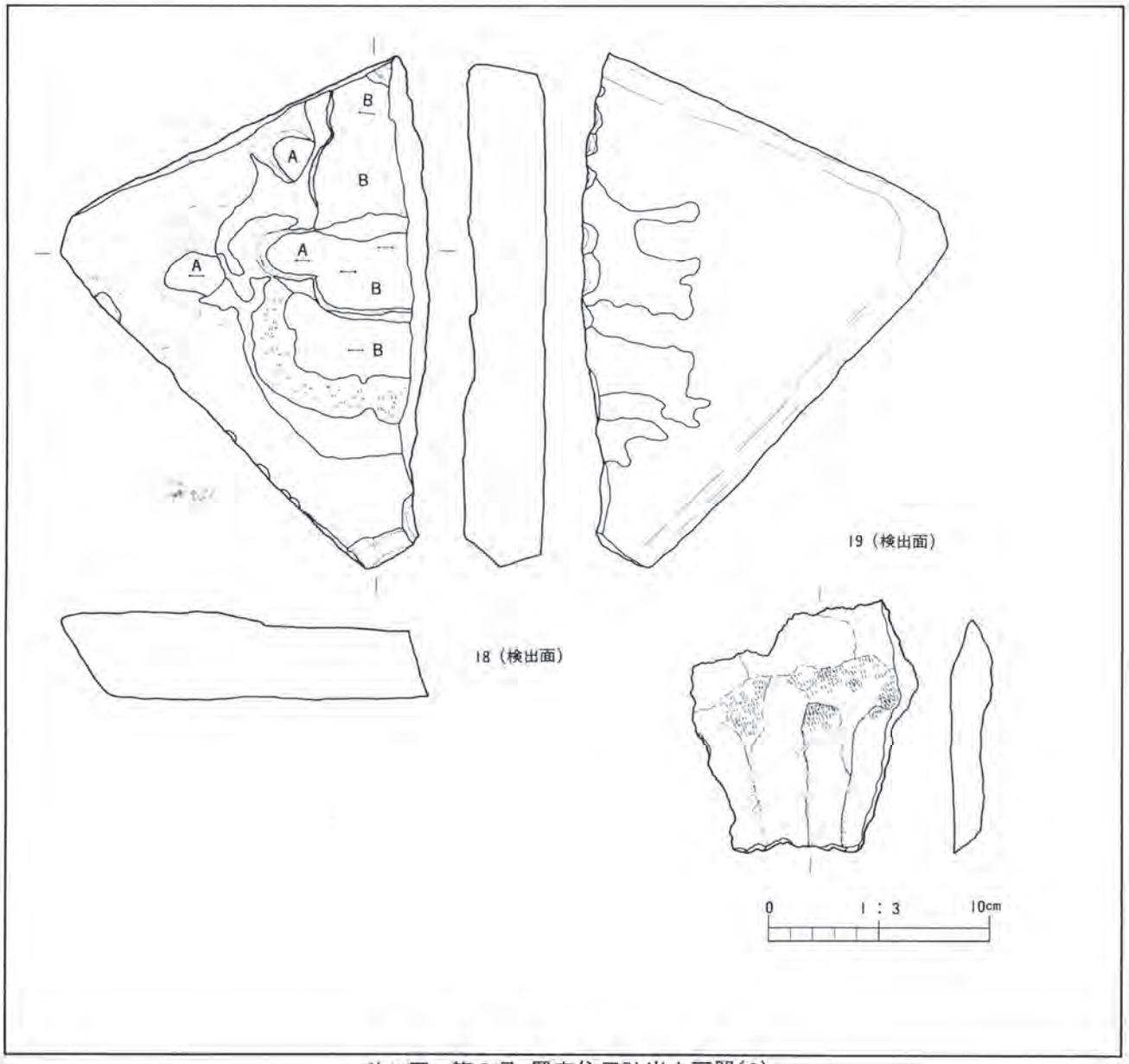
第19図　第3号 竪穴住居跡出土土器、出土石器(1)

〈石器〉　出土した石器はわずかであり、剝片石器を欠く。

16は石皿と思われるものの破片で砂岩質の素材を使用している。やや厚手で、平担面には敲打痕や擦痕がみられる。

18、19は砥石と思われるもので、いずれも浅く凹んだ溝状の磨面を有する。18はややち密な砂岩質の素材を用いるもので、現存部は三角形を呈する。平担面の磨面は幅が2㎝未満のA面と3㎝以上のB面とに分けられる。しかし、A面、B面ともに良く使い込まれており差異は認められない。19はやや柔質な砂岩質の素材を用いるもので、片面に幅2㎝～2.5㎝程の磨面が4本みられる。これらの砥石はおそらくは磨製石斧の整形に使われたものと思われ、時に18のA面は磨製石斧の側縁の整形に使用されたものと思われる。

17は砥石かと思われるもので、砂岩質の素材を用いる。両面に磨面が見られ、線状の擦痕や細い溝状の擦痕がみられる。



第20図　第3号 竪穴住居跡出土石器(2)

第１号炭窯跡（第21図）

Ⅵ区U14グリッドのⅡａ層上面で検出した。

長軸3.5ｍ、短軸1.8ｍのやや不整なだ円形を呈すが、掘り込みの中段以下は長軸3.2ｍ、短軸1.5ｍの小判形を呈する。出土遺物は無い。 **平面形**

埋土はＡ層、Ｂ層、Ｃ層、Ｄ層の４層に大別される。Ａ層は黒褐色～暗褐色土層で２層に細分される。Ａ１層は黒褐色のシルト質埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土や焼土粒をわずかに含む。固さは中程度でしまりのない層である。Ａ２層は暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の黒褐色シルト質埴壌土や焼土粒を少量含む。固さは中程度でしまりのない層である。いずれも炭化物粒を含む。 **埋　土**

Ｂ１層は焼土層で、暗赤褐色埴壌土を基本土とし、赤褐色の焼土塊などをやや多く含む。やや固いがあまりしまりのない層で、炭化物粒を少量含む。

Ｃ層は暗褐色土～褐色土を基本土とし、５層に細分される。Ｃ１層はやや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土などを含む。やや柔らかくしまりのない層で、炭化物粒を少量含む。Ｃ２層はやや暗い暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状のやや明るい暗褐色埴壌土などをわずかに含む。柔らかくしまりのない層で炭化物粒を含む。Ｃ３層は黒褐色シルト質埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土などを少量含む。柔らかくしまりのない層で炭化物粒を含む。Ｃ４層は暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土などを含む。固さは中程度でしまりのない層で炭化物粒を少量含む。Ｃ５層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌を含む。やや柔らかくしまりのない層で炭化物粒を少量含む。

Ｄ１層は炭化物層で、全体の８割が粒～粒状の炭化物となり、残りの２割は黒褐色シルト質埴壌土である。柔らかくしまりのない層である。

底面は平担で、焼成を受け固くしまっている。特に西半部で色調の変化が著しく、Ⓐとしたところは赤褐色に、Ⓑとしたところは灰褐色（くすべ色）にそれぞれ変色している。 **底　面**

また、現存部では焚き口や煙出しなどの付属施設は確認されていない。

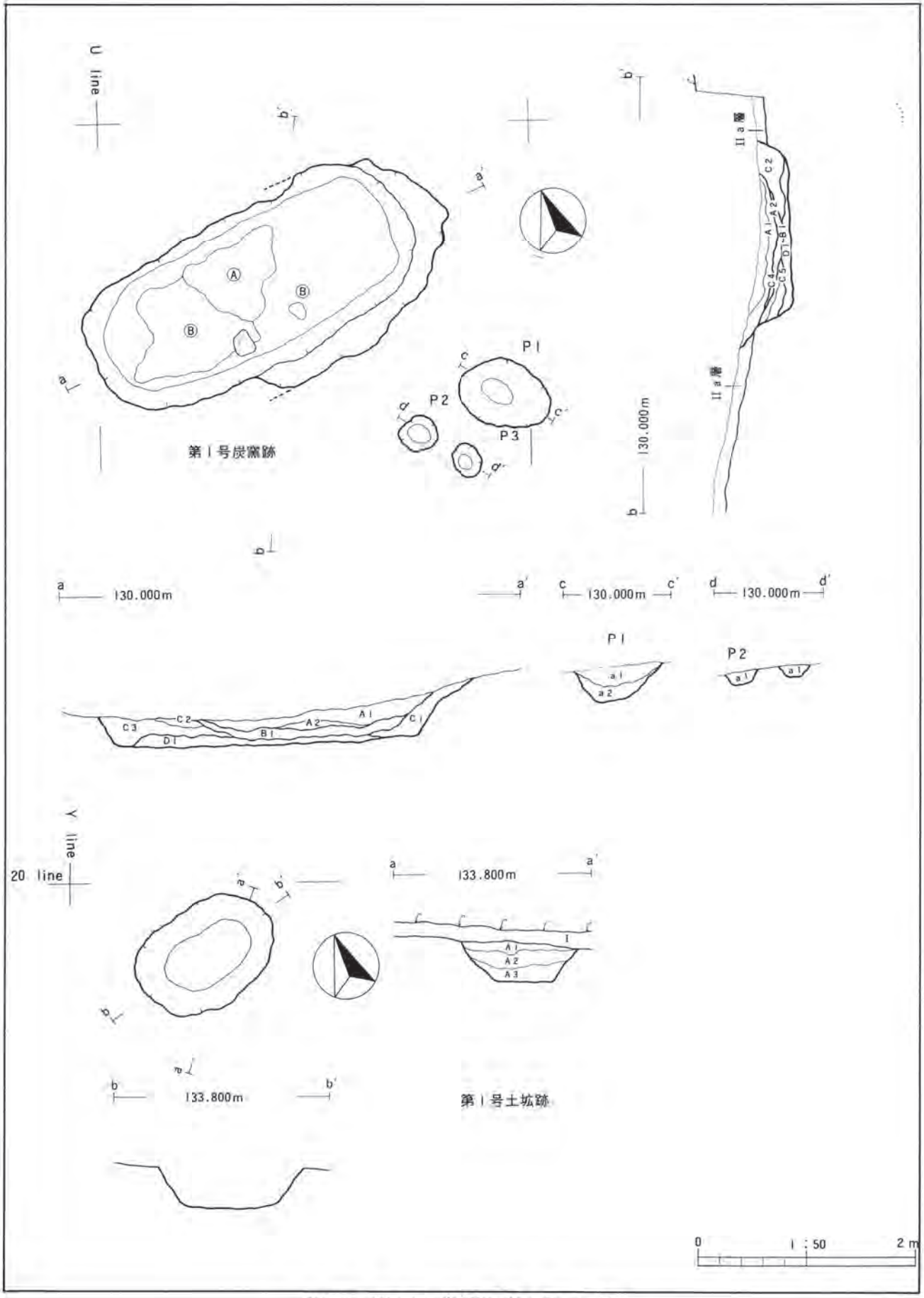
付近には黒褐色シルト質埴壌土などを基本土とするＰ$_1$～Ｐ$_3$が検出されたが、第１号炭窯跡に伴うかどうかは不明である。

第１号土坑跡（第21図）

Ⅵ区のＹ20グリッドに検出した。

長軸1.35ｍ、短軸0.95ｍ、深さ0.35ｍを計る不整だ円形の土坑跡で、壁はゆるやかに立ち上がる。底面はほぼ平担である。 **平面形**

埋土は３層に細分される。Ａ１層は暗褐色埴壌土を基本土とし、赤褐色の焼土塊や塊状の褐色埴壌土などをやや多く含む。やや固いがしまりのない層である。Ａ２層は褐色埴壌土を基本土としやや明るい褐色埴壌土や少量の焼土粒を含む。やや柔らかくしまりのない層である。Ａ３層は褐色埴壌土を基本土とするが混入土はほとんど認められない。固いがあまりしまりのない層である。出土遺物は磨滅した縄文土器片がわずかに出土している。 **埋　土**



第21図　第1号 炭窯跡、第1号 土坑跡

遺構外出土遺物（第22図～第29図）

遺構外から出土した遺物は土器・石器・土製品などからなる。出土した層位はⅢ層、Ⅱ層、Ⅰ層である。このうち、Ⅲｂ層からは縄文時代中期中葉の土器片がまとまって出土し、Ⅱ層から縄文時代後期の土器片が出土している。また、Ⅰ層は表土であるため、土器片のほかに陶磁器片や鉄片などが出土している。

〈土器〉　1～88はⅢｂ層より出土したもので、いずれも破片資料である。75は磨消し技法により縦位の縄文区画文を施すもので大木9式に伴うものである。また、86は胎土に植物繊維を含むもので体部に不撚糸文を施し、縄文時代前期の大木2式に伴う。他のものはすべて大木8ｂ式の最終段階に伴うものである。

縄文時代前期

縄文時代中期

器形は、口縁部の内湾するものと外傾するものがあるが、口縁部破片からは前者が圧倒的に多い。施文技法は隆沈線によるものと沈線によるものの2者があるが前者が多い。

1、2、8、42～45は口縁部の外傾する深鉢で、口縁部に無文帯を有する。2、8、43、44は口縁部に粘土紐を貼付け複合とする。また、8は口唇部にも隆沈線による施文がみられ、体部文様帯の上縁に連続刺突文を伴う。

3～7、9～12、21～23、31～36、46～54、78は口縁部の内湾する深鉢である。31～36は同一個体片で、口縁部にやや幅の広い無文帯を有す。体部には隆沈線により小渦巻文や懸垂文を施すが、各々の文様単位との連結により閉鎖的な施文となる。隆沈線で施文されるものは前述の土器と基本的には同様な形態をとるものと思われるが、3のように口縁部無文帯の幅が狭いものや、4のように口縁を折り返し、その上を磨消しただけのもの、更には47のように口縁部に隆沈線を施文するものなどのバラエティーがみられる。21、22は平行沈線により施文されるが、いずれも口縁部に文様帯や無文帯が欠落している。

体部の破片で隆沈線や平行沈線で施文されるものは、懸垂文や小渦巻文などの文様単位と連絡し閉鎖的施文を展開するもので、前述した土器に類似する。

これらに伴って地文だけを施す粗製土器があり、縄文を施すもの（25～27、76、77）、撚糸文を施すもの（28～30、79～82、85、87）、無文のもの（83、84、88）などに分類される。

Ⅱ層から出土したものは89～118であるが、Ⅲ層とⅡ層の層相面付近から出土したものも一括する。中期に伴うもの（89～108）は基本的にはⅢ層と同じ内容なので説明を省く。

109～118は磨消し縄文により直線的な帯縄文などを施すもので後期中葉に伴うものと思われる。

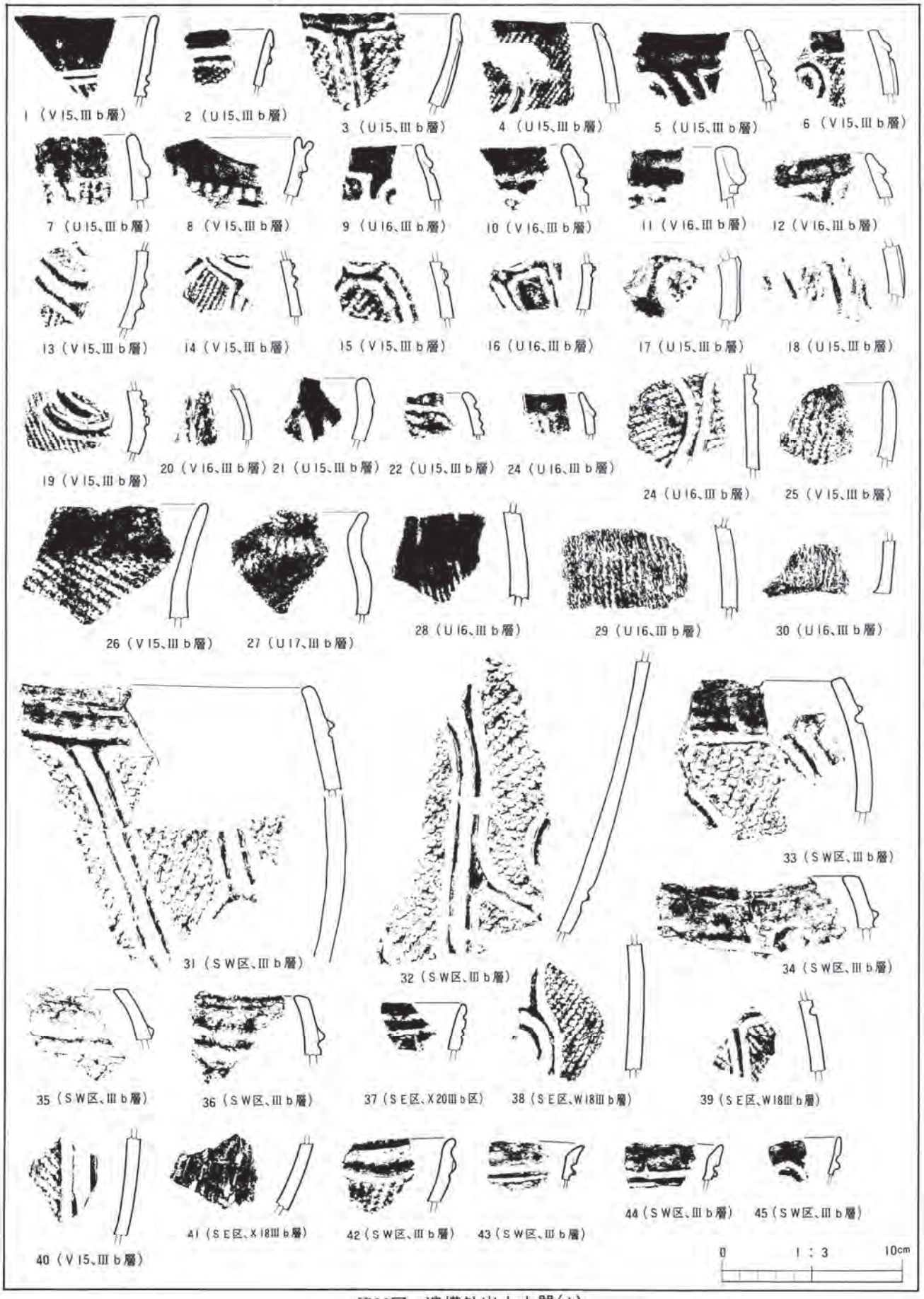
縄文時代後期

Ⅰ層およびカクラン坑から出土したものは119～138である。

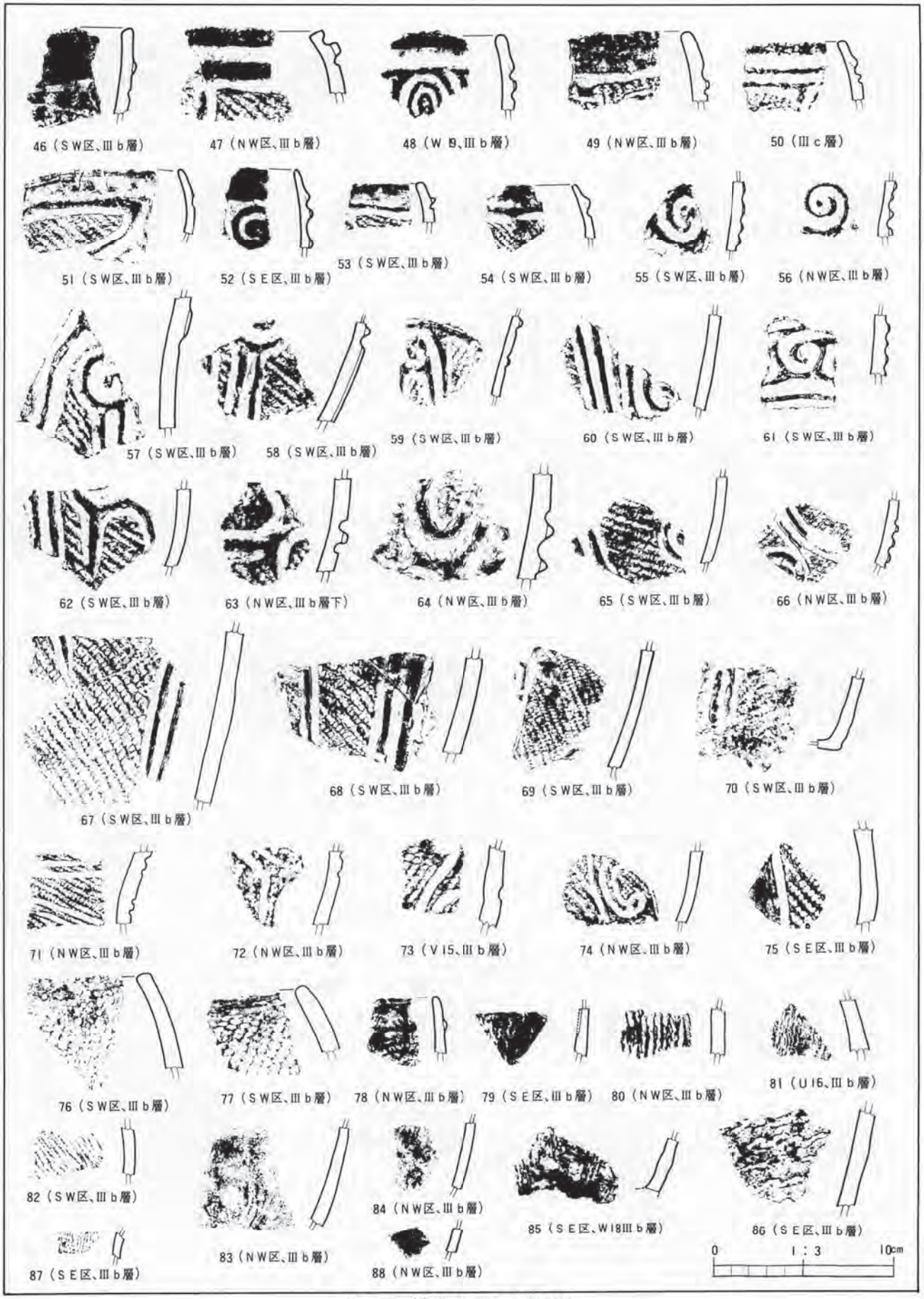
119はⅡ層出土のものに類似し、後期中葉に伴うものと思われる。

120～137は大木8ｂ式の最終段階に伴うものでⅢ層出土のものと同様である。

138は胎土に植物繊維を含み、体部に不整撚糸文を施すもので大木2式に伴う。



第22図　遺構外出土土器(1)



第23図　遺構外出土土器(2)

第24図　遺構外出土土器(3)

〈石器〉　遺構外から出土した石器はあまり出土量が多くはなく、また器種にかたよりが見られた。各層から出土したものを一括して説明する。

剝片石器

石鏃（1～9）　いずれも無茎鏃で、平基のもの（1、4～6）と凹基のもの（2、3、7～9）の2種がある。側縁は先端部から基部にかけて直線的に移行するものが多いが、9の87に側縁が弧状に膨らむものもある。調整は一般に丁寧であるが、4～6、9は主要剝離面が残存する。

削器（10～13、17）　側縁に刃部を有するサイド・スクレーパーの類を一括したもので、形態的には一様でない。10は縦長の剝片を利用し、打面を残すほか主要剝離面や自然面を残している。また、一方の側縁にやや粗い片面調整の刃部を作り出している。11は剝片の両面を調整し、刃部を作り出している。12は横長の剝片を利用し、一方の側縁に刃部を持つ。13は下半を欠損するが両側縁に片面調整の刃部を有する。12、13の白抜き部は節理面を表わす。17は小形で両側縁に両面調整の刃部を持つ。あるいは石鏃などの未製品である可能性も考えられる。

両面調整石器（14）　比較的丁寧な調整を施すが、実測図正面がより入念である。

掻器（15）　15は使用痕のある剝片だが、下端の刃部（使用痕あり）が掻器様であるため別に分類した。

使用痕のある剝片（16）　小形の剝片で一方の側縁に使用痕を有する。

礫石器

礫器（19）　不整円形の自然礫の一端を打ち欠き両面調整の刃部を作り出している。調整は粗雑だが刃部角は比較的鋭い。

敲打磨石類（21～26）　側縁にややざらざらする磨面を有し、特殊磨石と敲打磨石に分類される。

特殊磨石（21、25）　断面が三角形を呈する自然礫を使用し、一側縁に主な機能磨面を有するほか、もう一つの側縁にも補助的な機能磨面がみられる。他の遺跡では機能磨面に調整面を伴うものが多いが、ここでは不鮮明であった。長軸方向の両端部に敲打痕を有する。

敲打磨石（22～24、26）　円形～だ円形の自然礫を使用し、一方の側縁に機能磨面を有するものと、これに相対するもう一方の側縁にも機能磨面を有するものの2者があるが前者が多い。機能磨面を調整するための調整磨面や剝離はみられない。端部などを中心に敲打痕やこれに伴う剝離がみられる。

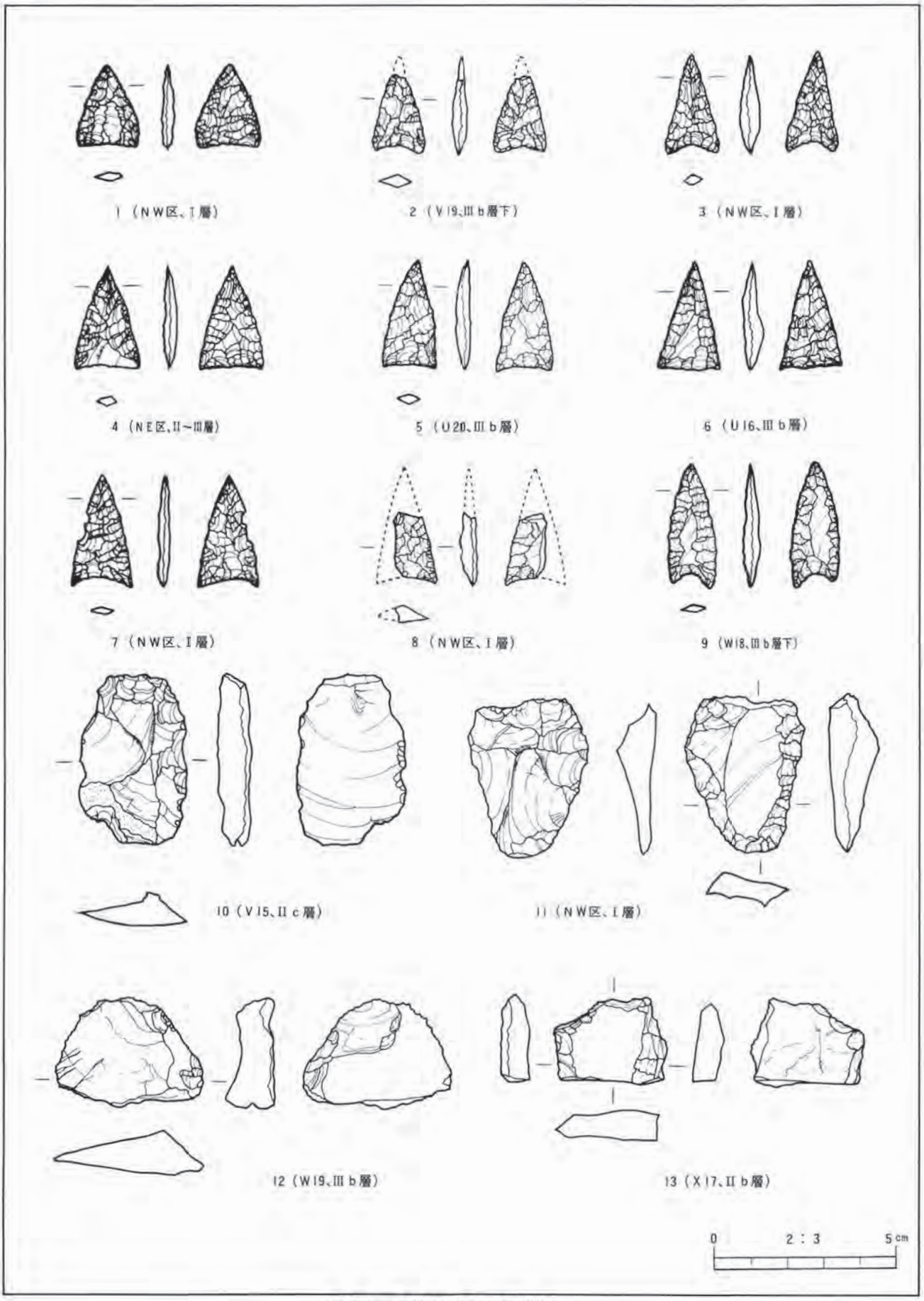
打製石斧（20）　一方の面に大きく自然面を残し、上下両端に粗雑な調整を施す。

敲石（27～29）　形態や使用方法に一貫性はみられないが、敲打によるダメージを有するものを一括した。27は円形の扁平自然礫の周縁に敲打痕を有し、平担面にわずかな擦痕を有する。28は不整形の自然礫の全面に敲打痕を有すもので、比較的使い込まれている。29は縦長の自然礫の胴部に敲打痕を有する。端部はほとんど使用されない。

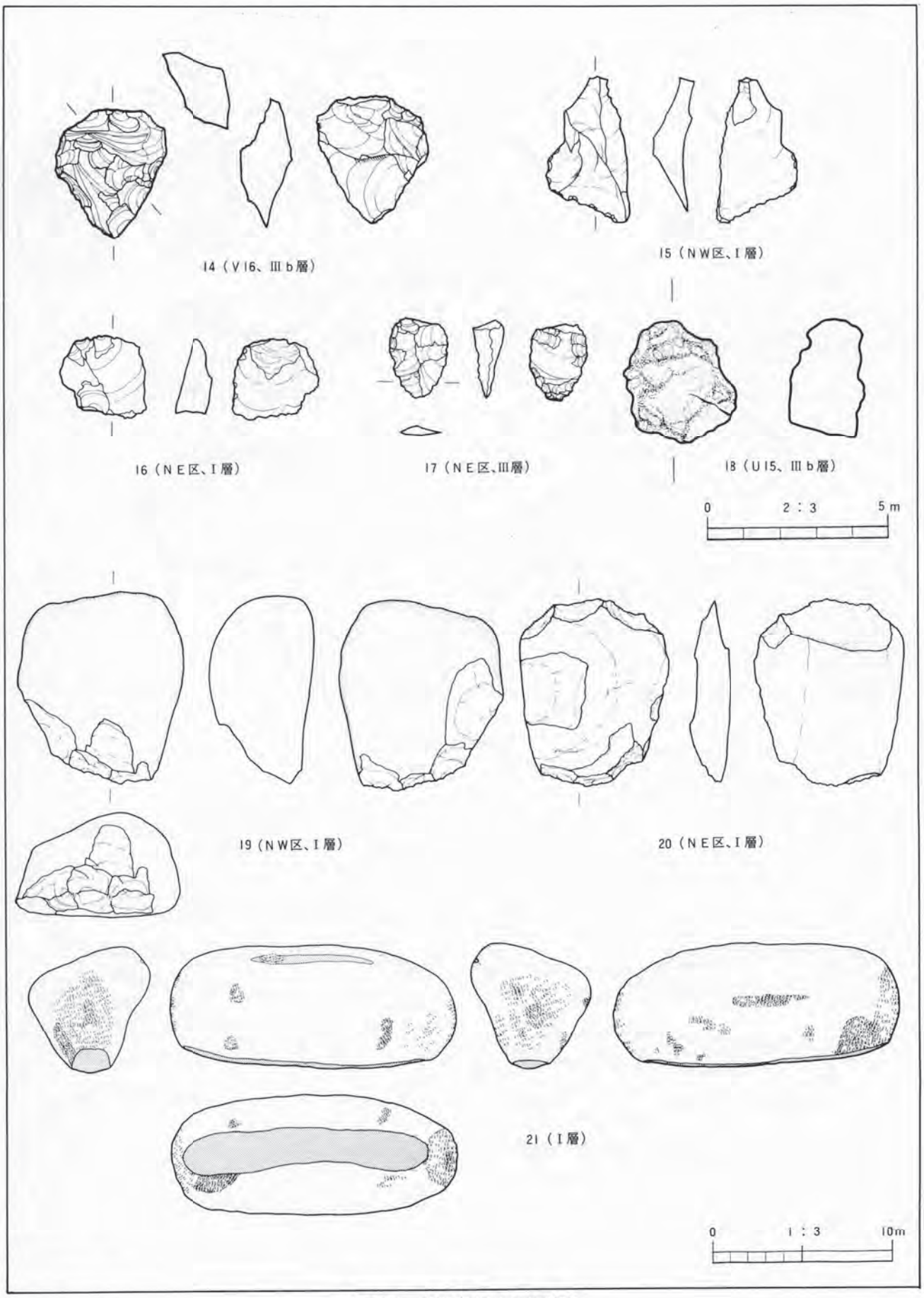
凹石（30）　砂岩質の素材を用い、一方の平担面に数ヶ所の使用痕が集中している。

石皿（31～35）　砂岩質の素材を用いるが、いずれも欠損しており後述の砥石とは明確に分離できていない。また、凹石様の使用痕を伴うものもある。

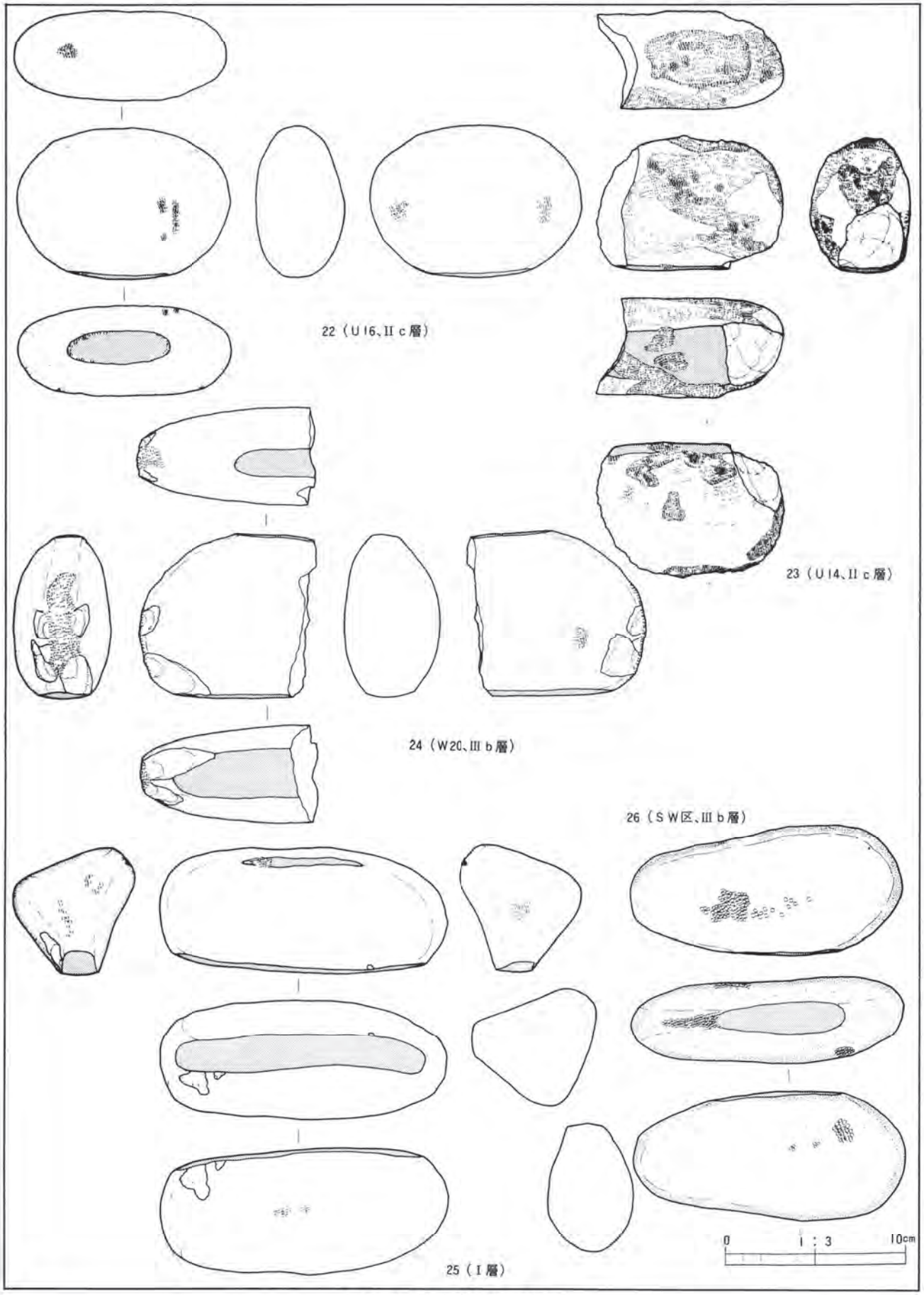
31、32はやや小形で平担面には敲打痕を伴う磨面がある。33～35はやや大形で平担面には同様な磨面がある。34は一方の面に凹名様の使用痕を伴う。これらの磨面は砥石に比べてザラザラしてはいるが、両者の差異は漸移的である。



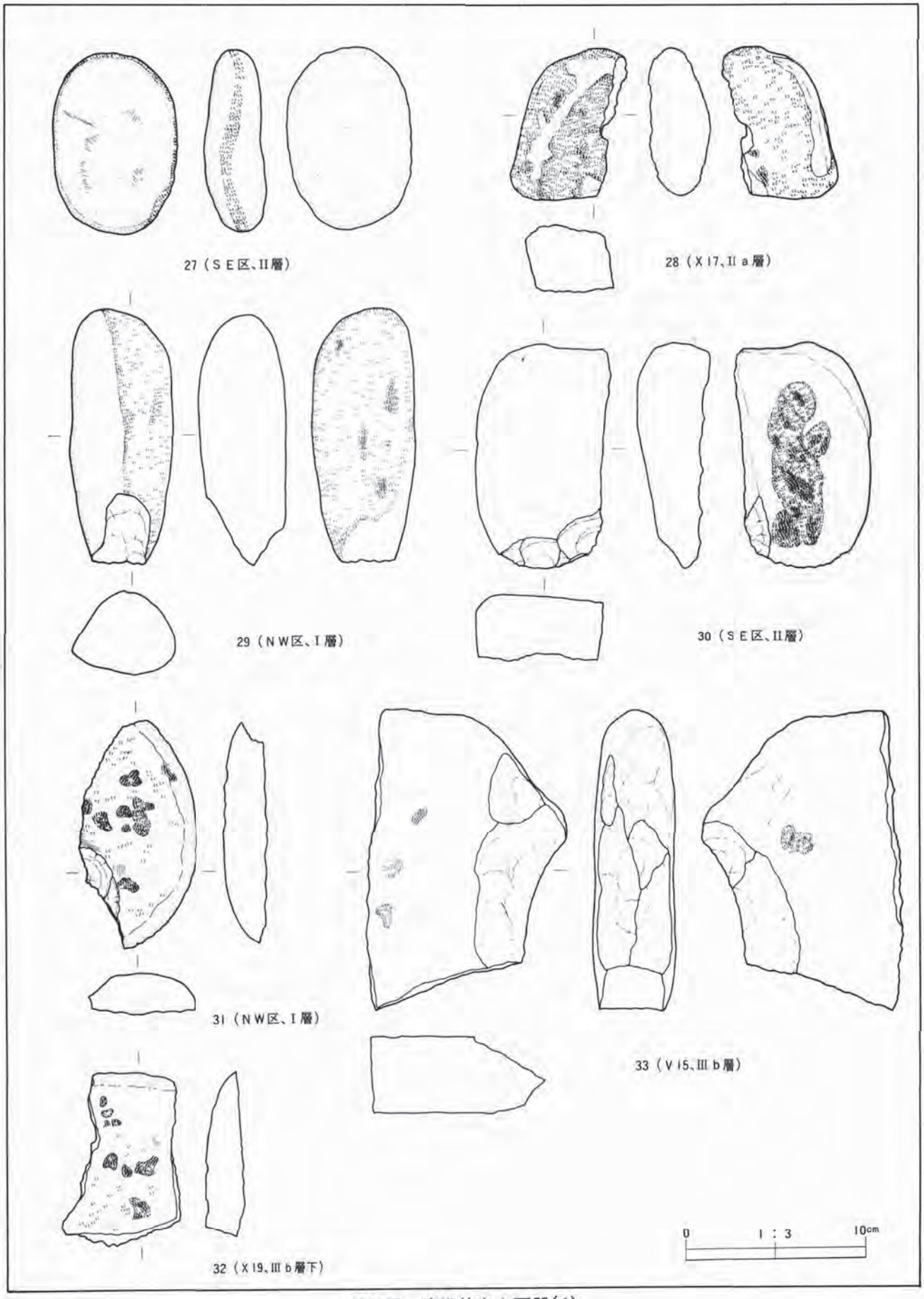
第25図　遺構外出土石器(I)



第26図　遺構外出土石器(2)



第27図　遺構外出土石器(3)

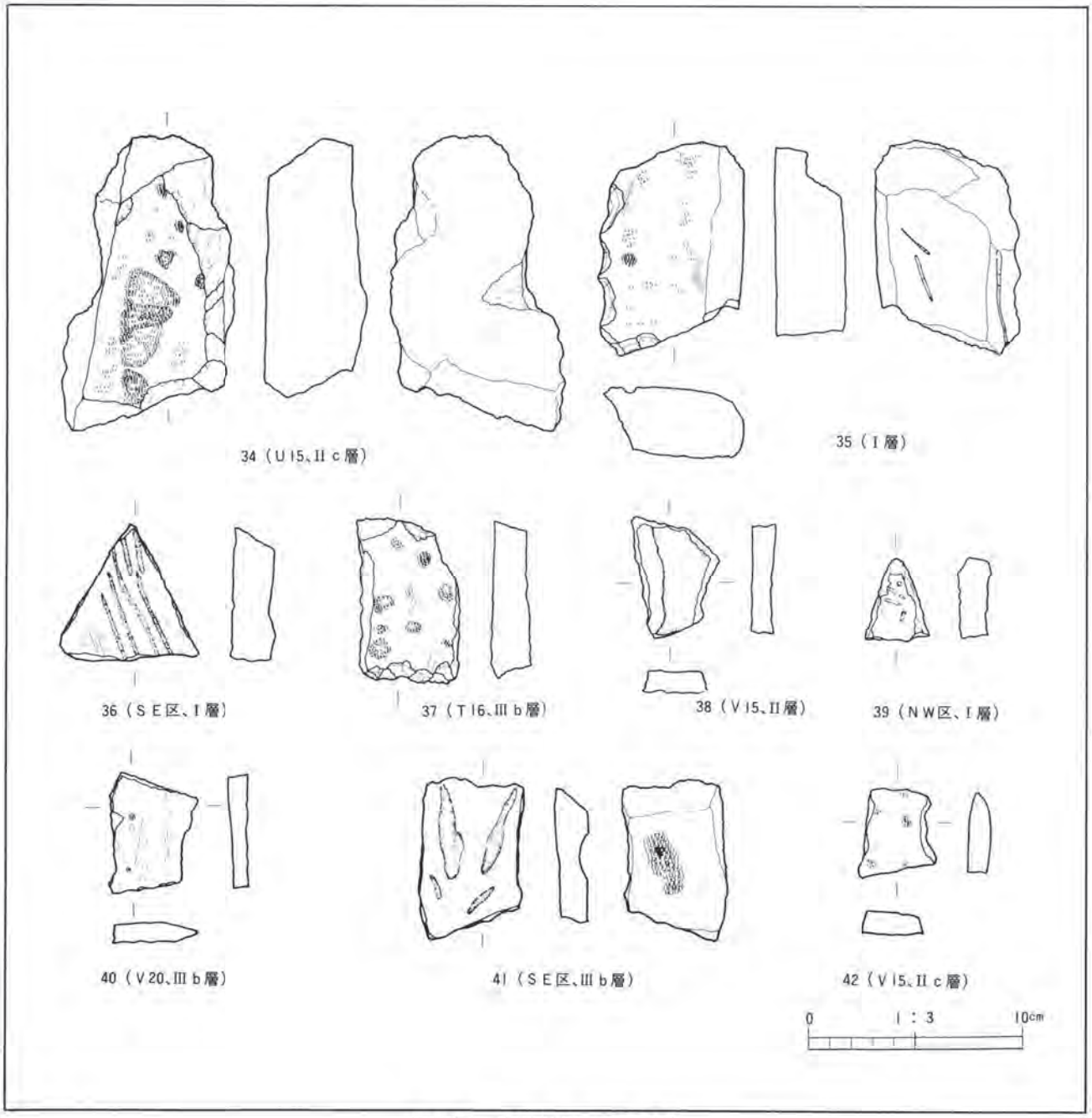


第28図　遺構外出土石器(4)

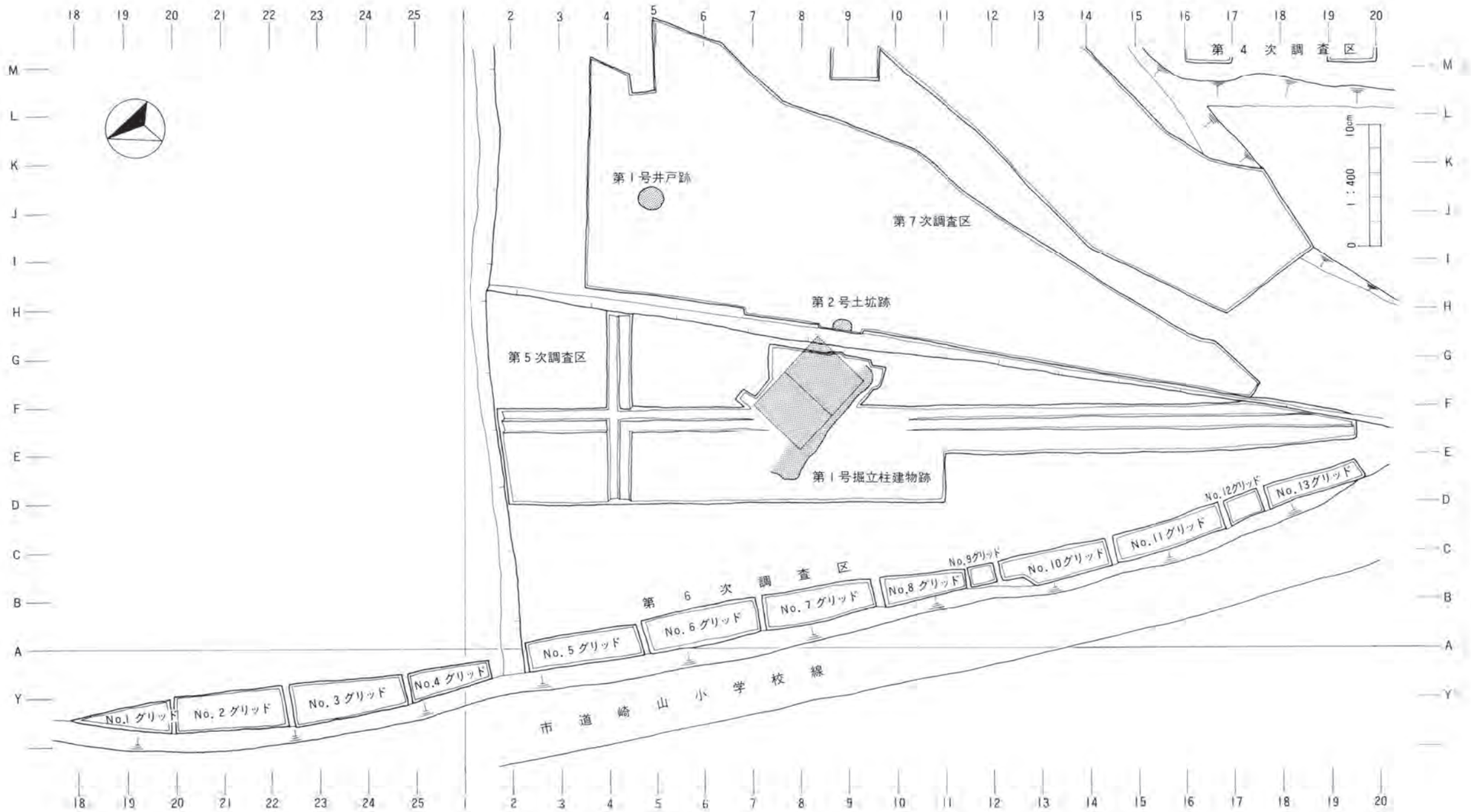
砥石（36～42）　いずれも小形でやや薄手である。36、39、41は細い溝状の使用痕を有す。38、40、42は線条痕を有するもので、わずかな敲打痕が伴う。37も線条痕を有するが、小さな凹石様の使用痕が伴う。また、41の一方の平担面にも凹石様の使用痕がみられる。

〈土製品〉

焼成粘土塊（18）　U15グリッドのⅢｂ層から出土したもので、胎土に粗砂や炭化物粒などを多く含むが晩弱である。焼成も不良で目的的に作成されたものかどうかは不明である。



第29図　遺構外出土石器(5)



第30図　第5次・第6次・第7次調査区

3．第5次～第7次調査（第30図）

Ⅰ区・Ⅱ区・Ⅴ区・Ⅵ区に位置する。第4次調査区の北西部は洞状の緩斜面となるが、ここで第5次～第7次調査を実施した。第7次調査区と第4次調査区との境界は高さ1m以上の崖となっているが、これは畑の耕作時に削平されたものである。

検出された遺構は掘立柱建物跡や井戸跡などの近世に伴うものであり、縄文時代の遺構は全く検出されず、土器、石器などの遺物も極めて少ない。

(1)基本層序（第31図、第32図）

第5次～第7次調査区の基本層序はⅣ層に大別される。これは第4次調査区のⅠ層からⅣ層に対応するものであるため大別層を略記するに留める（細別層名は第4次調査区と同じ）。

Ⅰ層　表土層

Ⅱ層　暗褐色土層。第4次調査区のⅡb層（炭化物粒を多量に含む層）を欠く。

Ⅲ層　やや赤味の強い褐色土層。縄文時代の遺物はほとんど含まれていない。

Ⅳ層　やや黄味の強い褐色土層（漸移層）。遺物は全く含まれていない。

Ⅴ層以下は地山～基盤岩であるため掘り下げなかった。

(2)遺構の検出状況

Ⅴ層（地山）上面は波状に起伏し、谷と尾根とがくり返し出現している。第6次調査区では№3グリッド、№6グリッド、№12グリッド付近が谷となり、この間が尾根となっている。谷と尾根はほぼ東西方向に走っている（第4次調査区ではほぼ南北方向）が、第7次調査区付近で不明瞭となる。尾根上には第1号掘立柱建物跡や第2号土坑跡などが検出されたが縄文時代の遺構は全く検出されなかった。このため、谷には遺物包含層は形成されていない。

また、第1号井戸跡は谷部分のⅢ層上面で検出した。この部分の谷は不鮮明でありⅢ層の層厚も比較的薄い。

(3)検出された遺構と遺物

第1号掘立柱建物跡（第30図、第34図、第35図）

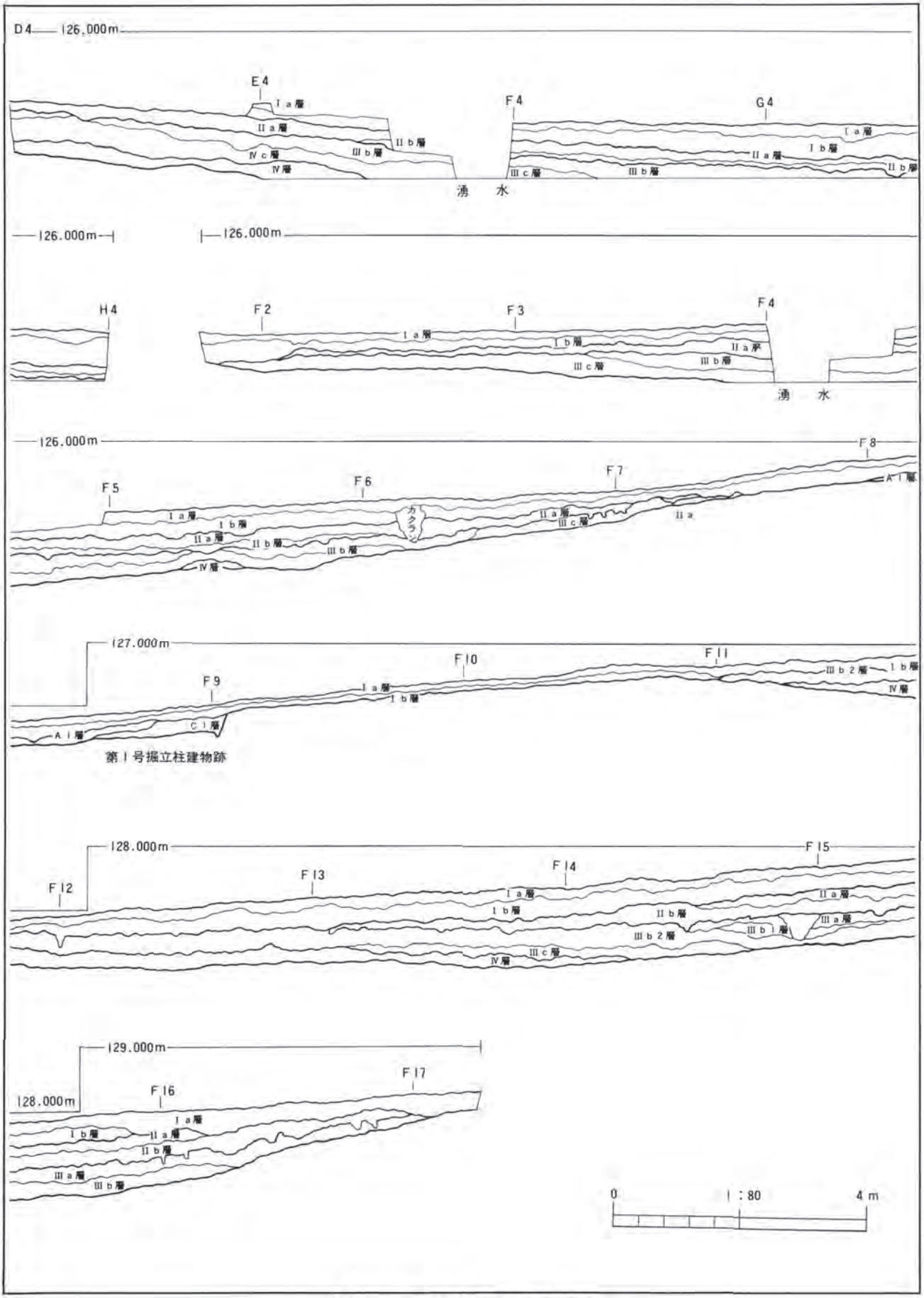
Ⅵ区のD7、E7、F7、D8、E8、F8、F9グリッドにわたり検出した。

尾根の緩斜面を掘り込み、あるいは削平し、平担面を作り出したうえで掘立柱建物跡を建築している。平担面は耕作等による撹乱が著しい。西側柱筋の外側には掘り込みによる壁がみられるが、これには周溝状の溝（雨落ち溝？）が伴う。南半部は直壁で南端部が建物跡の南西妻柱（P_{14}）に接し、これを取り囲む形で屈曲している。北半部は立ち上がりがややゆるやかで、北西隅はテラス状の張り出しが伴い、溝の幅も広くなる。また、北西隅の屈曲はゆるやかで、建物跡の北西妻柱（P_1）より約3mほど北へ離れている。

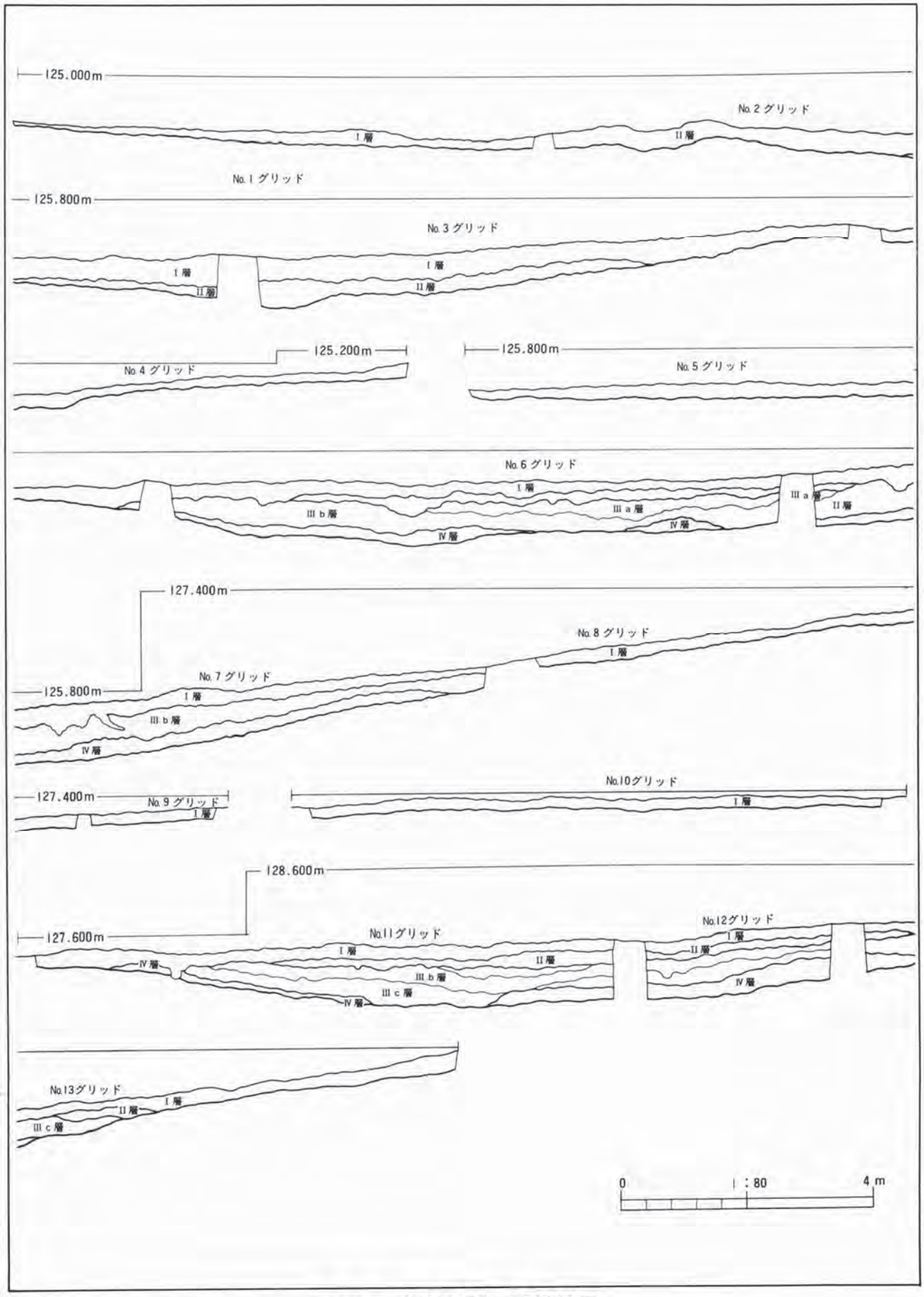
掘り込みの埋土はA層・B層・C層の3層に大別される。　**埋　土**

A1層は粘性のある暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土を少量含むほか炭化物粒を含む。固いがややしまりのない層で全体的にわずかではあるがグライ化している。

B層も暗褐色埴壌土層であるが褐色土塊の混入が多くA層よりやや明るい。B1層はB2層



第31図　第5次調査 土層断面図



第32図　第6次調査 土層断面図

よりも混入土の割合が少ない。いずれもやや固いがしまりがなく、炭化物粒を含む。

Ｃ１層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などを少量含むほか炭化物粒を含む。固いがややしまりのない層である。

掘立柱建物跡　建物跡は桁行４間、梁間３間だが不整方形を呈しゆがんでいる。主軸方向は西側柱筋でN25°30′Wである。建物内部には間仕切様の柱穴（P_9、P_{10}）があり２つの空間に区画（間取り）されている。このうち北側の区画をＩ区、南側の区画をII区とした。Ｉ区は東西３間、南北２間で、中央よりやや北寄りにだ円形の焼土を伴う。現存する床面はやや固いが貼床等は認められない。土間や台所などに相当する区画であろう。II区もＩ区と同規模の区画である。現存する床面はＩ区と同様にやや固いが焼土や貼床等は認められない。また、柱穴の掘方や据方（柱痕跡）はＩ区よりも大きくなっている。座敷等に相当する区画であろう。

柱間寸法　柱間寸法は柱痕跡の芯々でとると、桁行では西側柱筋が北から1.98m、1.91m、1.91m、1.96mを計り、平均値は１間が1.94mでほぼ６尺４寸となる。また、東側柱筋が北から1.74m、1.94m、1.92m、2.01m（推定）を計る。P_4とP_7の間が1.74mとやや狭くなり、最も南側の１間も推定であるが４間の平均値は1.90mでほぼ６尺３寸となる。このように桁行は１間が６尺３寸～６尺４寸で、ゆがみを考慮するならば６尺４寸の等間となろう。

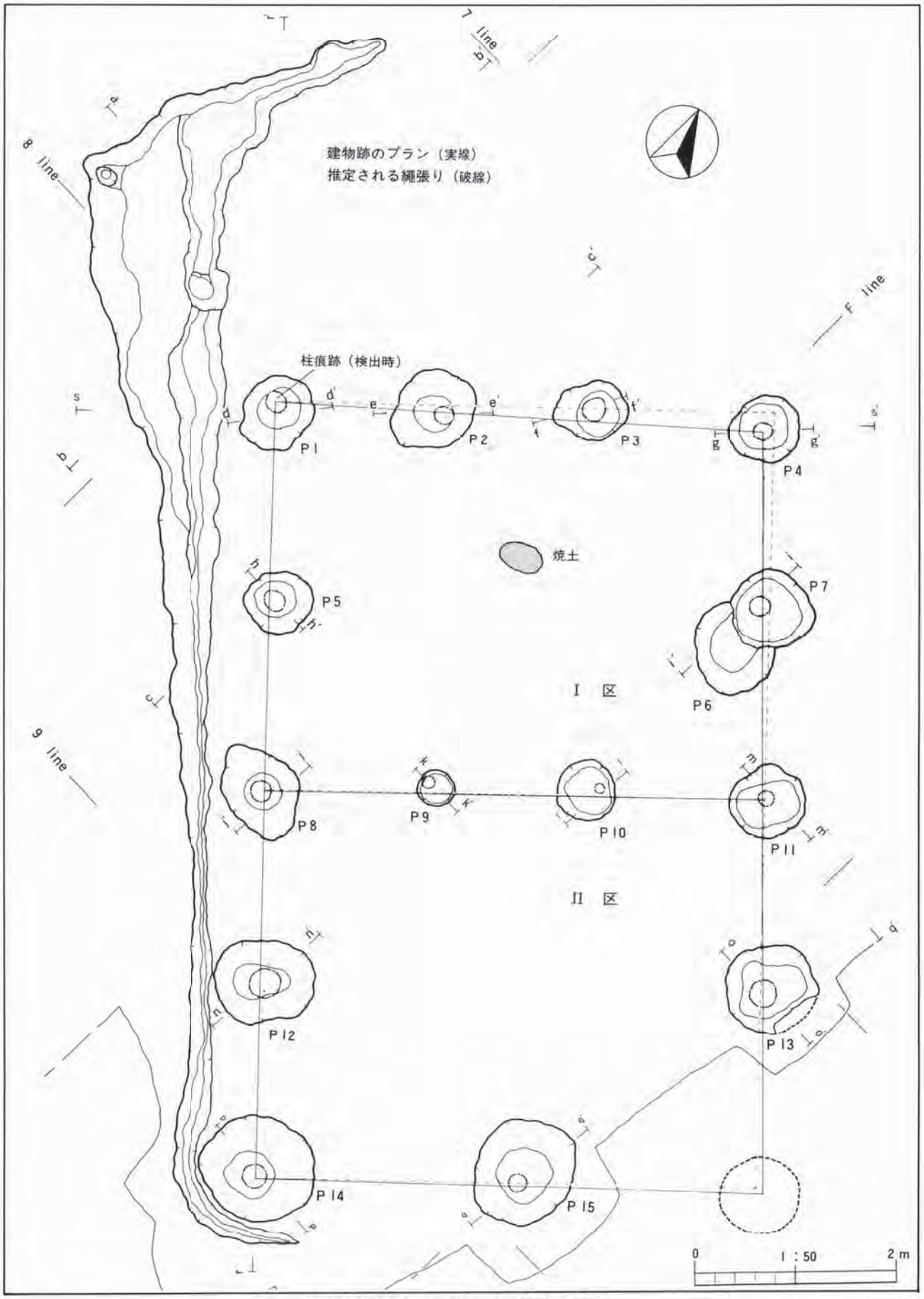
梁間は北妻柱が西から1.69m、1.50m、1.60mを計り、３間の平均値は1.66mでほぼ５尺３寸となる。間仕切の柱筋は西から1.62m、1.74m、1.63mを計り、３間の平均値は1.66mでほぼ５尺５寸となる。これもゆがみを考慮するならば北妻柱と間仕切が５尺５寸の等間で、南妻が８尺２寸５分等間となろう。

柱　穴　柱穴はすべて掘方と据方を確認している。外周の柱穴の平面形はいずれも不整円形を呈し、検出面での径は0.6m～1.2mとややばらつきがあるものの1.0m以下のものが多い。また、前述したように北半の柱穴ほど径が小さい。掘り込みは深いもので0.85m、浅いもので0.3mとばらつきがあるが、底面のレベルは124.6m～124.8mに収まる。据方は検出面での径がほぼ0.2m～0.3mとなるが、P_{11}のみが0.15mとやや小さい。間仕切の柱穴は概して規模が小さい。P_9は検出面での径は0.4m、深さ0.55m、据方の径0.15mを計る。P_{10}は検出面での径0.55m、深さ0.55m、据方の径0.1mを計る。

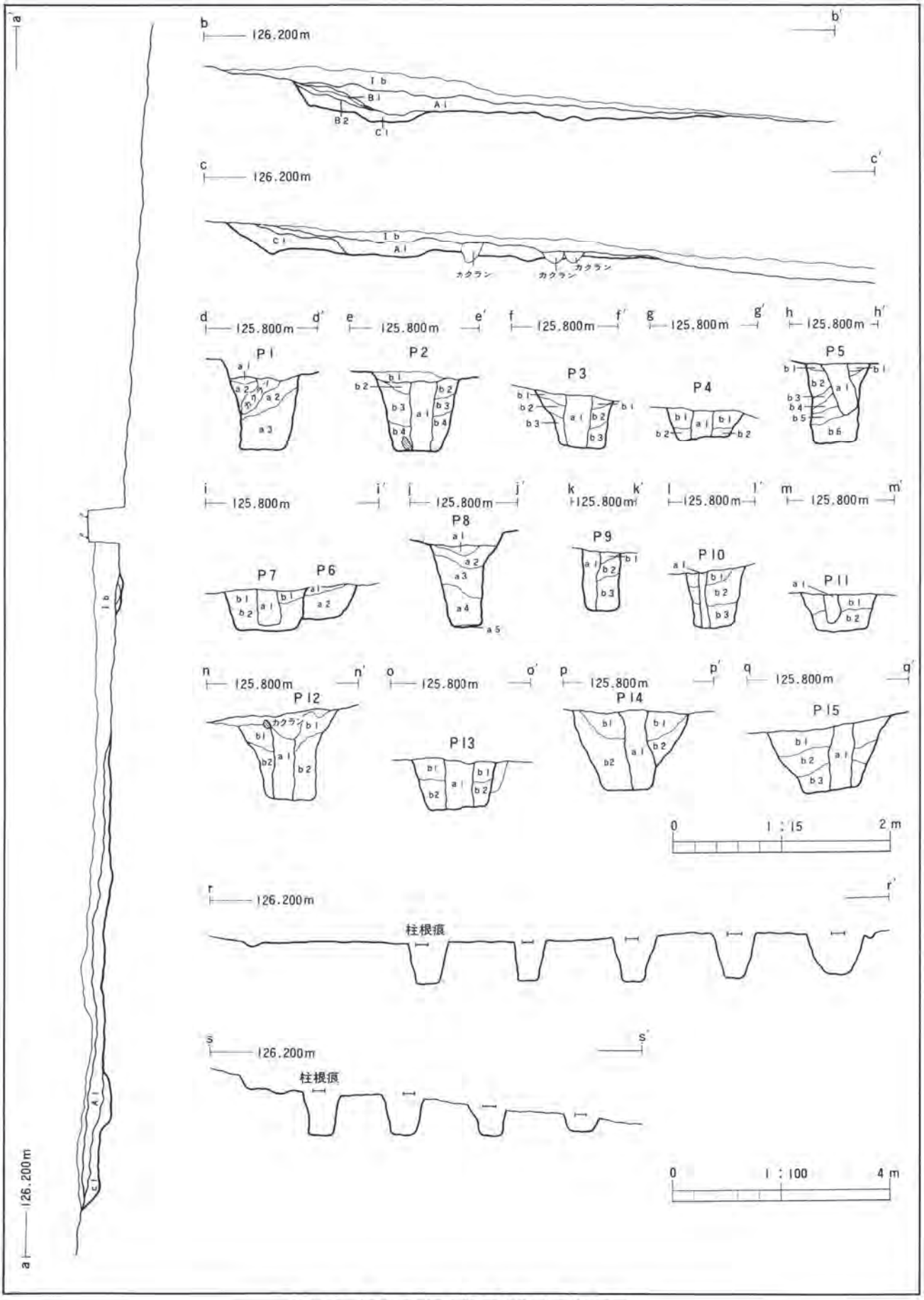
これらの柱穴の掘方の埋土は、黄褐色土、褐色土、暗褐色土の塊状の混合土であるが前二者を基本土とするものが多く、固いがしまりのない層が多い。

柱痕跡は暗褐色土を基本土とする柔らかくしまりのない層で、P_4、P_7、P_{11}ではややグライ化していた。

出土遺物　建物跡に伴う遺物は極めて少なくＰ１のａ１層から椀形の漆器の皮膜のみが出土したほかは掘り込みの埋土中から鉄片が出土している。



第33図　第Ⅰ号 掘立柱建物跡平面図



第34図　第１号 掘立柱建物跡土層断面図

第１号井戸跡（第35図～第37図）

Ⅵ区のＪ４、Ｊ５グリッドに検出した。第１号掘立柱建物跡の東北東約20ｍに位置する。

Ⅲ層上面で検出したが掘り込み面は不明である。

平面形は不整円形を呈し、断面形は下半部にテラスを有する２段掘りとなる。規模は開口部径2.1ｍ、深さ2.35ｍ、テラス部の掘り込み径0.9～1.1ｍを計る。 **平面形**

石組みの井戸でありテラス部に基底部の石組を確認している。また、第37図上の土層断面図の右側中段には板状の角礫が４枚以上重なっている。これは当時の石組みが部分的に残存したものと思われる。しかし、大半の石組は破壊され、大きな角礫～亜角礫が井戸内部に重なり合い充満していた。

埋土はＡ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層・Ｅ層の５層に大別される。 **埋　土**

Ａ１層は暗褐色埴壌土層で塊状の褐色土をわずかに含む。また、焼土粒や炭化物粒なども少量含まれる。固さは中程度でしまりのない層である。

Ｂ層は褐色土、暗褐色土の混合土層で２層に細分される。Ｂ１層はやや明るい暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土などを多量に含む。固さは中程度でしまりのない層である。Ｂ２層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土などを多量に含む。やや固くしまりのない層である。中位に0.3ｍ×0.2ｍの木塊を含む。

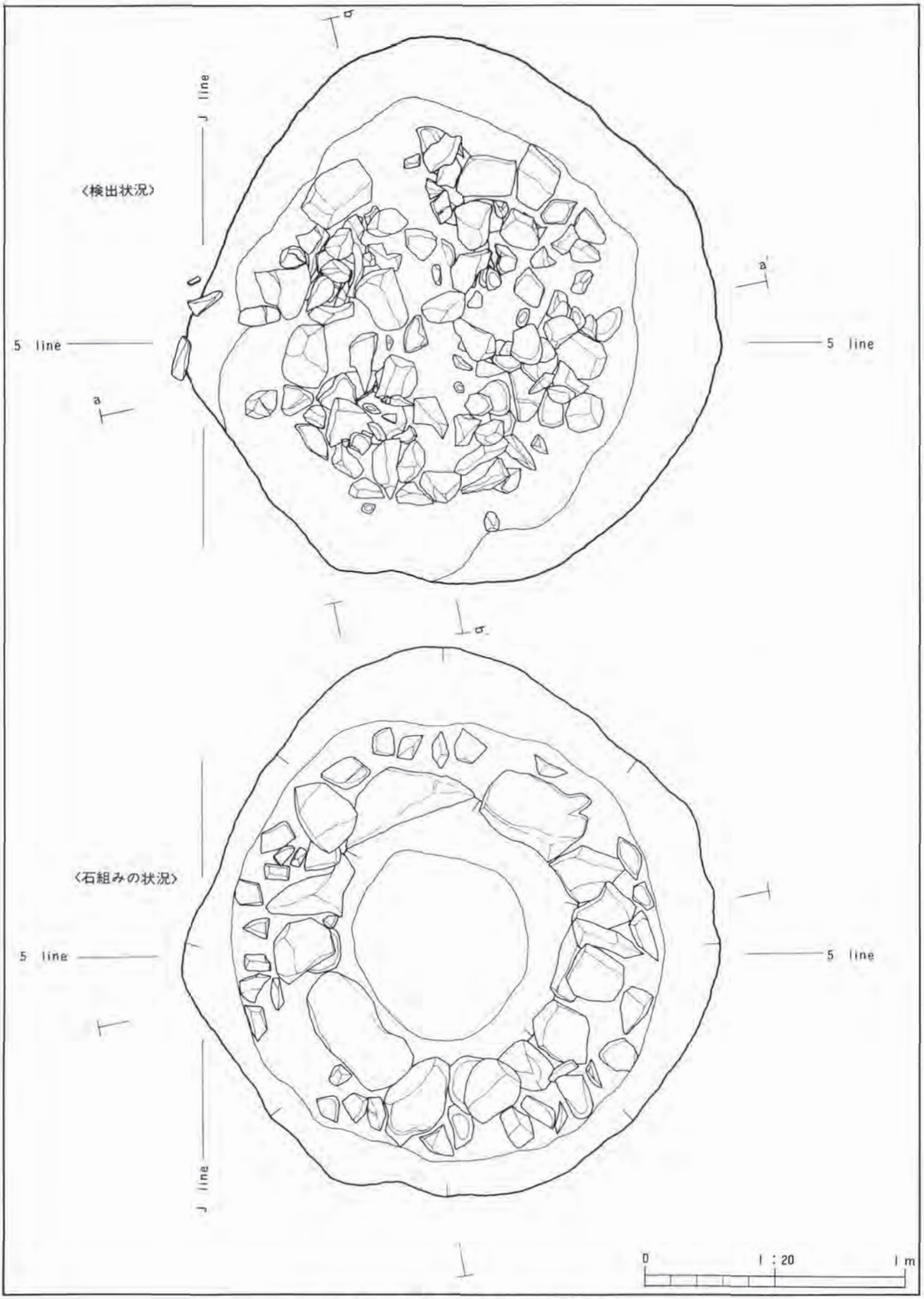
Ｃ層は黒褐色土、暗褐色土、褐色土の混合土層で全層ともグライ化している。３層に細分される。Ｃ１層までは礫を多く含むがＣ２層以下は少なくなる。Ｃ１層は暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土を多量に含む。固さは中程度でややしまりのない層である。中位に小形の板材や木片などがややまとまって出土している。Ｃ２層は黒褐色土を基本土とし、塊状の暗褐色土や褐色土を含むが混入量は他の量に比べて少ない。やや柔らかくしまり具合は中程度である。椀形の漆器や漆の皮膜・円形の板・杭状の木片などのほかにクルミやウメなどの種子を含む。Ｃ３層は暗褐色砂層で黒褐色や褐色の砂などを含む。固さは中程度でしまりのない層である。木片などの自然遺物はほとんど含まれない。

Ｄ層とＥ層は構築土層であるがテラス部の石組に伴うものをＥ層とし、これより上位の壁際のものをＤ層とした。

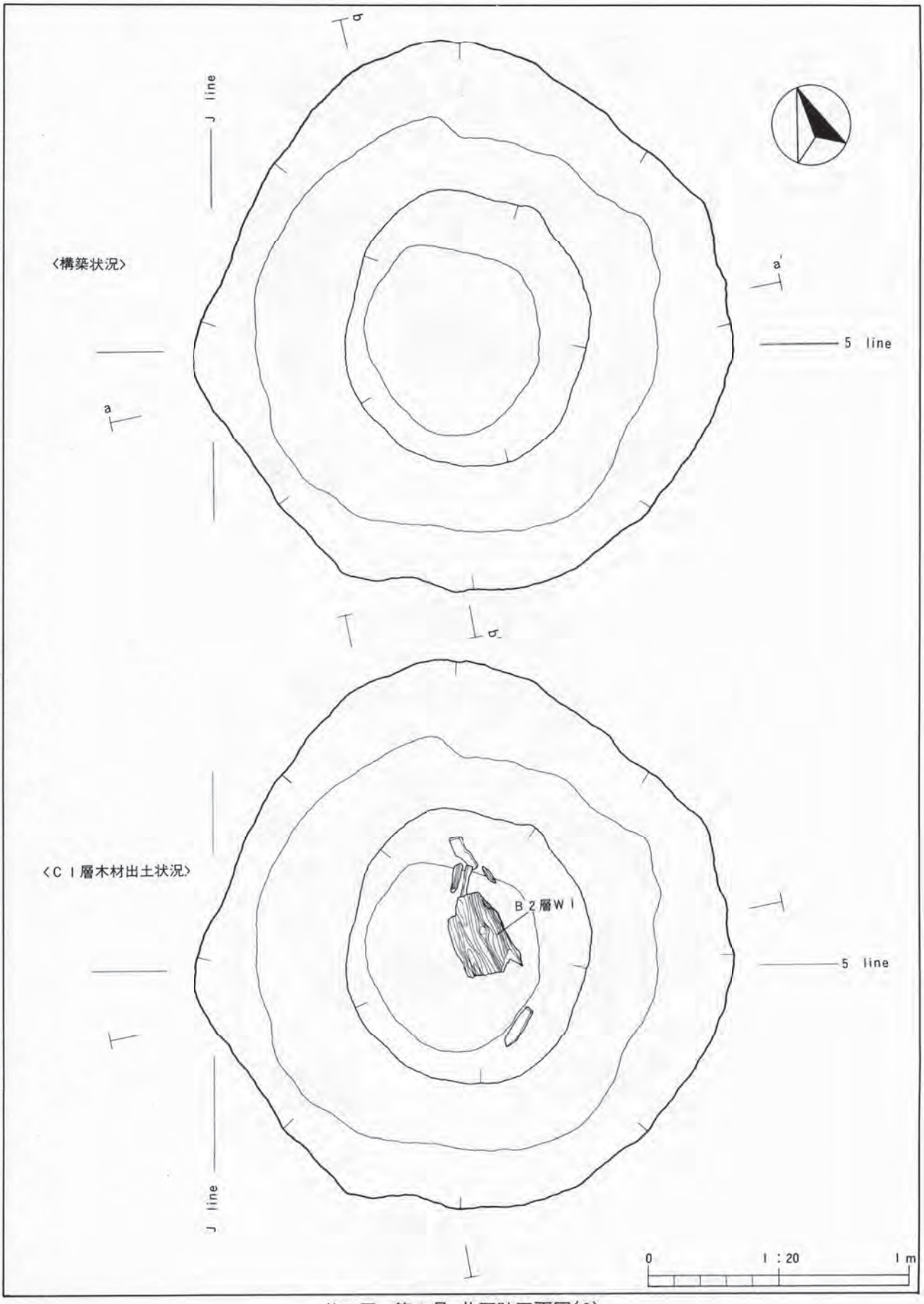
Ｄ層は黄褐色土、褐色土、暗褐色土の混合土層で４層に細分される。いずれもやや固いがあまりしまりのない層である。Ｄ１層はやや明るい褐色埴壌土層で、塊状の黄褐色埴壌土や暗褐色埴壌土などを多く含む。Ｄ２層は暗褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土を多く含む。Ｄ３層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土を多く含むが他の層よりも混入量は少ない。Ｄ４層はやや明るい褐色埴壌土を基本土とし、塊状の褐色埴壌土を多く含む。Ｄ３層よりやや明るく混入土も多い。

Ｅ１層は褐色埴壌土を基本土とし、塊状の暗褐色埴壌土を含む。全体的にグライ化している。やや固いがあまりしまりがない。

これらの堆積層のうちＥ層とＤ層は井戸の構築土層である。Ｃ３層（あるいはＣ２層も？）は自然堆積層であるが、この堆積後にＣ１層～Ｂ１層（あるいはＣ２層～Ｂ１層）を埋め戻している。この作業には石組の破壊を伴っている。Ａ１層は自然堆積のようであり投げ捨てた礫の間に流入したものと思われる。



第35図　第1号 井戸跡平面図(1)



第36図　第Ⅰ号 井戸跡平面図(2)

第37図　第1号 井戸跡土層断面図

Ⅳ　調査のまとめ

1．縄文時代の遺構と遺物

(1)遺　構

本遺跡から検出された縄文時代の遺構は、前述したとおり第４次調査区内の第１号竪穴住居跡、第２号竪穴住居跡、第３号竪穴住居跡、第１号土坑跡がある。これらのうち、竪穴住居は３棟とも同一の土器型式に伴うもので、また、炉の方向より求めた竪穴住居跡の主軸方向はある一点（第８図⊕印の地点）に結ばれている。これらのことから３棟の竪穴住居はほぼ同時に存在したものと想定された。すると、各々の竪穴住居跡間の距離（第２号竪穴住居跡と第３号竪穴住居跡は芯々で約14m、第１号竪穴住居跡と第３号竪穴住居跡は芯々で約12m）は有意であり、竪穴住居跡を構築する際の基本となる間隔を表わしているとも考えられる。

また、調査区外にも竪穴住居跡と考えられる落ち込みを２地点で確認しているが、これらの竪穴住居跡は市道千束長根線が乗る弧状の尾根上に立地している。本遺跡の集落の形もこの尾根の形状に制約された形を取るものと思われるが、その際に第８図⊕印の地点は集落の中心とは無関係となる。おそらく集落はいくつかのブロックから形成されており、ブロック毎にあるまとまった配置をとっているものと思われ、その１つが第４次調査区内の竪穴住居跡群だと思われる。

３棟の竪穴住居跡は円形を基調とし単式の石組炉を持つものと、方形（あるいは多角形）を基調とし複式の炉を持つものの２者に分類される。このうち後者の炉は複式炉の祖型などとして捉えられている。これらの炉に対して明確な評価をするためにも複式炉について触れることとする。

複式炉

複式炉とは東北地方の縄文時代中期後半から末葉を中心に存在するもので、発見当初は梅宮茂により「土器を利用した火つぼと石で構成した炉が１セットとなっているもの」と定義された（註1）。また、丹羽茂は複式炉を単式炉と対比的に把え、「石組複式炉」と「土器埋設石組複式炉」の２種類型に大別した上で、後者の典型を二本松市上原遺跡の土器埋設石組複式炉群に求め、これらを標式資料として「上原型複式炉」なるものを設定している（註2）。更に丹羽は複式炉を、「複数の空間から構成される炉」を総称するとも定義している（註3）。最近では目黒吉明により「複数の燃焼機能を持つ」炉が複式炉であると再度定義され、「土器埋設複式炉」、「石組複式炉」、「斜位土器埋設複式炉」の３類型に大別されている。（註4）

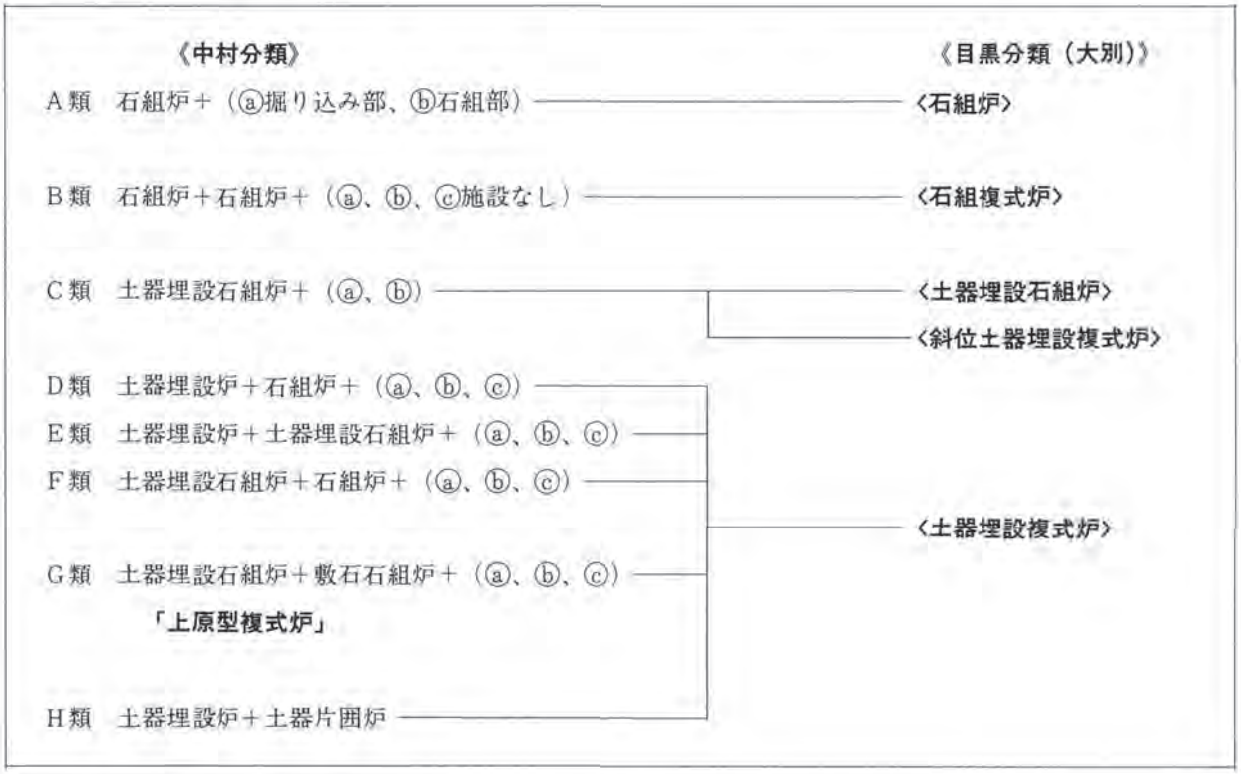
岩手県内での類似資料は昭和40年代頃からの大規模開発に伴って情報が蓄積されてはいたが、東北南部とは異った様相を呈しており、また、前述した定義だけでは包括できないものもあるなどの理由から「複式炉系列」の造語を生みなどの若干の混乱を招き（註５）資料の集成が遅れていた。こうした中で中村良幸により観音堂遺跡の調査資料を骨格とした県内の類似資料がやっと集成された（註6）。中村は複式炉あるいは「複式炉系列」をまとめて、Ａ類～Ｈ類の８類に分類している。中村の分類と目黒の分類により岩手県内の複式炉はほとんどのタイプが網らされたものと思われる。但し、両者の間には複式炉の定義に差異がみられるために分類の一部も異っている。つまり、中村がＡ類、Ｃ類とした石組炉や土器埋設石組炉に掘り込みや石組

（所謂前庭部）などの施設が付属し、この付属施設で燃焼しなかったものについて目黒は複式炉として認めていない。

しかし、「複数の燃焼機能」のみを重視して複式炉を定義した場合には所謂前庭部の性格が全く曖昧なものとなってしまっていると言わざると言えない。目黒らは所謂前庭部を焚木を差込んだ「木尻」や送風の施設と考えている。所謂前庭部の機能がこのとおりであるならば複式炉の燃焼機能と深く結びつくべきものであるから所謂前庭部は複式炉に必要不可欠なはずであり、換言すれば所謂前提部を持たない複式炉は複式炉たりえないということになる。この点で中村の分類するA類、C類が複式跡として認められないとした事と同じレベルでの吟味が必要なはずであった。

また、所謂前庭部を「木尻」とした場合に溝や掘り込みあるいは配石などにより他の床面から独立させた空間を確保していることの説明が十分ではない。もともと焚木を差し込むのなら炉の四方から行えるし、所謂前庭部が小さく、人が入っては何らかの作業を行えるほど広い空間を確保していない例もある。「木尻」に送風の機能を加えたところで所謂前庭部の付近に出入口や通風口などが存在したことは確定された事実とは言い難く、少なくとも複式炉をもつ竪穴住居跡の検出例からは一般化できていない事からも否定されよう（後述）。そうでなければ所謂前庭部の中に無理矢理人が入って木を差し込みながら何か団扇のようなもので絶えず風を送り続けながら使用したとでも言うのだろうか。

ところで、所謂前庭部が「木尻」や送風のための施設であると考えられた理由は石組部の焼け具合からで、土器埋設部に近い方がより焼成を受け、所謂前庭部に近づくほど焼成は微弱に



第3表　複式炉の形態分類（中村良幸1982、および『観音堂報文』による）

なるからである。確かに石組部の前庭部寄りに「たきぎ」を置き、炎が横に流れるほど強い風を絶えず送り続けたとしたらばこのような焼け方をするかもしれないが、一寸でも送風の手を止めると炎は大きく上方に燃え上ってしまい失火の危険性が増すものと思われる。また、大きな火を燃やすことで住居跡内部には相当量の煙が充満し、居住性が極めて悪化するものと思われる。このような焼け具合を火力の強弱だけで説明する必要はなく、製作されてから廃棄されるまでの使用期間や使用頻度なども考慮して良いかと思われる。

前庭部を「木尻」や送風の施設といった複式炉の機能と直接結びつく性格のほかに梅宮のように非実用的な性格を考慮する意見もある（註7）。梅宮は前庭部を「火による鎮魂、火の呪術・隆魔供献の如き精神的な儀式を行う空間」とした上で前庭部に伴う小ピットを「幼児の遺骨を納めるピット」あるいは「何らかの儀礼用の木製品を樹立した跡」と想定している。しかし、梅宮の説は裏づけとなる資料が欠除していたことから否定的な意見が大方を占めていると言って良い。ただし、前述したように前庭部を実用的空間とした根拠は意外と曖昧であったことを考えるならば、非実用的機能も再考する価値は十分にありそうに思われる。

ところで、問題の「複数の燃焼機能」であるが、確かに土器埋設石組複式炉のすべてと石組複式炉の一部についてはその構成からも複数の種類の燃焼機能が見てとれる。一方、日字形の石組炉はその規模からも１基の炉の機能の分離であり、また、石組炉に石組の副炉を伴うものは、本体に同程度以下の機能を付加したものとも考えられる。更に複式炉からやや離れた床面に地床炉のような焼土が複数伴っているものもあるなど「複数の燃焼機能」には単なる数量的な側面と質的な側面があり一括して論じて良いものか若干の疑問が残る。また、複式炉以前の竪穴住居跡で床面に複数の炉が分散するもの（例えば大型住居跡など）にも「複数の燃焼機能」があると思われるが、これらをどのように分離するのかという屁理屈めいた問にも明確な解答を出していないように思われる。

以上のように概観したうえで要約すると、複式炉とは単式炉に相対する概念であり、丹羽の定義したように「複数の空間によって構成される炉」が最も妥当だということになろう(註8)。そして当然のことながらこの中には複数の燃焼機能や前庭部などと呼ばれる非燃焼機能などといった側面を内包しているのである。複式炉は東北地方南半を中心に調査研究されて来たものであり、且、東北地方南半の複式炉が上原型に代表されるような定型的な構造を持つものであったために、周辺部の複式炉が蔑にされて来た感がある。しかし、目黒も指摘したとおり、岩手県を中心として石組複式炉が分布しており、更に岩手県北部から青森県にかけては前庭部付石組炉（沢部型複式炉）が分布している（註9）。石組複式炉はいくつかのタイプに分けられるが、埋設土器を伴わない・敷石を伴うものが少ない・ほとんどのものが前庭部などと呼ばれる付属施設を有しているという共通する特徴を持っており、複式炉自体の出現、発展、衰退という過程にほぼ連動して推移していることが指摘できる。つまり、岩手県を中心として分布する石組複式炉は複式炉の１地方相としてとらえることができるわけで、このことは同様に上原型複式炉についても指摘され、影響力の強弱は別として少なくとも南北に２つの地方相の対峙が相定できることになる。岩手県北部から青森県に分布する前庭部付石組炉はやや遅れて出現することからも、石組複式炉の一部から派生したものとして捉えられる。

石組複式炉は中村により２種に分類されている。Ａ類は前庭部を有する石組炉で、Ｂ類は複

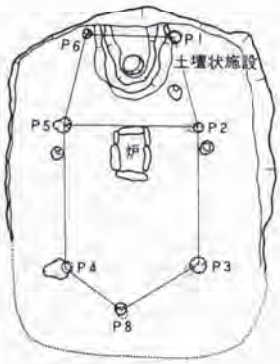
数の石組炉を有し、ほとんどに前庭部が付属する。A類は従来〝複式炉の祖型〟あるいは〝複式炉系列〟などと総称されて来たものであるが、複式炉を「複数の空間によって構成される炉として定義した以上複式炉に含めて良いことになる。むしろ前庭部などの施設が付属することで以前の単式炉とは明確に区別される。また、〝複式炉の祖型〟については確かに大地渡遺跡や本遺跡のように大木８ｂ式の最終末～大木９式初頭の遺跡に伴う複式炉の炉は１基であることからより古いタイプと言えるし、A類を母胎としてB類が発生したとする指摘は的を得たものと言える。しかし、同時にA類はB類と完全に交代せずに岩手県内でもわずかずつではあるが大木９式～大木10式に伴い出現していることも看過することができない。おそらくA類は（岩手県北部から青森県の前庭部付石組炉も含めて）石組複式炉の中でのひとつの基本的タイプとして再認識される必要があるかと思われる。

ここで本遺跡から検出された複式炉に再び目を向けると、２列とも炉は１基であり基本的には中村のA類に類似するものであることが言える。しかし、決定的には異なるのは前庭部の反対側にも何らかの付属施設を有することであり単に形態上の比較だけでは〝狭義の複式炉〟に類似している。第１号竪穴住居跡の場合はⅠ部としたところに蓋石を伴う浅い皿状のピットがあったが全く焼成は受けておらず、内部には灰や焼土粒をわずかに含む炭化物層が堆積していた。また、第２号竪穴住居跡ではⅠ部に円形のピットを掘り込み、部分的に土器片を貼り付けている。Ⅰ部については両者とも焼成を受けていない事から炉とみなすことは出来ない。しかし、もしも蒸し焼きのような利用法が想定されるとしたら、それまで否定することは出来ないかと思われる。更に第１号住居跡については、埋土の状態から火種の確保や炭・灰などの一時的保管場所などの機能も考えられる。Ⅰ部はⅡ部と同一の掘り方（掘り込み）を分割する形で構築され、当初より目的的に付加された施設のようであるが、本遺跡では残念ながら性格を確定することはできなかった。

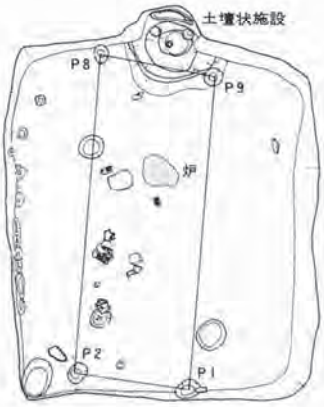
出入口

次に第１号竪穴住居跡では炉と反対側の隅に弧状の張り出しを伴つがこれを出入口状の施設として考えた。この張り出し部はわずかながら段差を有することで床面より明瞭に区別されている。また、張り出し部には柱穴２口と土器を埋設したピットが伴っている。２口の柱穴間は入口そのものに相当すると思われ、土器を埋設したピットは中部地方などで多数検出されている埋甕に出土状況が類似するものと思われる。

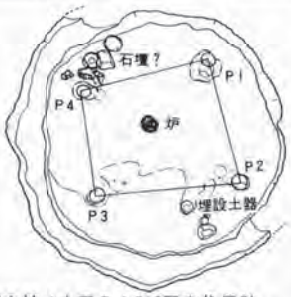
岩手県内で複式炉を伴う竪穴住居跡で他に出入口状の施設が報告されたものとしては都南村湯沢遺跡が代表例となろう。湯沢遺跡では中期末葉に伴って単式炉のほかに斜位土器埋設複式炉と呼ばれる極めて特徴的な炉が検出されているが、これらの炉は住居跡の中央から一方の壁に寄り、一部の住居跡はその炉に近い壁際に「出入口」状施設が伴うという。この「出入口」状施設とは壁際の床面に長大な礫２個を壁に直交し住居跡中央部を向くように埋置されたもので、この他に「礫間に１個の礫を伴うもの、礫の１個の外側に立石を伴うもの、礫間に浅皿状の窪みを伴うもの」などがあるという（註10）。湯沢遺跡の「出入口」状施設が存在する場所は複式炉において前庭部の存在する場所に相当している。そして、床面に配置される礫は前庭部側縁に配される礫に類似し、礫間の浅皿状の窪みは前庭部の掘り込みそのものに類似しているように思われる。ただし、以前のものと比較するとかなり退化した感じを受けることは否めない。



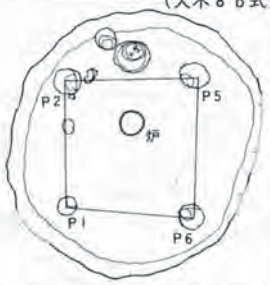
1 大館町ＲＡ314竪穴住居跡
（大木７ｂ式－大木８ａ式）



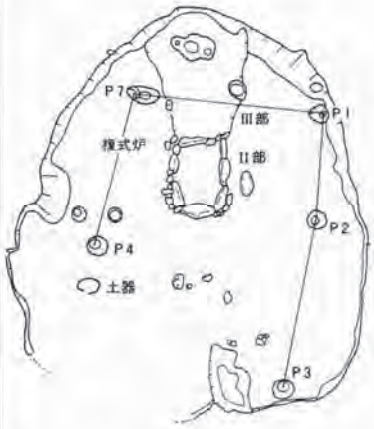
2 一戸町馬場平Ⅱ遺跡
Ｃ16竪穴住居跡
（大木８ａ式）



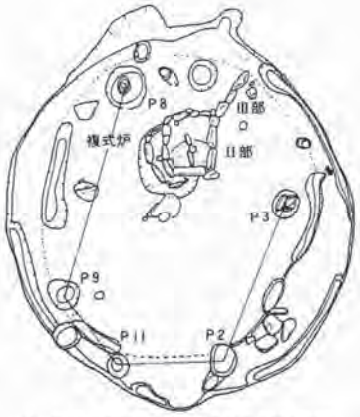
3 盛岡市柿ノ木平ＲＡ010竪穴住居跡
（大木８ｂ式）



4 盛岡市柿ノ木平ＲＡ013竪穴住居跡
（大木８ｂ式）

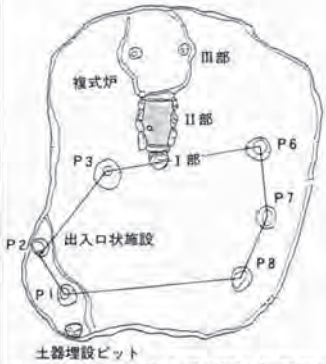


5 石鳥谷町大地渡遺跡Ｅｄ65住居跡
（大木８ｂ式）

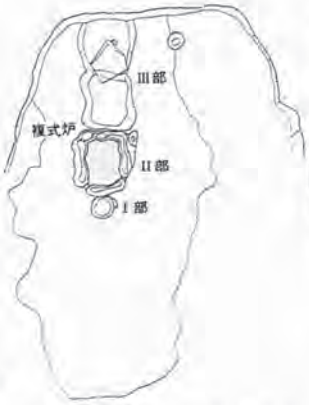


6 石鳥谷町大地渡遺跡Ｄｂ59住居跡
（大木８ｂ式）

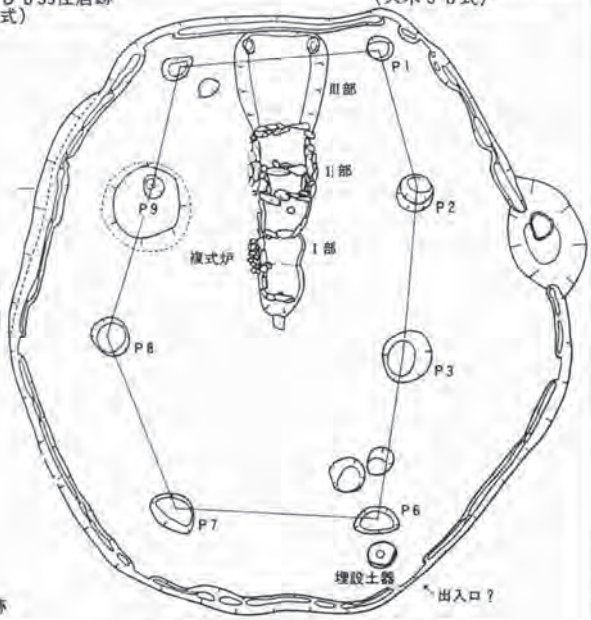
7 石鳥谷町大地渡遺跡Ｄｆ53住居跡
（大木８ｂ式）



8 宮古市トロノ木Ⅰ遺跡第１号竪穴住居跡
（大木８ｂ式）



9 宮古市トロノ木Ⅰ遺跡第３号竪穴住居跡
（大木８ｂ式）



10 大迫町観音堂遺跡第11号住居跡
（大木９式－大木10式）

第38図　竪穴住居跡集成図Ⅰ（本文関連資料）

湯沢遺跡の「出入口」状施設を前庭部の退化形態を認めたうえでなお「出入口」状施設であるとすれば、複式炉における〝前庭部出入口説〟のひとつとしてこれに包括されるものとなろう。いずれにしろこれは本遺跡で想定した出入口とは全く反対側に位置し、相容れぬことになる。

そもそも前庭部の前庭部たる所以は、炉に対しての〝前庭部〟であり、奥処に対する出入口としての〝前庭部〟であろうと思われる。しかし、果してそうであろうか。複式炉を持つ竪穴住居跡のなかには掘り込みの深いものも多く、検出面から床面まで数十cm、同様に前庭部底面までで70～80cm程の深さを有する例もある。このように竪穴住居跡の最も深く出入の困難な場所を選んで出入口とする理由は何であろうか。出入口として前庭部を利用するならば、床面に盛土し高めることはあっても掘り込む理由は特に考えられない。

ところで、本遺跡のように前庭部と反対側に出入口を想定される類例や、この部分での遺物の特殊な出土例としては次のものを挙げることができる。

1．石鳥谷町高畑遺跡ＧＥ53住居跡　炉と反対側の１隅で周溝が長さ約１ｍにわたり途切れている。（大木10式）（第39図11）

2．大迫町観音堂遺跡第11号住居跡　炉と反対側の１隅付近に正立の埋設土器があり周溝も途切れている。（大木９式）（第38図10）

3．都南村湯沢遺跡Ｅ２－15住居跡　炉と反対側に埋設土器が伴う。（第39図14）

また、前庭部付近での遺物の特殊な出土例として次の事例を挙げることができる。

4．大迫町観音堂遺跡第23号住居跡　前庭部から石棒が出土。（大木10式）

5．大迫町観音堂遺跡第１号住居跡　前庭部と住居跡壁際に径35cm程の河原石２個が壁に平行して置かれていた。（大木９～10式）

6．都南村湯沢遺跡ＧⅡ－16住居跡　報文での「出入口」状施設（前庭部に相当？）に立石が伴う。（大木10式）（第39図13）

7．都南村湯沢遺跡ＧⅡ－15住居跡　同上の位置に埋設土器が伴う。（大木10式）（第39図14）

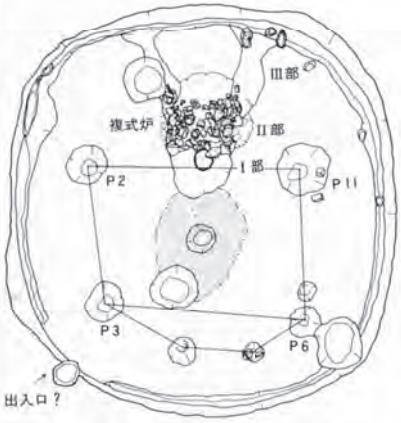
8．宮古市白石遺跡第１号竪穴住居跡　炉Ⅲ部（前庭部）に三角柱状の立石を埋設。（大木10式）（第39図15）

9．宮古市白石遺跡第２号竪穴住居跡　同上。（大木10式）（第39図17）

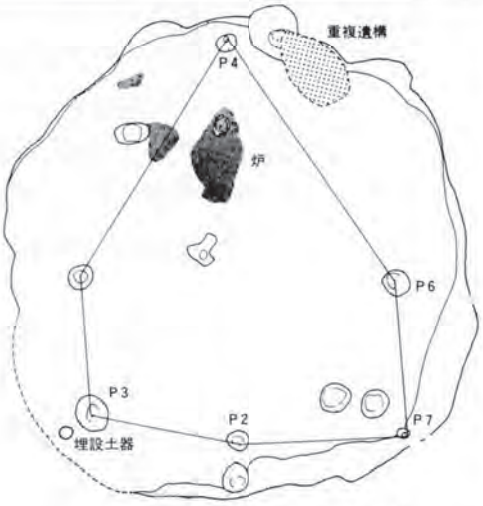
10．宮古市白石遺跡第３号竪穴住居跡　同上。（大木10式）（第39図16）

これらの事例から、少なくとも前庭部付近と、これと反対の炉から離れた部分の２箇所に何らかの特殊な遺物が出土していることがわかるが、前者は石棒や立石を中心とするもので、後者は埋設土器を中心とするもののようである。このような遺物の出土状態は基本的には中部地方などの縄文時代中期後半の竪穴住居跡に類例を求めることができる。複式炉を持つ竪穴住居跡の場合も、前庭部付近を奥処としここで立石や石棒によりおそらくは炉に深くかかわる祭式が行われ、炉と反対側に出入口を求め、ここで埋設土器にかかる祭式が行われたと理解するのが自然であるかと思われる（註11）。

従って、ここでは前庭部の性格について大筋において梅宮の説に類似するが、細部においては「幼児の遺骨」や「儀礼用の木製品」などではなく立石や石棒などによる祭式が存在した可



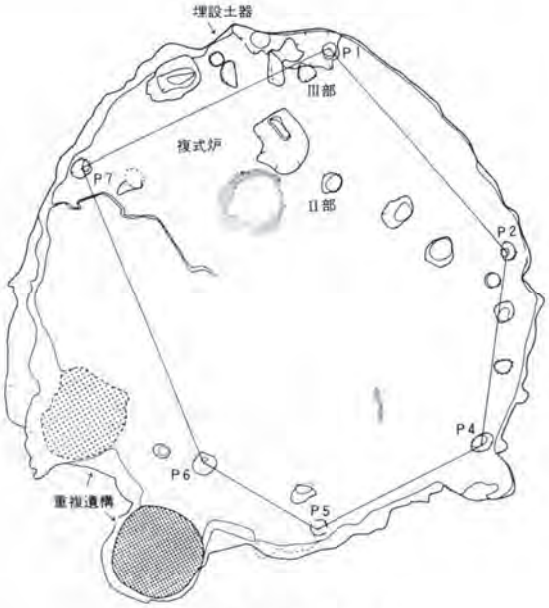
11 石鳥谷町高畑遺跡ＧＥ53住居跡
（大木10式）



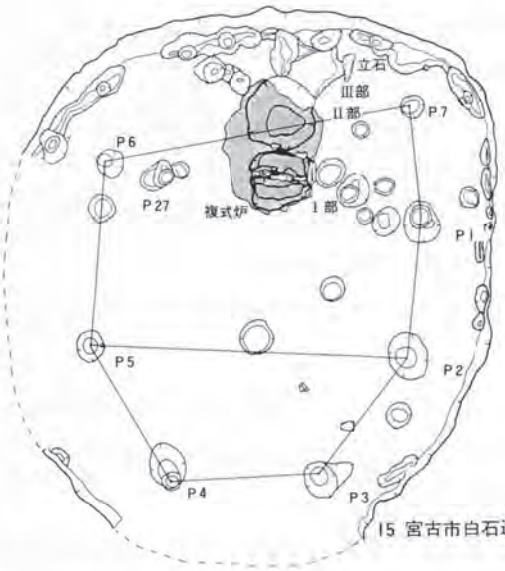
12 都南村湯沢遺跡ＥⅡ－15住居跡
（大木10式）

13 都南村湯沢遺跡ＧⅡ－16住居跡
（大木10式）

※湯沢遺跡ではⅢ部を
出入口と想定



14 都南村湯沢遺跡ＧⅡ－15住居跡
（大木10式）



15 宮古市白石遺跡第１号竪穴住居跡
（大木10式）

16 宮古市白石遺跡第３号竪穴住居跡
（大木10式）

17 宮古市白石遺跡第２号竪穴住居跡
（大木10式）

第39図　竪穴住居跡集成図２（本文関連資料）

能性と中部地方などとの類似性を指摘する。

岩手県内ではほぼ大木７ｂ式～大木８ａ式以降に炉址が大型化し、中央からどちらか一方の壁に寄る現象がみられることは多くの指摘するところである。また、こうした動きに伴い、炉が寄った方向に何らかの特殊な施設や遺物などが出土する例がみられるようになり、主な事例として次のものを挙げることができる。

1．盛岡市大舘町遺跡ＲＡ314竪穴住居跡（大木７ｂ式～大木８ａ式）　炉に近い壁に土壇状施設が伴う。（第38図１）

2．一戸町馬場平２遺跡　大木８ａ式に伴う竪穴住居跡では土壇状施設などを有するものが多い。（第38図２）

3．盛岡市柿ノ木平遺跡ＲＡ010竪穴住居跡（大木８ｂ式）　炉に近い壁寄りに石壇状の自然石と柱穴以外のピットがあり、これらに伴い浅鉢などの土器が出土。（第38図３）

4．盛岡市柿ノ木平遺跡ＲＡ013竪穴住居跡（大木８ｂ式）　同上の場所に柱穴以外のピットがあり付近から浅鉢やミニチュア土器が出土。（第38図４）

これ以外にも同様な場所に性格不明の掘り込みや柱穴以外のピットなどを伴うものが多い。おそらくこれらの施設は前庭部と密接な関係を持つものと推定されるので、別な機会に資料を集成したうえで論ずることにしたい。また、前庭部という用語も不適当と思われるので検討を要する必要があろう。

(2)遺　物

土　器

調査面積に比較して遺物の出土量は少なく、しかも第４次調査区の遺構や遺物包含層に集中する傾向がみられた。これらのうち、竪穴住居跡や遺物包含層のⅢ層から出土した土器は型式的に、且つ層位的にもまとまりを持つ一群である。この土器群は隆沈線と平行沈線のみにより施文されるもので磨消技法を伴うものがないことや大木８ｂ式に特徴的な有棘渦巻文・大渦巻文・懸垂文などの文様要素を連結し縄文区画を作出することで閉鎖性の強い施文をとることなどを特徴とするものであり、他の遺跡に類例を求めるならば大地渡遺跡出土土器や柿ノ木平遺跡Ｉｂ群土器などが上げられる。この一群は大木８ｂ式、あるいは大木９式に位置づけられてきたが、最近では大木８ｂ式の最終末として位置づけるものが多いようである（註12）。

本遺跡では完形品の出土が少なく、土器組成を云々する資料としては良好なものではないうらみもありこれ以上の詳述は避けるべきであろう。尚、崎山遺跡群内ではこの型式に前後する時期の遺跡が比較的多く、ひとつの画期となっているように思われる。

中期に伴うもの以外には前期前半の大木２式に伴うものと後期中葉に伴うものがわずかずつ出土している。

石　器

石器についてもやはり出土量はあまり多いとは言えない。これらのうち、特殊磨石やチョッパーに類似する礫器は前期以前に伴うものであろうと思われる。これ以外のものはほぼ竪穴住居跡や遺物包含層に伴う時期のものが主体になるかと思われる。

出土した器種にもかたよりが見られ、石鏃、削器、敲打磨石、敲石、石皿、砥石が比較的多

いほかは欠落しているか極めて少ない。この中で、特に敲打磨石に注目したい。他遺跡で出土するものは扁平礫の一側縁に調整剥離を伴う機能磨面を有し、形態的には半円形を呈するものが多い。このため半円状扁平打製石器などとも呼称されている。本遺跡のものは、だ円形の円礫の側縁を全く調整せずに機能磨面としており、特殊磨石にみられるような調整磨面もみられないなどの特徴を有し、周知のものとは異なる新たなタイプのものと言える。このような形態の敲打磨石は宮古市周辺に普通に存在しているようである。ほぼ中期を主体としており、最も新しいものは白石遺跡から出土したもので大木10式に伴っている。

土製品・石製品

土製品、石製品については石棒１点と焼成粘土塊２点のみと極めて少ない。

これらの遺物の出土状況は集落の存続期間の短かさを端的に反映しているものと思われるが同時に、石器の組成が最も基礎的なものだけであることや精神活動に結びつく遺物や装飾品類の欠落などは、本遺跡で最も基本となる生産活動しか行われていないことを示すものと思われる。おそらくは崎山貝塚のような大規模な集落から一時的に分岐した小集落かとも思われるが、今後の調査資料の蓄積を待ち再度検討することとする。

２．歴史時代の遺構と遺物

近世に伴う遺構としては掘立柱建物跡と井戸跡を検出している。おそらく両者は有機的に結びついて機能したものと想定されるが出土遺物が少なく断定は出来なかった。

掘立柱建物跡は緩斜面を削平し平担面を作出したうえで建物跡を構築している。間取りは２間のみで台所（土間）と座敷というような最も基本的な構造の建物跡といえる。しかし、柱穴は掘方、柱痕跡ともに大規模で、建物跡の模造や規模とは極めて不釣合である。同様に漆器を保有することや井戸を伴うと思われることもやはり建物跡の構造や規模とは不釣合であるといえる。付近に母屋のような性格の建物を想定すれば一応納得できるが、これはあくまで推論の域を出るものではない。

また、前述の遺構以外に炭窯跡１基と土坑跡１基を検出しているが、伴出遺物が全く無いことから時期を特定することは出来ない。炭窯跡については地元の古老もこの地点で炭を焼いたという話は聞いたことがないとのことなので、比較的古いもののようだがどこまで上るものかは不明であり、建物跡や井戸跡との関係について言及することも不可能である。

中世以降の調査報告例が希薄な当地方にとって貴重な資料を提示できたと言えるが、やはり今後とも資料の蓄積が必要であろう。

〈註　記〉

註1　梅宮　茂　1960　「飯野白山住居跡調査報告」『福島県文化財調査報告第8集』

2　丹羽　茂　1971　「縄文時代における中期社会の崩壊と後期社会の成立に関する試論」『福島大学考古学研究会研究紀要第1冊』

3　丹羽　茂　1976　「東北地方の複式炉」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編

4　目黒吉明　1982　「住居跡の炉」『縄文文化の研究　8　社会・文化』雄山閣

5　当時岩手県埋蔵文化財センターの高橋文夫らによる。

6　中村良幸　1982「「複式炉」について」『考古風土記』鈴木克彦

〃　1986　『観音堂遺跡－第1次～6次発掘調査報告書』大迫町文化財報告第11集

7　梅宮　茂　1974　「複式炉文化論」『福島考古第15号』福島県考古学会

8　註3に同じ。なお、宮城県上深沢遺跡の報文などでも単式炉に前庭部が付属するものを複式炉として報告している。

9　註4に同じ

10　三浦謙一ほか　1978　『都南村湯沢遺跡』岩手県埋文センター文化財調査報告書第2集

11　岩手県内の複式炉を伴う住居跡では出入口例と反対側の両方に埋設土器が認められ一定しない。しかし、中部地方でもやはり同様な様相を呈するようで、桐原によると本来的な埋甕を出入口部理甕に限定し、奥壁部埋甕、炉辺埋甕を分離して考えている。（桐原健一　1983　「埋甕」『縄文文化の研究　9　縄文人の精神文化』雄山閣　より）

12　丹羽　茂　1981　「大木式土器」『縄文文化の研究　4　縄文土器II』雄山閣

〃　1982　「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書VI』宮城県教育委員会

熊谷常正　1981　「第2回岩手考古学会研究発表会要旨」より

高橋憲太郎ほか　1982　『柿ノ木平遺跡－昭和50・51年度発掘調査報告－』岩手大学考古学研究会編　盛岡市文化財調査報告第23集

〈参考・引用文献〉　（前掲したものは除く）

八木光則ほか　1984　『大館町遺跡群－昭和58年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

〃　1983　『柿ノ木平遺跡－昭和57年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

〃　1985　『柿ノ木平遺跡－昭和59年度発掘調査概報』盛岡市教育委員会

高田和徳　1983　『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書III』一戸町教育委員会

相原康二ほか　1981　『東北自動車道関係埋蔵文化財調査報告書VII』岩手県教育委員会

鈴木優子ほか　1980　『東北新幹線関係文化財調査報告書V』岩手県教育委員会

〃　1978　『東北自動車道遺跡調査報告書I』宮城県教育委員会

SUMMARY

TORONOKI I is in the Sakiyama Site Group north of Miyako, Iwate Pre. The Sakiyama Site Group is located on the Omoto Kyuryo, a coastral terrace 90m-150m above sea level. We have so far discovered twenty eight remains of Jomon Culture there and the majority are of Early~Late Jomon Culture. The Sakiyama shell mound and Ozuke site (shell mound) are famous among the remains and their excavational searches have been going on for many years.

The excavations at TORONOKI I have been done seven times from 1981 to 1985. We unearthed three pit dwellings with pottery from the latest Daigi-8b type of Middle Jomon, together with another pit, and strata containing relics over the valley. We also found remains of a house and a well dating back to Edo or a later period in other place near by.

The fact that the center axes of the pit dwellings of the Jomon Culture point to a certain spot and that the spaces between them are almost equal, suggests that the three dwellings are of the same age. They can be classified as two types, one round with a stone hearth and the other irregular, rectangular, with "a composite hearth" A composite hearth, basically consisting of two spaces, has a variety of combinations. Some have plural hearths and some have one hearth and some other facilities, but in each case they form a unit. Composite hearths developed notably in the Tohoku District in the latter half of Middle Jomon, changing their form in different localities, namely the north style and the south style. The one unearthed at this site, of the north style, is among the oldest.

One of the pit dwellings with a composite hearth has facilities believed to have been used as a doorway. But its location is directly opposite to the place where a doorway would be, urging us to reexamine the current theory.

The house remains from the Edo Period is a very simple structure with only two rooms, built with posts buried in the ground. In one of the post pits we found a bowl shaped film of lacquer(Urushi). The well remain, round and 2, 35m in depth, has a terrace at the lower end, on which they laid stones. However, when discarding the well, they intentionally destroyed the stone structure and buried the well. The soil dug up from the well contains several pieces of wood, fragments of chinaware, a lacquered bowl and lacquer films.

These excavations provide valuable data because matirials of the period affer the Middle Age are scarce.

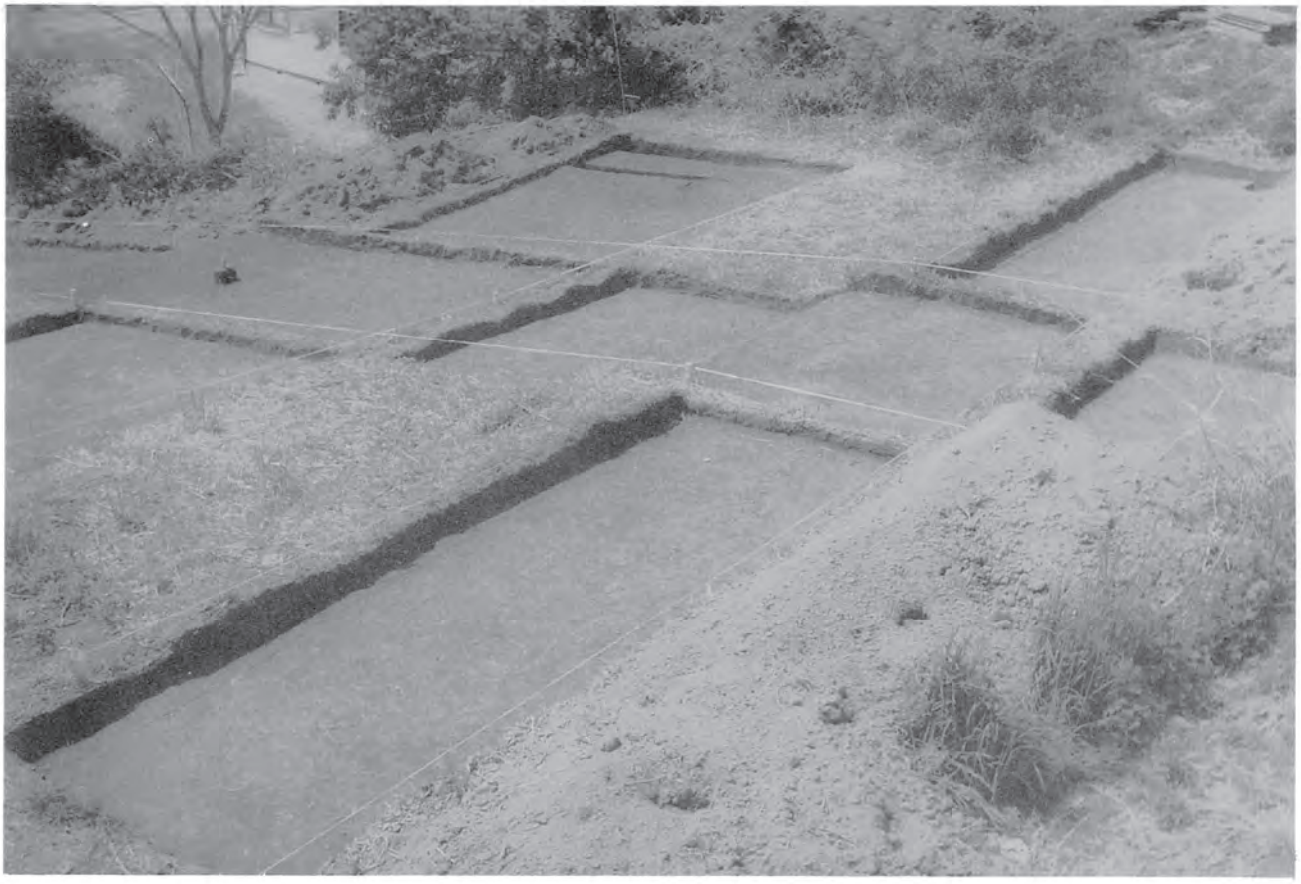
写　真　図　版

第 1 図版

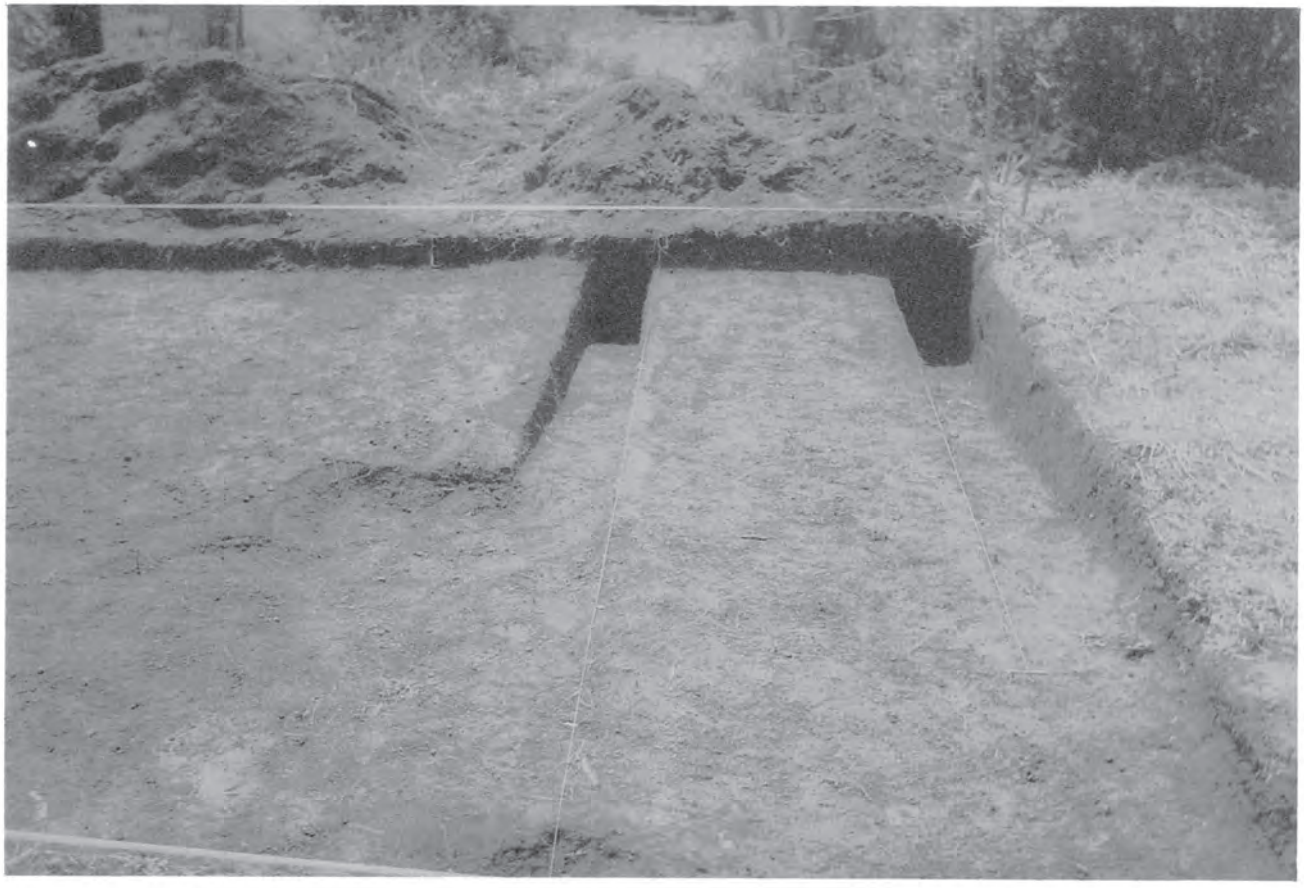
第 I 次　調 査 区

第 I 次　調 査 区

第２図版

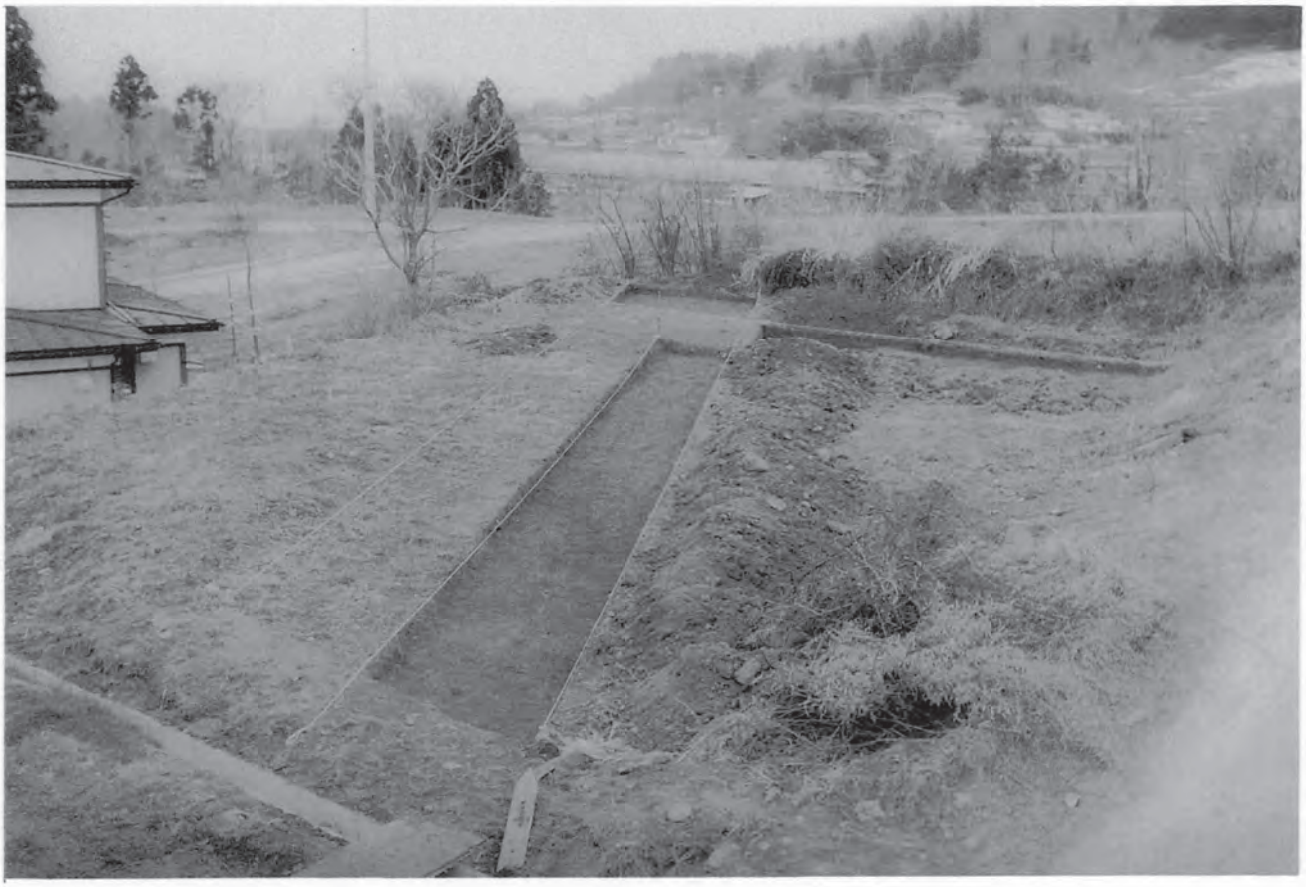


第２次　調 査 区



第２次　調 査 区

第3図版



第3次　調査区

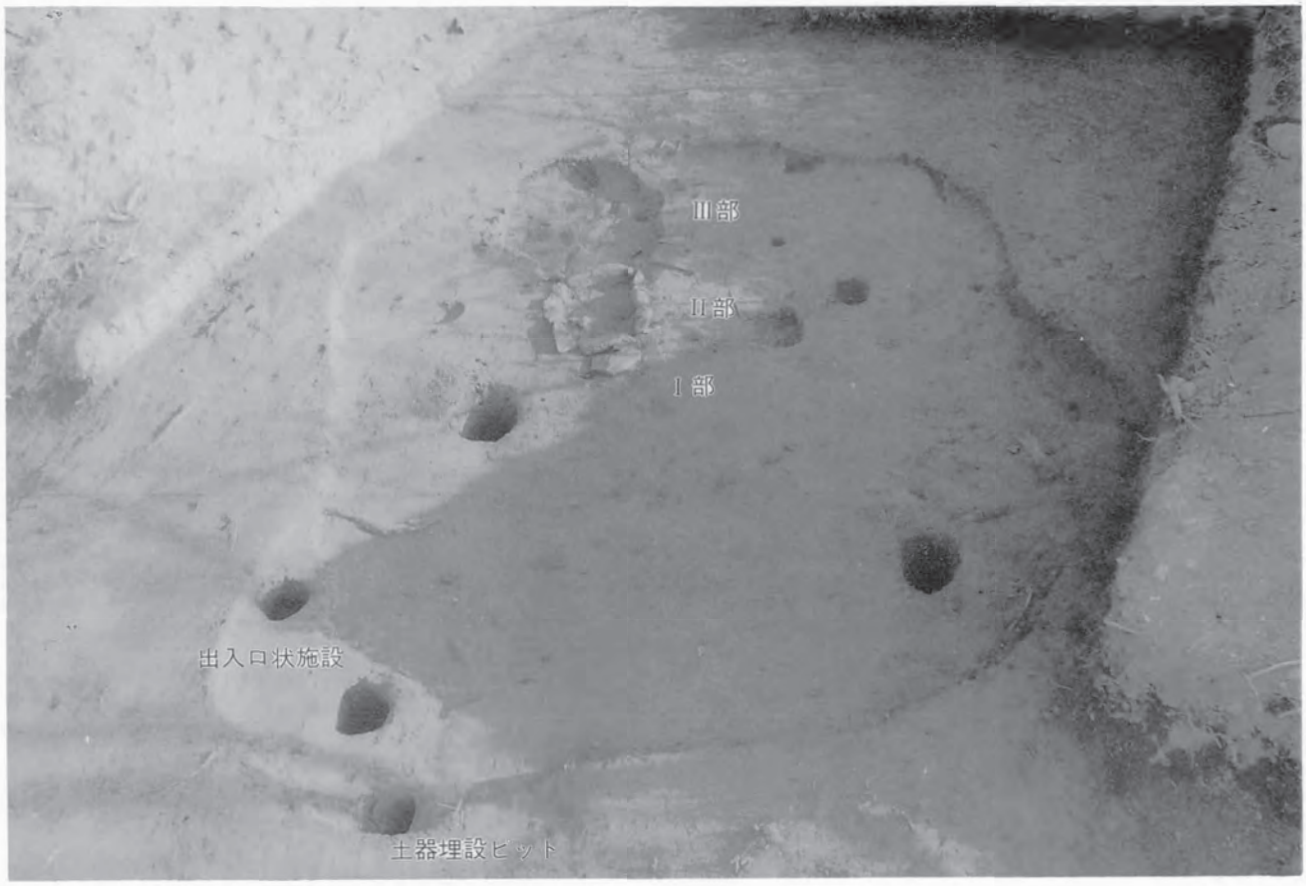
堆積状況

第4 図版

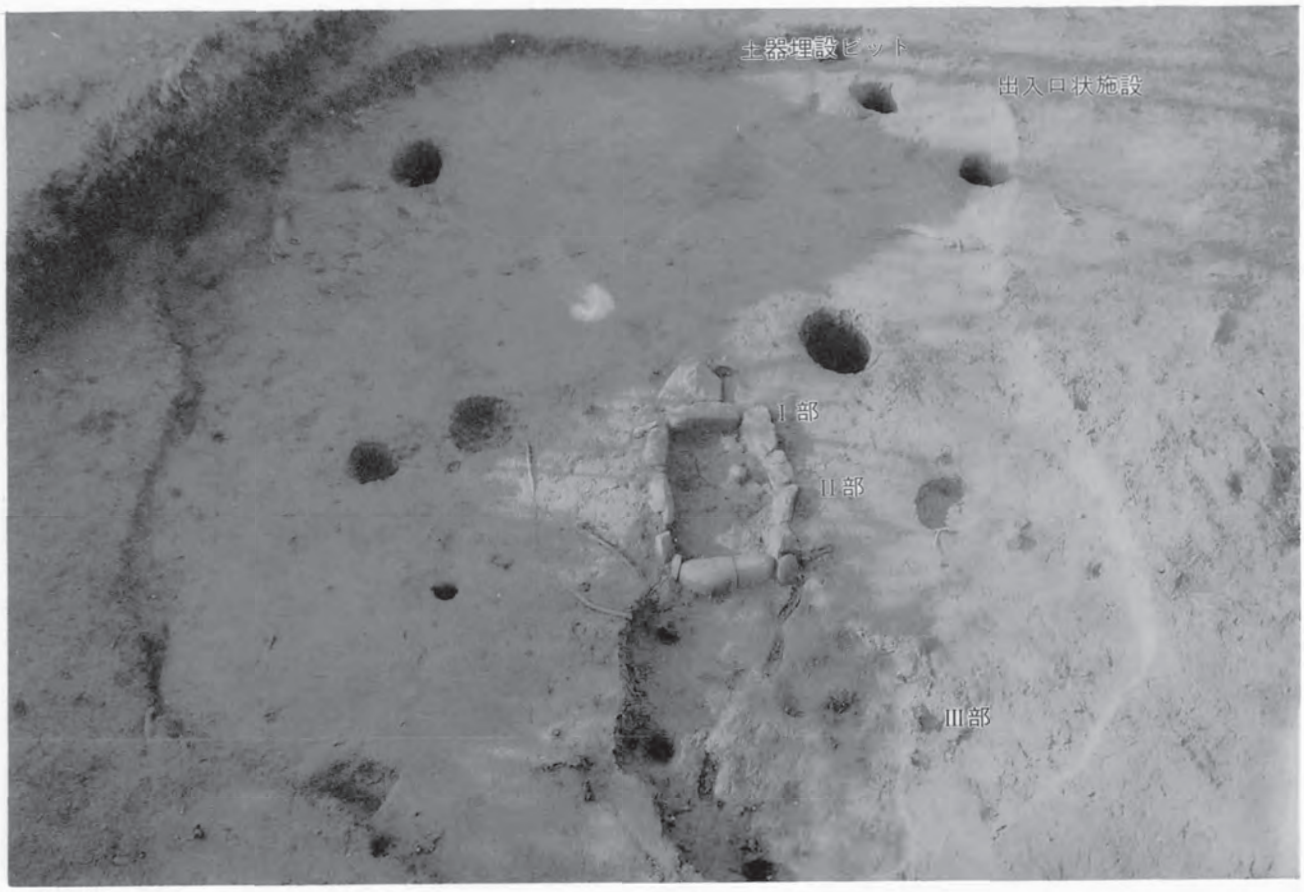
第 4 次　調査区航空写真

第 4 次　調査区航空写真

第5 図版

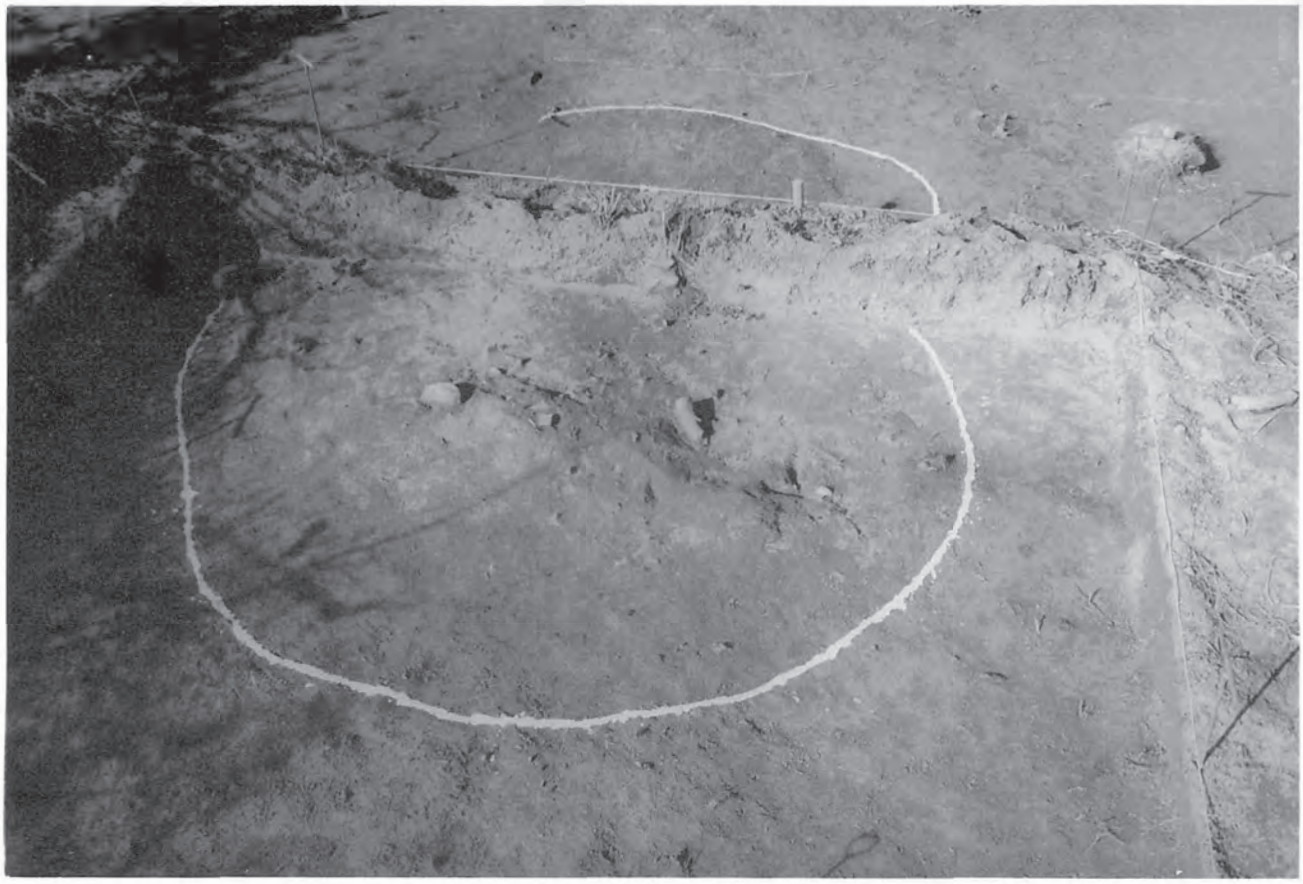


第Ⅰ号竪穴住居跡

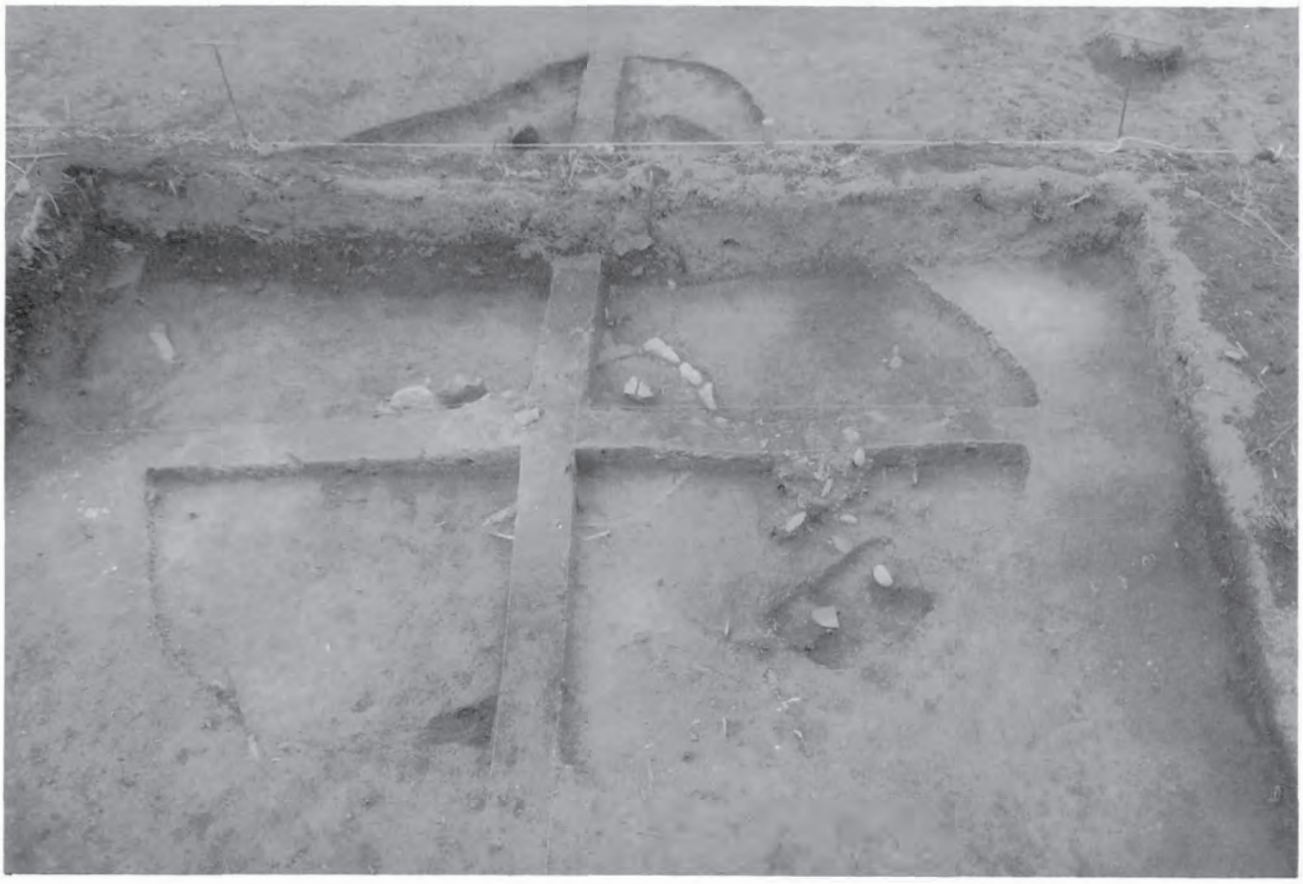


第Ⅰ号竪穴住居跡

第6 図版



第Ⅰ号竪穴住居跡検出状況



第Ⅰ号竪穴住居跡堆積状況

第7 図版

第Ⅰ号竪穴住居跡遺物出土状況

第Ⅰ号竪穴住居跡・炉

第8 図版

第Ⅰ号竪穴住居跡・炉

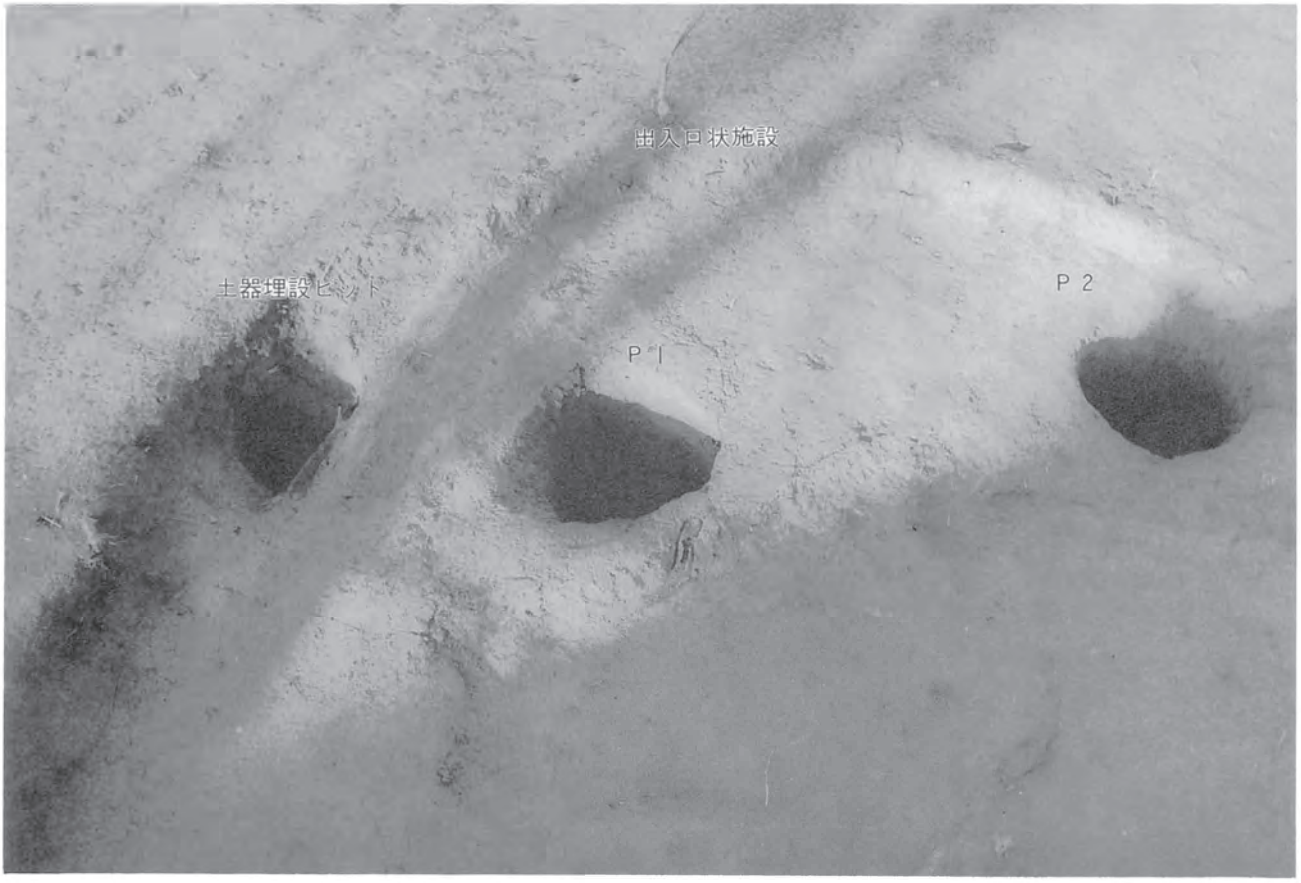
第Ⅰ号竪穴住居跡・炉・堆積状況

第9 図版

第Ⅰ号竪穴住居跡・炉・構築面の状況

第Ⅰ号竪穴住居跡・炉・構築面の状況

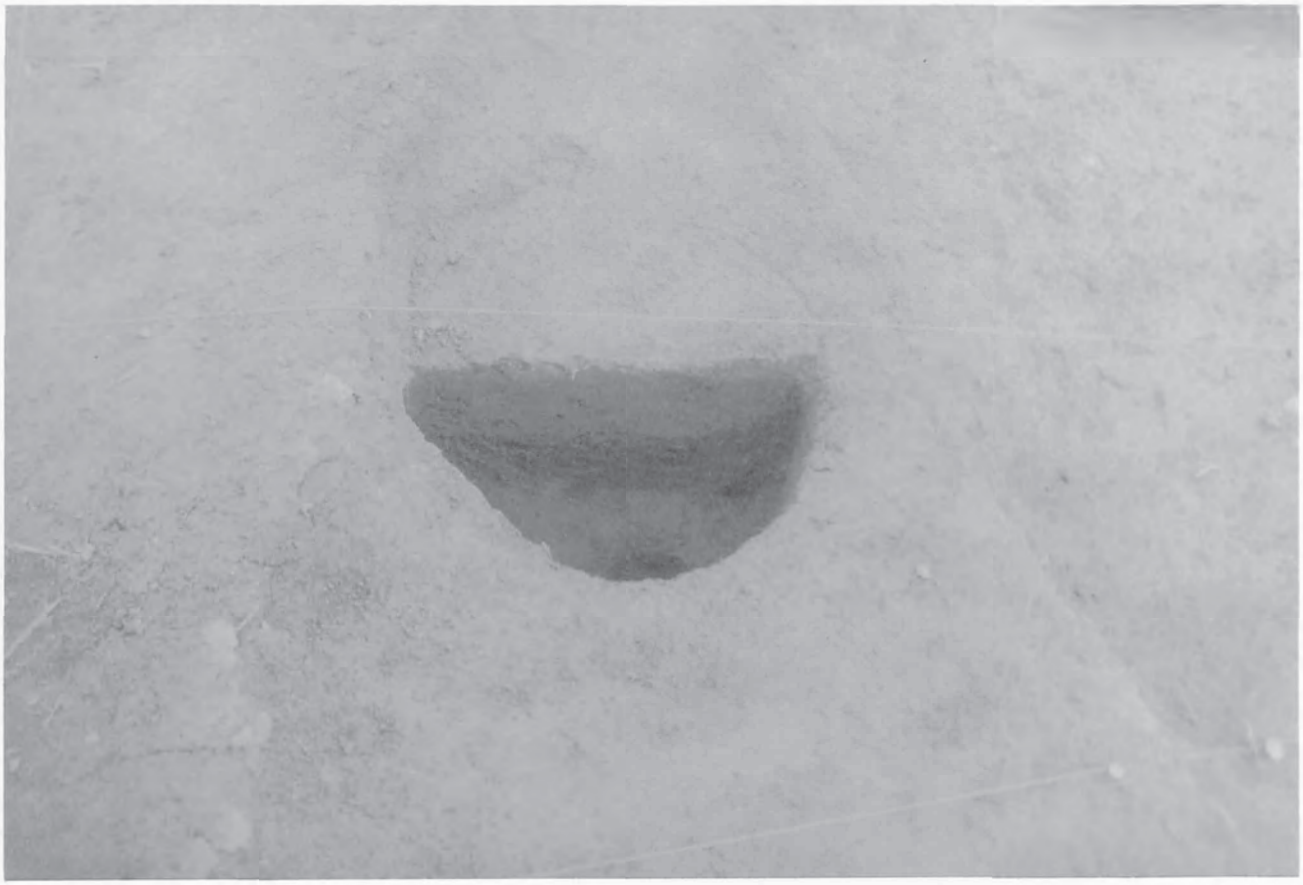
第10図版



第１号竪穴住居跡・出入口状施設

第１号竪穴住居跡・土器埋設ピット

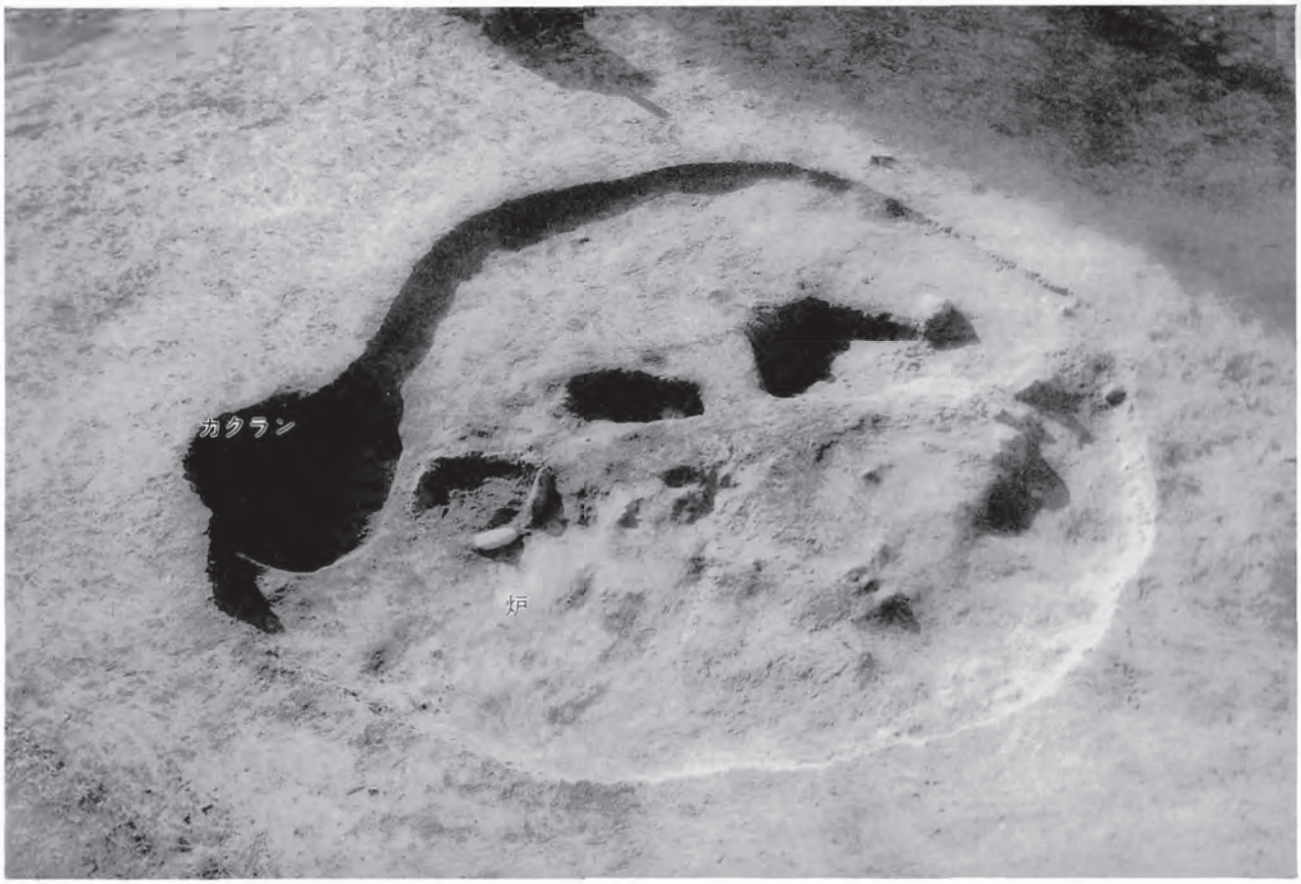
第11図版



第Ⅰ号竪穴住居跡　Ｐ２　堆積状況

第Ⅰ号竪穴住居跡　Ｐ８　堆積状況

第12図版



第２号竪穴住居跡

第２号竪穴住居跡

第13図版

第２号竪穴住居跡・検出状況

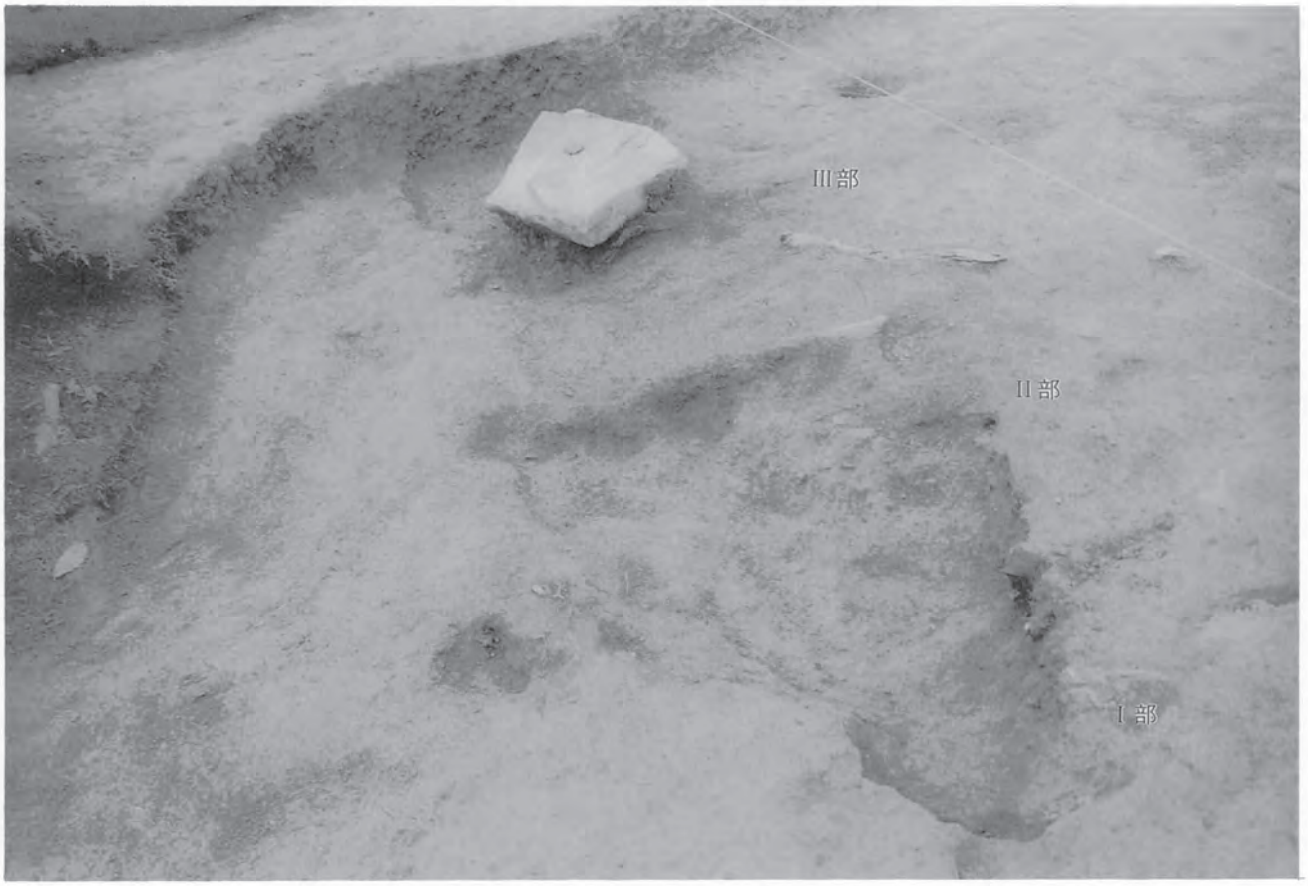
第２号竪穴住居跡・堆積状況

第14図版

第２号竪穴住居跡・炉

第２号竪穴住居跡・炉・堆積状況

第15図版

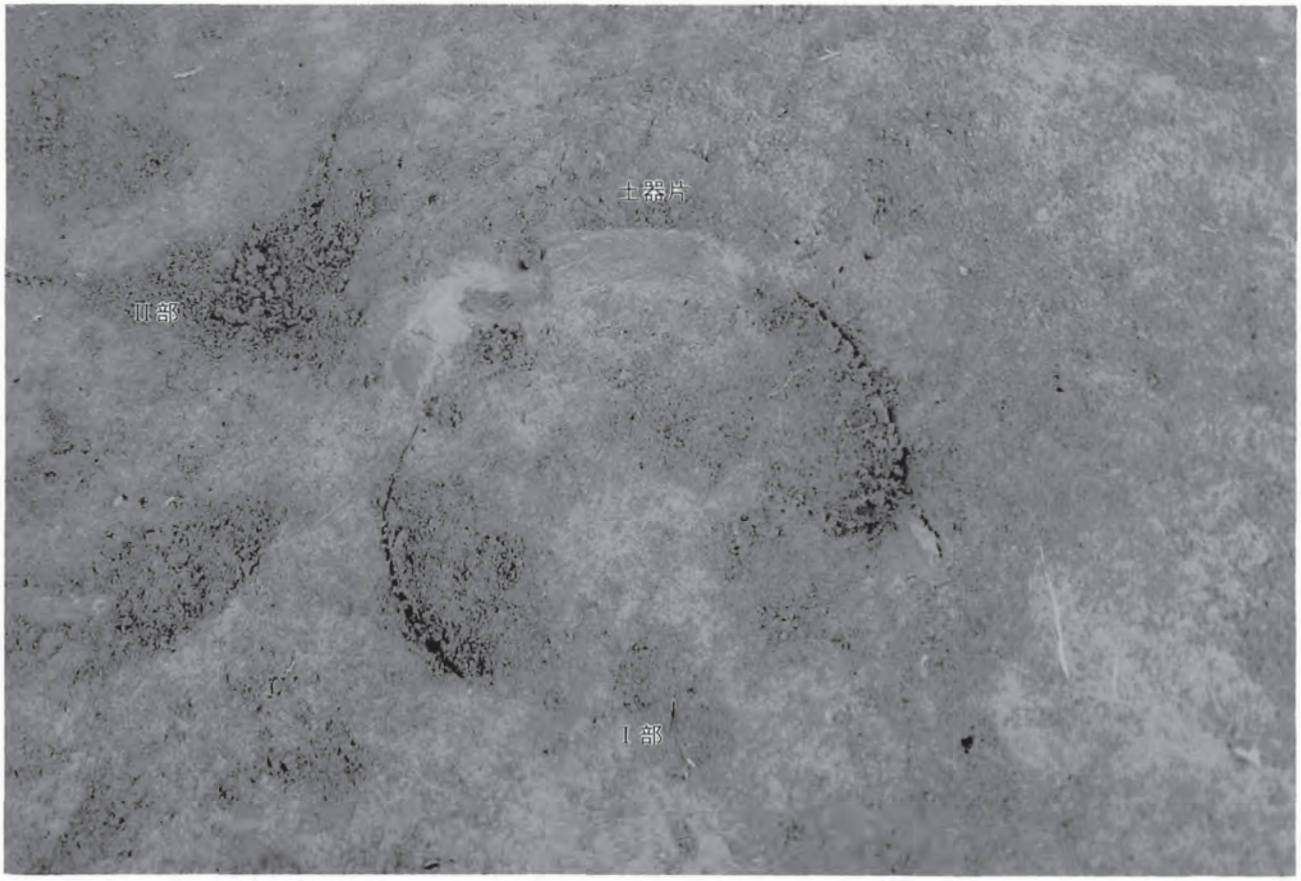


第3号竪穴住居跡・炉・構築面の状況

第3号竪穴住居跡・炉III部

第16図版

第3号竪穴住居跡・炉・堆積状況



第3号竪穴住居跡・炉Ⅰ部・検出状況

第17図版

第Ⅰ号炭窯跡

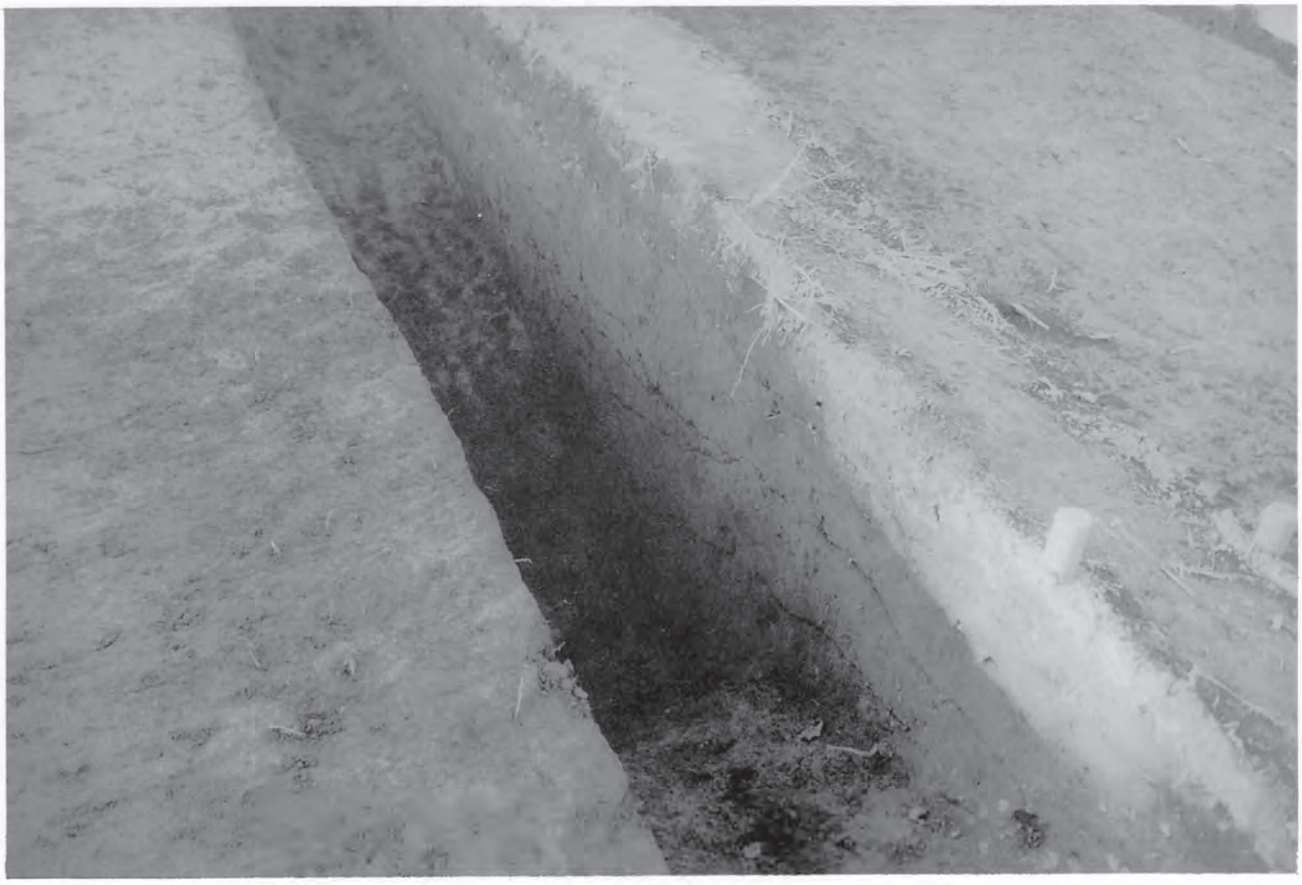
第Ⅰ号炭窯跡

第18図版

第Ⅰ号炭窯跡・堆積状況

第Ⅰ号炭窯跡・堆積状況

遺物包含層堆積状況（16 Line Section）



遺物包含層堆積状況（18 Line Section）

第20図版

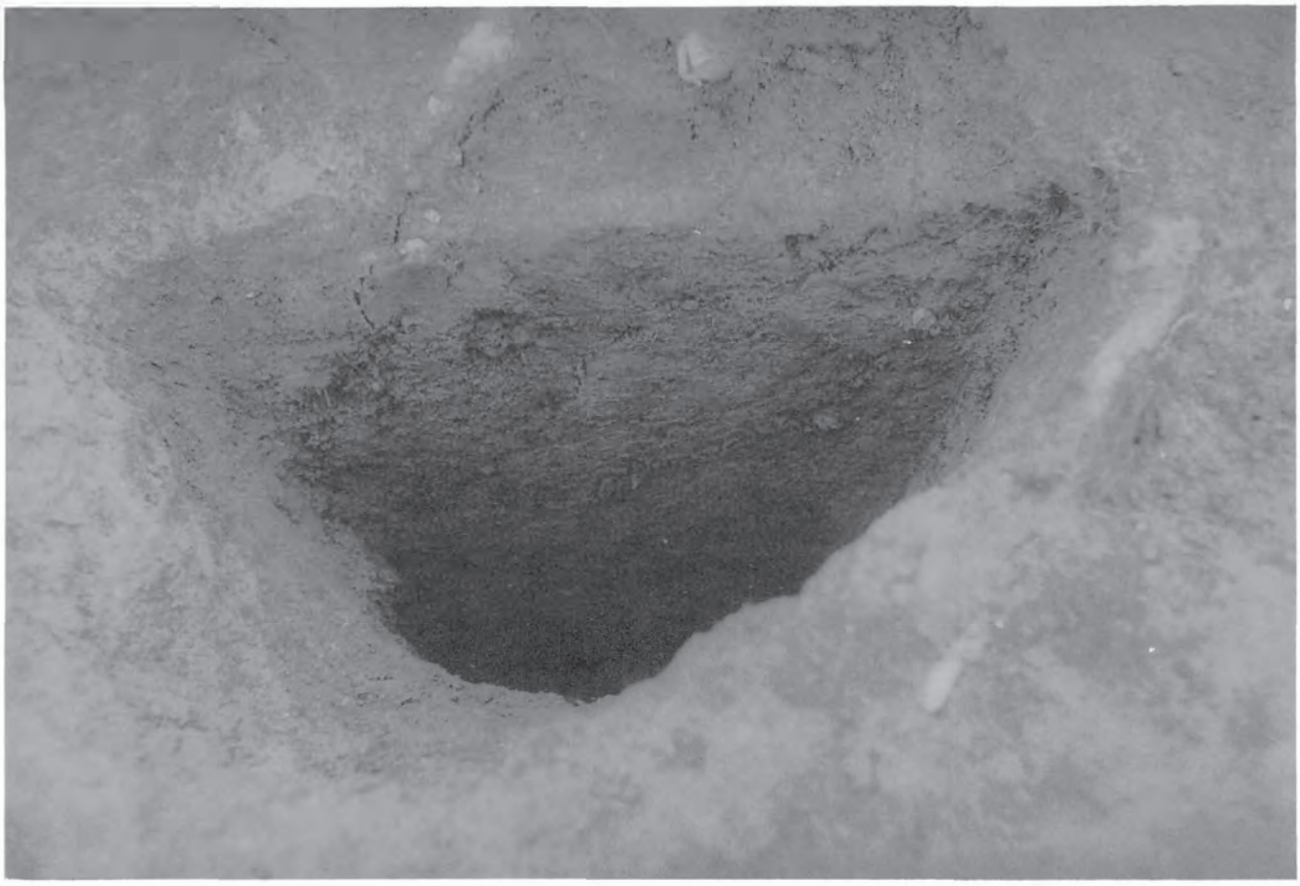
第6次　調査区

堆積状況

第5次　第Ⅰ号掘立柱建物跡

第Ⅰ号掘立建物跡

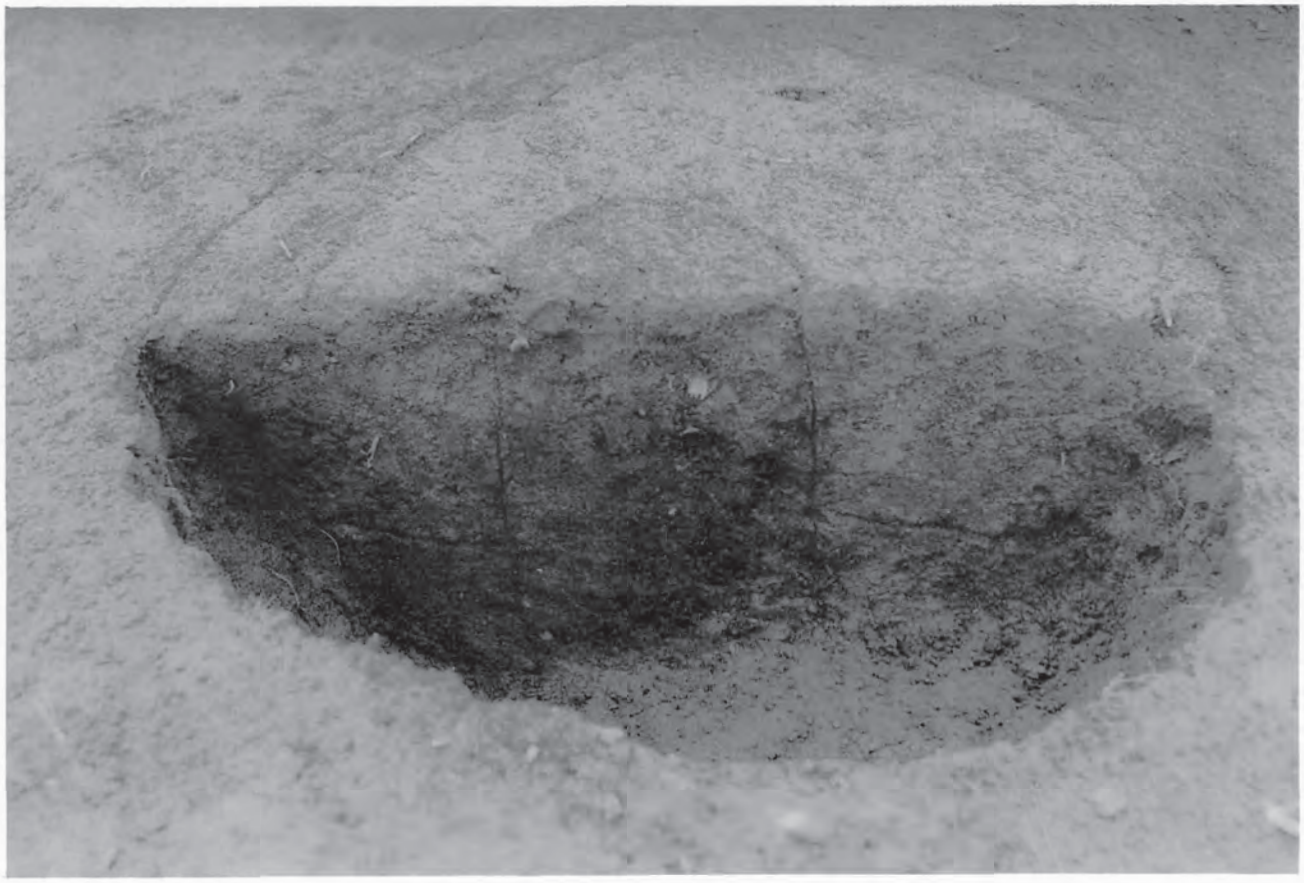
第22図版



第Ⅰ号掘立柱建物跡P-Ⅰ 堆積状況

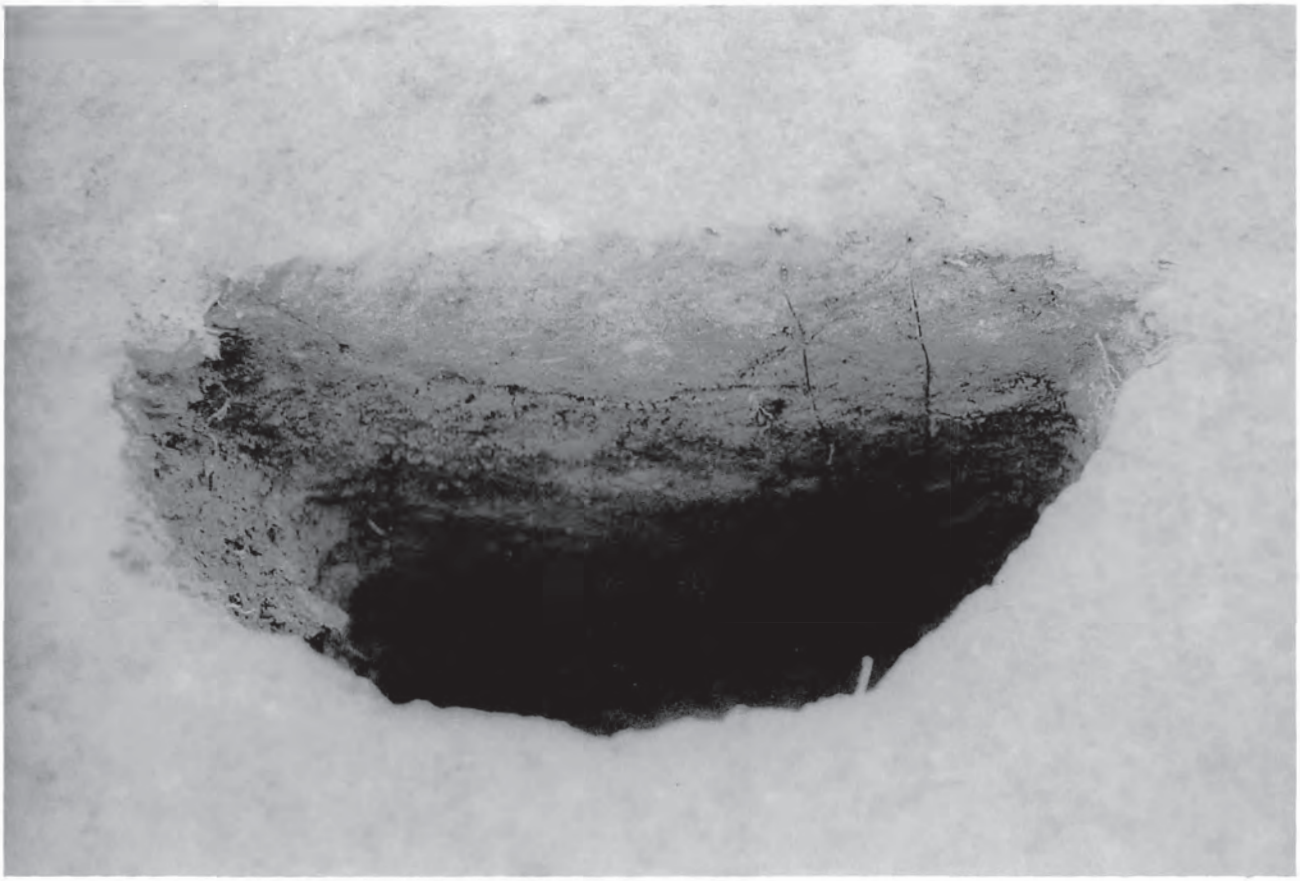
第Ⅰ号掘立柱建物跡P-Ⅰ 漆器出土状況

第Ⅰ号掘立柱建物跡Ｐ-4 検出状況

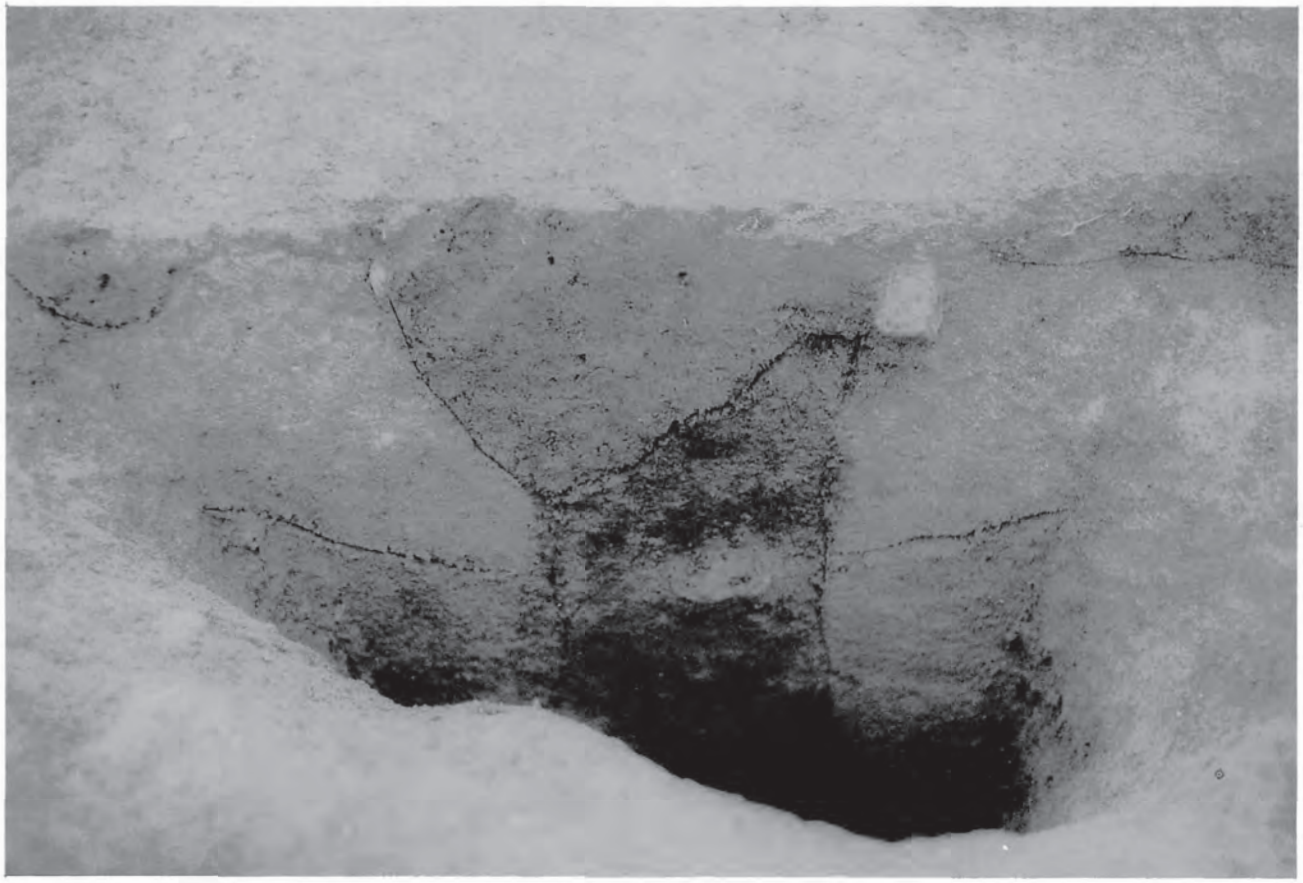


第Ⅰ号掘立柱建物跡Ｐ-4 堆積状況

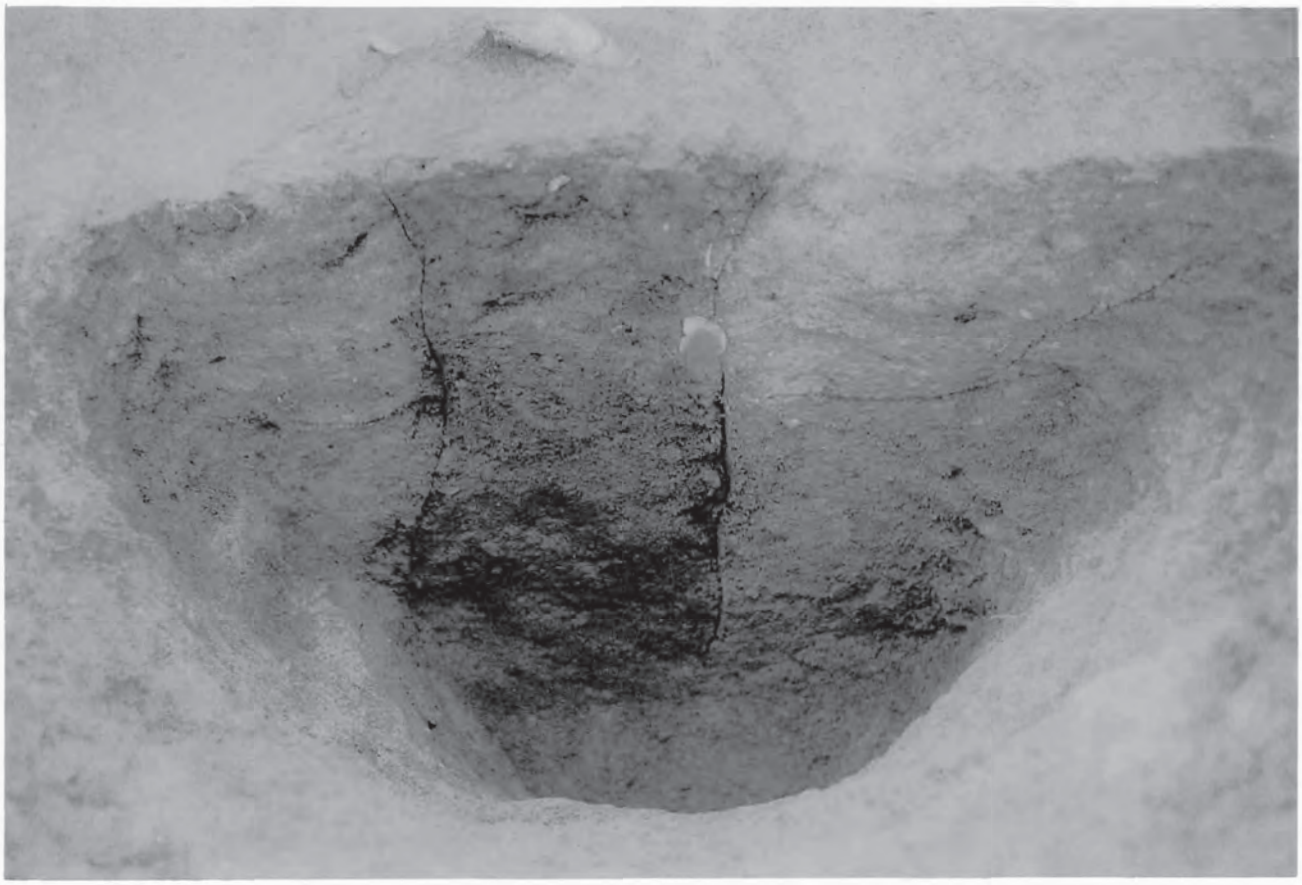
第24図版



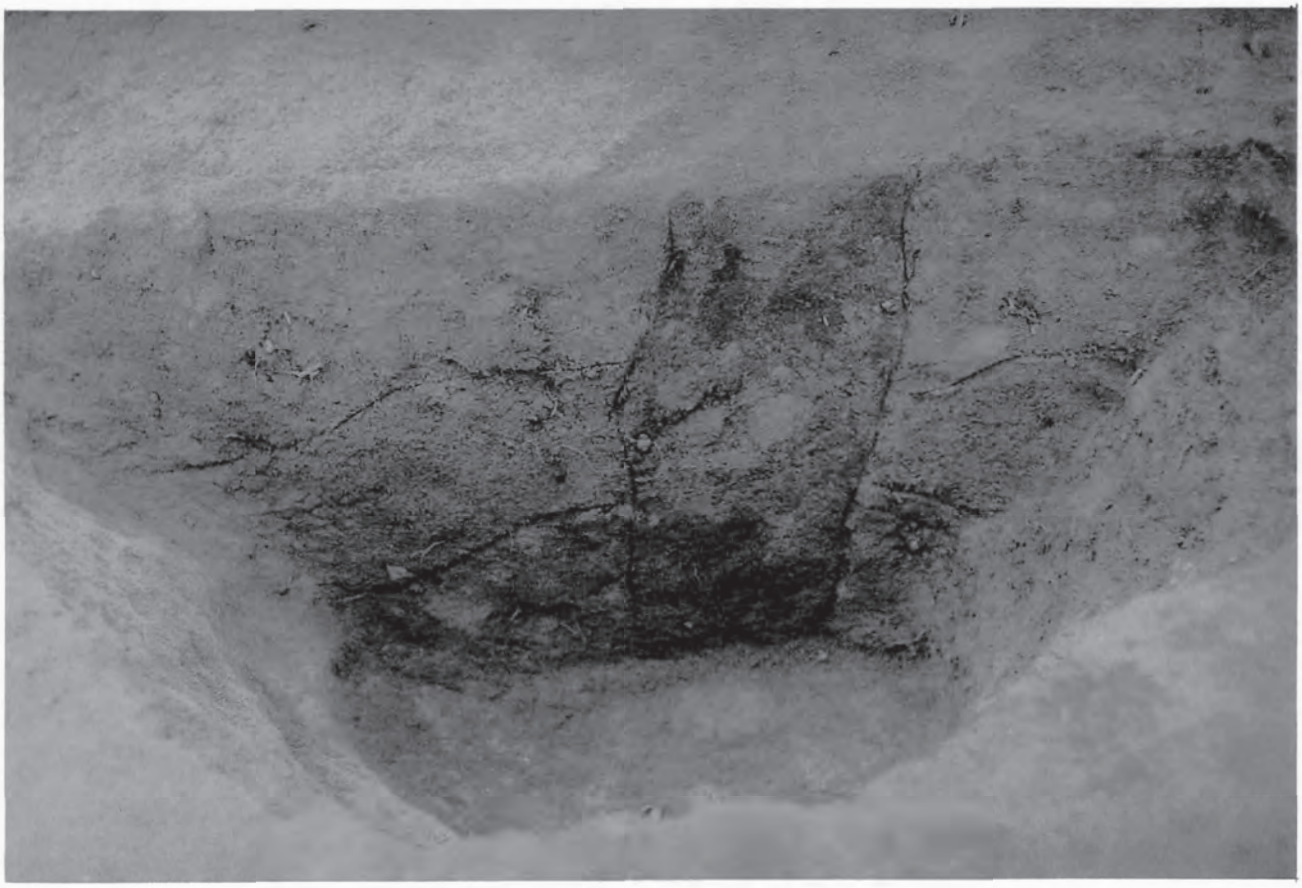
第Ⅰ号掘立柱建物跡P-10 堆積状況



第Ⅰ号掘立柱建物跡P-12 堆積状況



第Ⅰ号掘立柱建物跡P-14 堆積状況

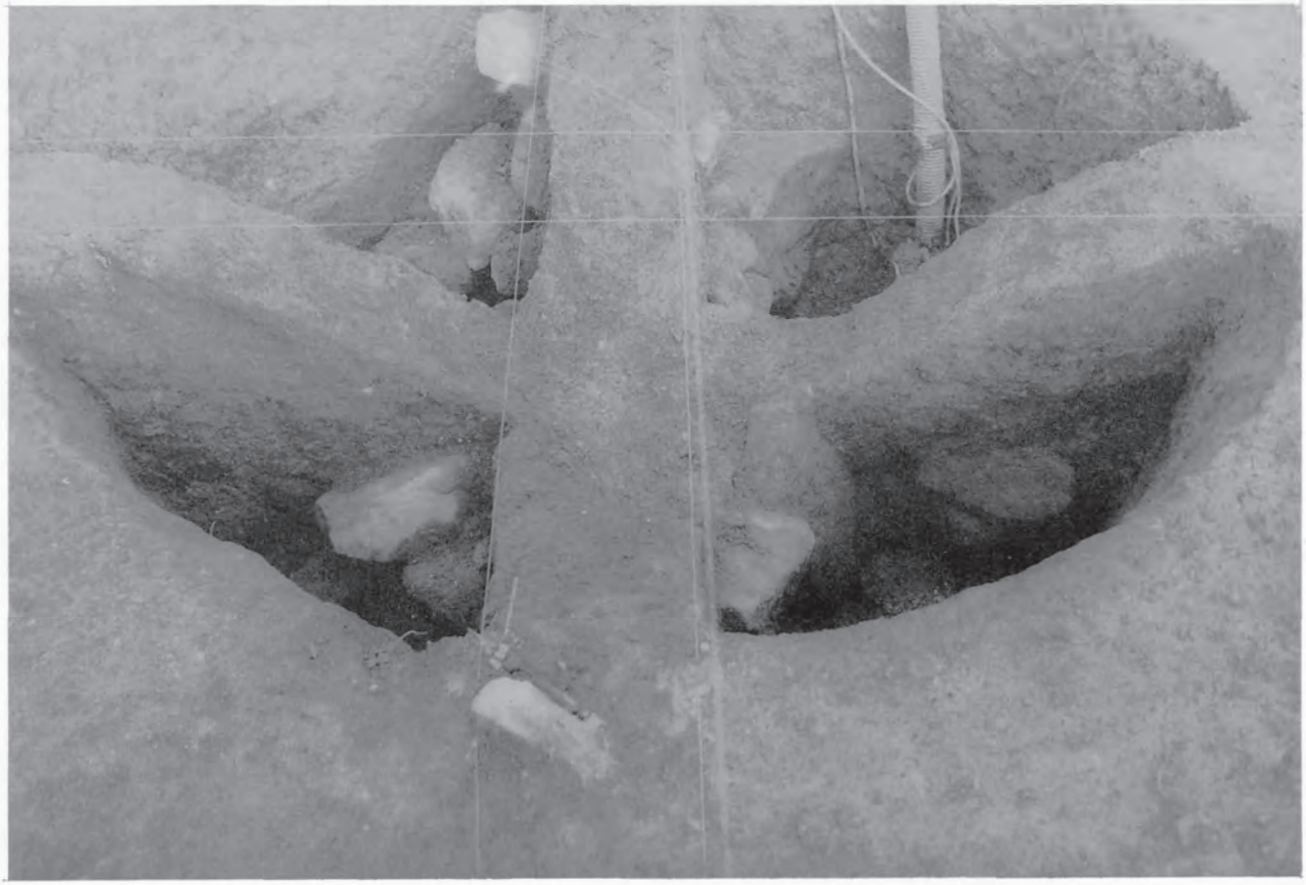


第Ⅰ号掘立柱建物跡P-15 堆積状況

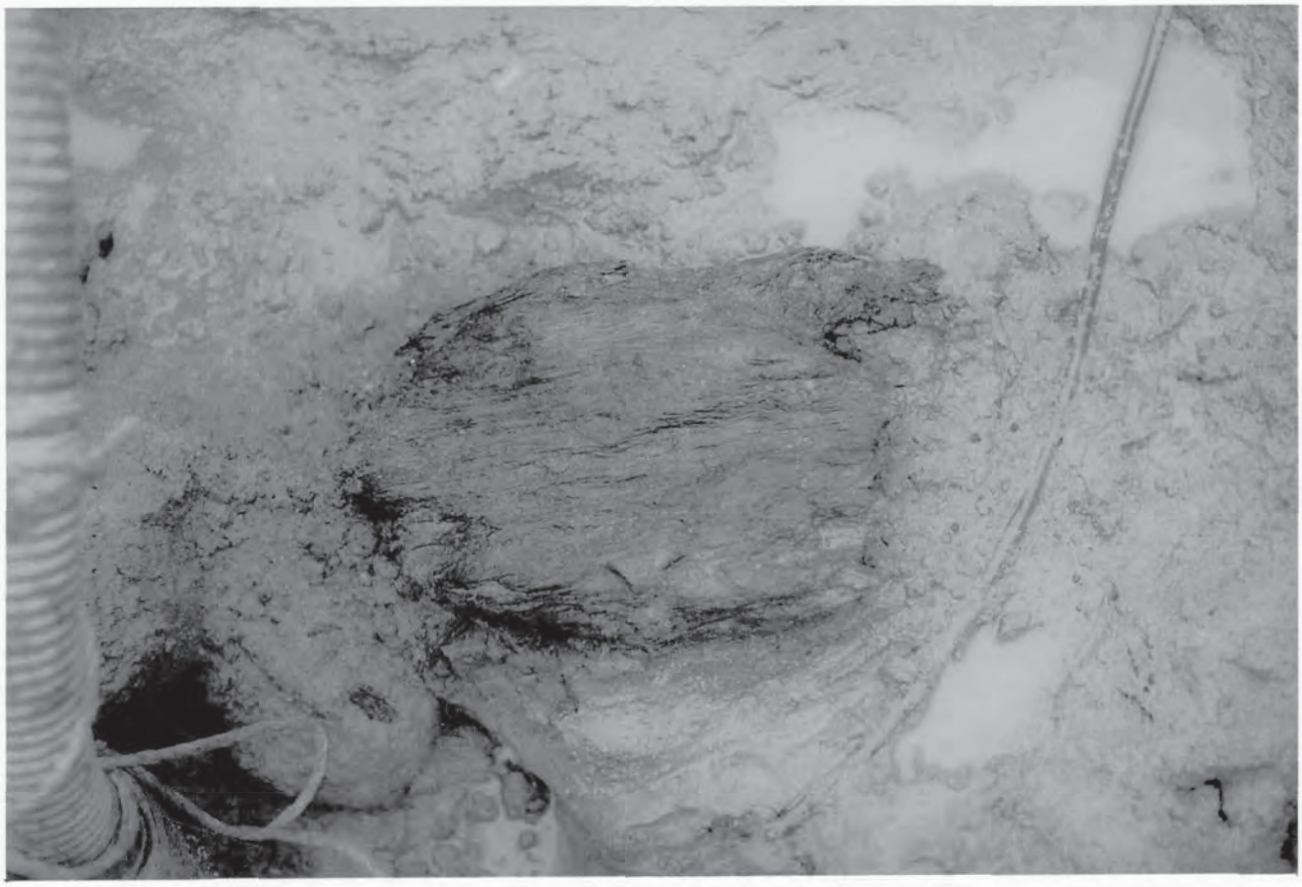
第26図版

第７次　第１号井戸跡・検出状況

第１号井戸跡・Ａ層堆積状況

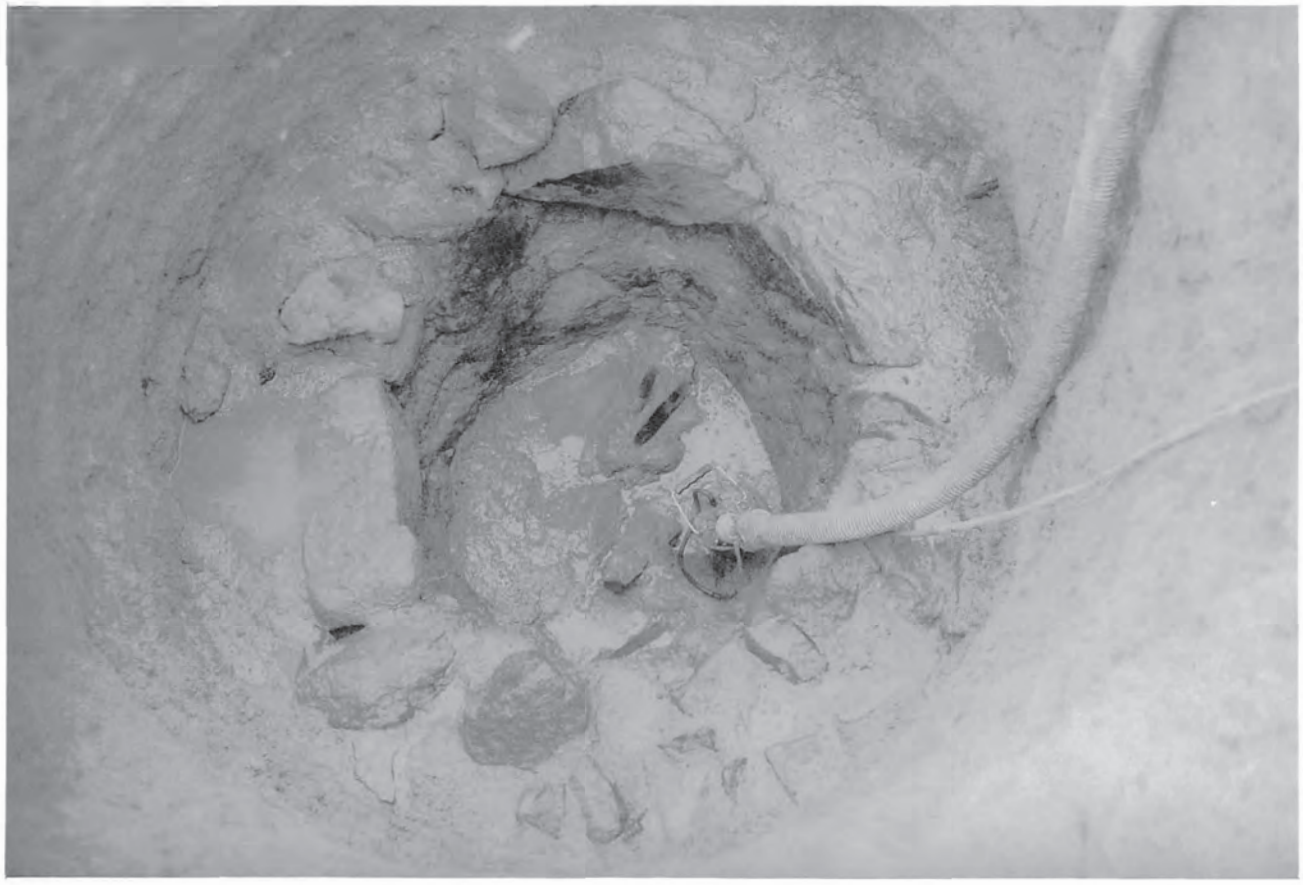


第Ⅰ号井戸跡・B層堆積状況

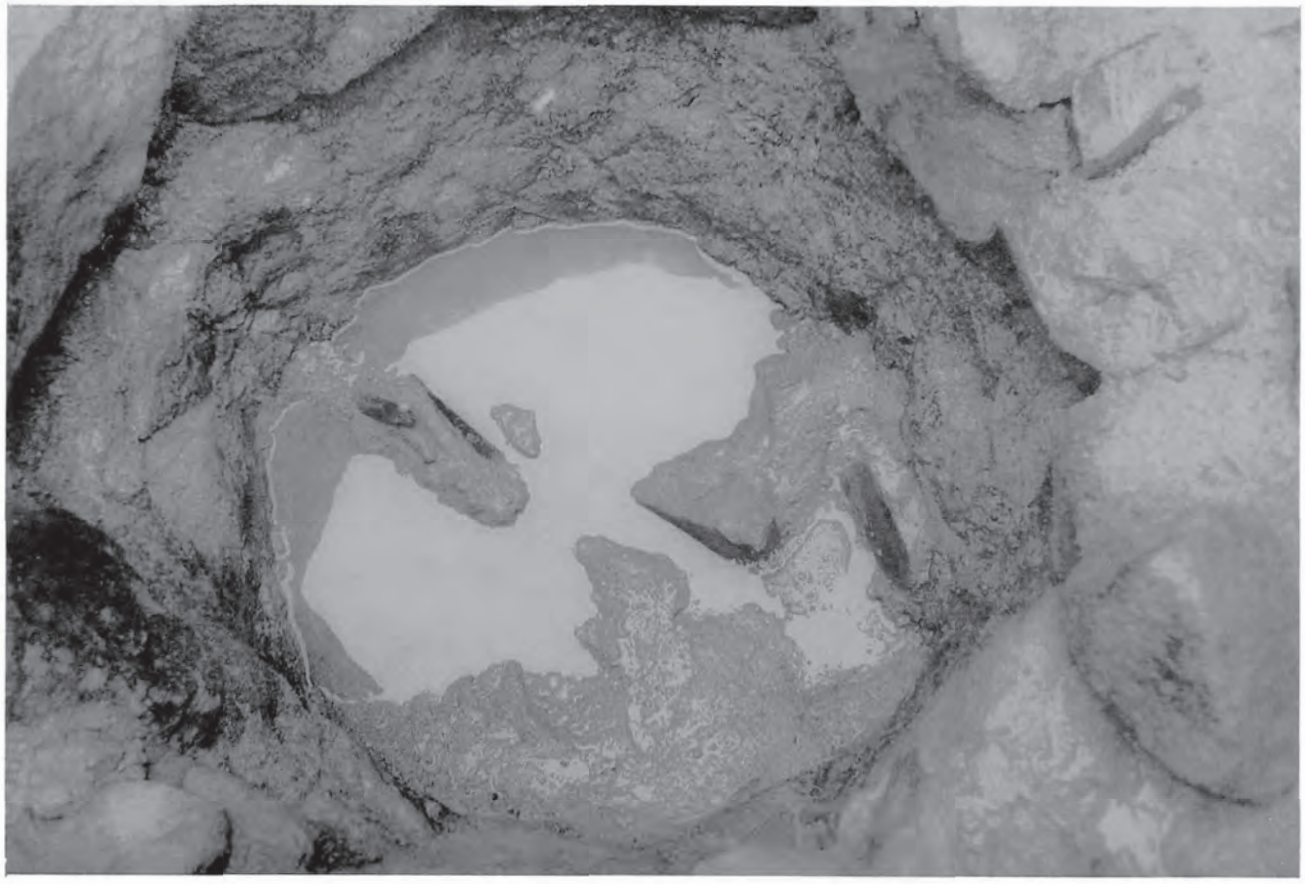


第Ⅰ号井戸跡・B層木材出土状況

第28図版



第1号井戸跡・石組の状況



第1号井戸跡・C層木材出土状況

第1号井戸跡・構築状況

第2号土坑跡・検出状況

第30図版

第2号土坑跡・堆積状況

現地説明会（第4次調査）

宮古市埋蔵文化財調査報告書17

トロノ木Ⅰ遺跡

ー第1次～第7次発掘調査報告書ー

1989.3

発　行　　岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印　刷　　花坂印刷工業株式会社
岩手県宮古市新川町1番2号